
今日も今日とて「はらそーぎゃーてー」

鯖読み兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日も今日とて「はらそーぎゃーてー」

【Nコード】

N9135U

【作者名】

鯖読み兎

【あらすじ】

「ヤマビコなんてただの迷信」などという噂のせいで世知辛い（もしくは退屈な）日々を過ごしていた幼き山彦、幽谷 響子。時に、最近人里離れにできた妖怪寺『命蓮寺』の噂を聞き、一念発起で仏の道に飛び込んでみたものの……。

制作コンセプトは『常に騒動が起き続けるという日常』、もしくは『フリーダム仏教徒』。

『響子ちゃんをにじファンで一番可愛く書く』という野心もちらりほらり。

実質『すべてが挑戦』と化した、そんなお話。
そんな感じの話を書いていきたいと思います。
できれば更新期間短めで。

一話目：響子ちゃん仏道に飛び込む

「ぎゃーてーぎゃーてー」

ここ最近人里の外れにできた、縁起の良いという噂の妖怪寺、命蓮寺。

春風のように颯爽と現れた宝船が寺へと姿を変えたその様は、長らく続いた冬の終わりを象徴しているかのようであった。

ここで言う”冬”とは季節としての冬という意味もあるが、それだけではない。

何百年も続いた地上と地下の交流断絶にまつわる取り決めが効力を失くし、狭い狭い幻想郷がまた少しだけ広くなった。

地底の住民は太陽に憧れ地上を訪れ、地上の住民は地獄跡地見たさに地底を訪れたという。

最初は些細な事からの衝突も何件があったようだが、誰が考えたかも知らないが『今日の他人 さかずき交わせば 明日の友』という唄が示すとおり、

（もつとも、最近の幻想郷においてはこれを少し文字って『今日の他人 弾幕かわせば 明日の友』という唄も流行っているらしいが）

そういったわだかまりはいつの間にか消えて言った。

「はーらーぎゃーてー」

そして”冬の終わり”という言葉が最もよく似合うのは、他でもなくこの寺の住民達であろう。

正体を人と偽り裏で妖怪を助けてきたという咎で、法界に封印さ

れた伝説の尼僧、白蓮。

生粹の妖怪でありながら正体を偽らざるを得ない日々を送った毘沙門天の弟子、星、およびその部下、ナズーリン。

白蓮封印と同時期に、同じく危険視され地底に封印された門下生、水蜜、一輪。

千年を超える長い月日を越え、再会を果たした主と従者。それは同時に、長きにわたる迫害の歴史の終焉でもあった。

もう誰からも隠れなくてよい。もう誰からも迫害されることもない。

そのような日々を、一時は叶わぬ夢とすら思えた幸せな日々を記念するかのうちにこの寺は建てられたという。

そして、”我々を受け入れてくれたこの地に対する精一杯の恩返しとして、我々もまた誰も拒みはしない”、それがこの寺の売り言葉であつた。

「はらそーぎゃーてー」

”拒みはしない”とは言われても、いざ仏門となるとなかなか抵抗もある。

そう言った妖怪は決して少なくないそうで、寺に憧れて来たは良いが威風堂々と構える寺の門に逆に恐れをなして帰ってしまう者もいると聞く。

実は先ほどから般若心経を唱えながら門前掃除をしている一人の妖怪がいるのだが、彼女もまたそういった者の1人でもあった。

春らしく花柄の刺繍を加えた桜色の服に、小さな背丈と新緑のような髪色の対比が目につきやすい。

その者、妖怪山彦であり、名を幽谷 響子と言ったが、山彦としてもまだまだ半人前にも満たない程であつた。

ただでさえ『山で叫ぶと自分の声が聞こえるのは単なる音の反射』と言われる世知辛い時代、そこへ千年前に封印された妖怪の英雄が

颯爽と復活し寺を構えたと聞けば、憧れるのも無理はない事であった。

ところが、山を下りて寺に来てみたは良いが、どうしても門を叩く勇気がでない。

寺への憧れからついつい足を運んでしまっただが、門の前に立つと急に現実引き戻されたようで、どうしても次の一歩が出ないのである。

そこで、ただ直立しているのも何だというわけで、自前の竹ぼうきを持参し、自主的な門前掃除に出た。

そうして、門の向こうから聞こえてくる般若心経を復唱しながら毎日掃除を進めていくうちに、まだ門は叩けないが、とうとう般若心経を暗唱できるようになってしまったのだ。

「ぼーじーそわかー」

ほらこの通り。

さて、今朝の（勝手な）御勤めも見渡す限り大体終わり。

秋のように木の葉が舞ったり冬のように雪が積もったりならまだしも、このシーズン、特段掃除が必要なほど路面が汚れるということとはまずない。

よって慣れてくると手早く掃除が終わってしまうのだ。それこそ、今日こそは門を叩こうという気持ち芽生える前に。

（今日もできなかったな）

そう内心呟きながら、門を見上げて最後の一節を唱えるべく口を開いた。

「はんにゃーしん——」

「もしもし？」

「ぎよえええッ!？」

よもや最後の1フリーズで背後から話しかけられるとは思ってもおらず、反射的に響子は飛び上がった。

昔から響子は、不意打ちという物にめっぼう弱かった。

そもそも山彦稼業というのんびりした物はアクシデントとは無縁の仲であり、そういった所以で、はっきり言ってしまうえば響子はとも”鈍かった”。

さて、喉から肝っ玉と尻子玉がいつぺんに飛び出そうになるほど驚いたのはいいとして、振り返ってみると少女が1人立ちすくんでいた。

紺の頭巾に白の服という寺らしいと言えば寺らしい格好、なおかつ入道を従えているという彼女が、この寺の住人の1人、雲居一輪であることに響子はすぐに気づいた。

「お取り込み中のところ悪いけど――」

「ぎよえええッ、で、出たあッ」

本日2度目のびつくり。

響子が驚くのも無理はない。一輪と言えば、白蓮復活に関わった古株中の古株である。

”雲の中に居る”と書いて略せば雲居になるが、まだ若い響子にとつて一輪は文字通り空の上の存在とでもいうべく存在だったのである。

その一輪が目前にいたともなれば、緊張にとらわれまともな判断ができなくなるのも、まあ頷ける話だろう。

だが当の一輪としてもたまったものではない。

前々から門の前で般若心経を唱えている者がいることは聞いていた、だからこそこうして誰かつきとめるべく影からこっそり見ていたのである。

ところが声をかけてみれば『ぎよええッ』である。人間なら間違はなく鼓膜が破れているであろう大音量での『ぎよええッ』である。それも2連発である。

流石に耳が痛い。まだ耳の中でわんわん言っているような心地がする。

「……元気があってよろしい。ところで見た所、ここ最近ずっとうちの前を掃除してくれてたのは貴方ね？」

「ふえ？ あ、いや、その、私はただ通りすがっただけで……」

とつさに響子は持っていた箒を背後に隠し、まだ上手く回らない舌で答弁をした。

だが今となつては全部ばれであることにはまだ気づいていないようであった。

本当は素直に領けば良い場面なのだが、極度の緊張で頭が上手く回っていないのである。

「でも1時間前からずっとここにいるのを雲山が見ていたと言っているけど」

「い、1時間ぶっ続けで通りすがっただけです！」

「じゃあ、その箒は？」

「ほ、箒じゃありません！ ね、ネギです！ ちょっと箒に似てるだけで」

もう本人も何を言っているのか分かっていないに違いない。

「……別に怒ってるわけじゃないんだから、隠さなくても良いのに」「え、あ、その、あう、いや、えう……ごめんなさい……」

苦笑した一輪にそう言われ、ここに来てようやく響子の空回りが

止まった。

見る人が見たら恥ずかしさやら何やらで響子の頭からぽっぽっ
ぽと湯気が立つのが見えるかもしれない。

「それで、貴方は何かうちに用があつて来たんじゃないの？」

「はっ、え、えっと、その、ええっと、その、こ、こっ、こ——」

まだ頭から湯気ぽっぽ状態から抜け出せていない響子は、ここに
来て再び言葉に詰まった。

だが、何とかしてここでどうにかしなければならぬという気持
ちは少なからずあった。

目の前に大先輩が現れ話しかけてくれるなど、もうこれを逃した
ら2度とない機会かもしれない。

そう思うと何とかしたいと思うが同時に緊張で声がなくなつて
しまう。

いや、ここでチャンスをふいにするわけにはいかない。

その一心が響子に最後の一線を越えさせた。

「ここに入門させてくださいッ！」

その一声を、長らく誰かに向かって言いたかった一声を、腹の底
から全力で叫んだ。

追い詰められた末の火事場の馬鹿力という奴で、響子自身今まで
出した事の無いほどの大声を張り上げた。

だが普段から声の大きな妖怪山彦。それが馬鹿力を出された物で
は聞く側がひとまりもない。

まず雲山は木っ端みじんに吹きとび、一輪は数メートル後ろまで
ノックバックを受け、灯籠も同心円状にばたばたと倒され、あたか

もダウンバーストが舞い降りたかのような様になってしまった。

「…………あれ？」

だが響子には何が起こったのかいまいち分かっていなかった。

”何か頑張ったら周りの景色が変わってしまった”程度の認識のようである。

「え、ええ、どうぞ。ただ、次からは普通の声で話してくれないかしら。要は聞こえればいいんだから」

もろに大音量を受けた一輪は半ば周りの音が聞こえないほどまで酷かったが、無邪気な新入りを叱るわけにもいかず、軽く諭す程度にしておいた。

しかしダメージの方が割と深刻で、耳鳴りを通り越して目まいがする。目まいはするが、そこでスマイルを忘れないのが一輪スキルである。

「じゃ、じゃあ行きましょうか。私はちょっとやることもあるから、別な人が案内してくれると思うわ」

「は、はいっ」

響子は一輪に手を引かれ、興奮に耳をばたばたさせながら寺の中に足を踏み入れた。

これが、幽谷響子の記念すべき入門記念日の幕開けであった。

一話目：響子ちゃん仏道に飛び込む（後書き）

余談だが、この後一輪の耳鳴りが回復するのに丸一日はかかったという。

改めてどうも。作者の兎です。

最近、個人的に熱い命蓮寺でSSを書いてみることにしました。さてさて、この個性的な面子の集うお寺で如何なる珍騒動が起きるのか。

それは次回以降のんびり書いていききたいと思います。たぶん。

二話目：響子ちゃんお寺に案内される（前書き）

前回までのあらすじ

響子ちゃん、憧れの命蓮寺に入門させてもらえることに。（一話目
参照）

二話目：響子ちゃんお寺に案内される

少しだけ昔の話になるが、響子が初めて命蓮寺の事を知ったのは天狗の新聞でのことであつた。

その時既に響子は、廃れゆく山彦業界の煽りを受け路頭に迷つていた。

そんなある日、偶然拾つた1枚の号外新聞。

くしゃくしゃに丸められ地面に落ちていたところを見ると、誰かが読んで捨てた物だというのは自明であつた。

何気なくそれを拾い上げ目を通した響子であつたが、その記事に大きな衝撃を受けた。

その記事こそ、命蓮寺設立の一報だつたのである。

具体的には『千年も昔の平安の世、彷徨える妖怪のために尽力した英雄が法界に封印された』ことから始まり、

『かつての部下であつた入道使いと船幽霊が法力で動く船を走らせ、毘沙門天の弟子が封印を解き放ち、千年の時を越えて妖怪の英雄が幻想郷に復活した』と聖復活の経緯を説明した部分が中心であつた。

この『彷徨える妖怪のために尽力した英雄』という部分が、路頭に迷う身であつた響子を深く引きつけた。

もしかしたら、この御方であれば私が行くべき道を示してくれるかもしれない。

そう思うと憧れは膨らみ、いつしかこの英雄を復活させた3人の仲間を含め、彼女の尊敬の対象へとなつていった。

余談だが、見る人が見れば分かるはずだが、この記事、大分現実とは異なつた部分が多かつた。

まず、宝船騒動に変な勘違いを起こして乗りこんできた人間にまつわる事が、微塵も書かれていない。

次に、騒動の裏側で事態を掻きまわしていた鵜妖怪のことも、全

く書かれていない。

最後に、この毘沙門天の弟子の一番部下である鼠妖怪のことも、やっぱり書かれていない。

記者が脚色を加える過程で省かれたのか、本人に口止めされたのかは定かではないが、現実を伝える新聞としてはあまりに杜撰であるものであったことは否めなかった。

しかし山奥暮らしで世間知らずの響子に、こうした現実とのズレが見破れるはずもなかったのである。

今に戻る。

そんな憧れを抱いて寺に飛びこんだ響子であったが、一輪に連れられ門をくぐり、現在玄関まで来て過呼吸に陥る寸前であった。

先述の通りあの杜撰な新聞の影響で『白蓮と、彼女を救った3人の仲間』に強い憧れを抱いていた響子は、その1人である一輪に話しかけてもらえたというだけで幸せいっぱいなのだ。

だというのに寺の中に案内してもらえるなんて、幸福のオーバーキルもいいところである。

いや、その前に緊張しすぎて死にそうである。憧れと緊張は表裏一体、距離が狭まるほど心的負担が重くのしかかるのだ。

（どうせ死んでも此処は寺だから墓地はすぐそこにあるよ、というブラックジョークは言わないでこつ）

その上、外から見た寺も大きかったが、中に入ってみるとより一層大きく思えた。

質素な中にも威厳のある立派で厳格な作りに目を凝らしていると、

「靴、その下駄箱の中に入れておいて。開いてる場所ならどこで

もいいから」

「えっ、あ、は、はい！」

不意を突く形で一輪に言葉を投げかけられ、現実引き戻された。とりあえず靴を脱ぎ、幸い一番下の棚に開きスペースがあったのでそこに置いた。（あまり高いところだと背伸びしないといけなのだ）

それから響子はひんやりする寺の床を踏みしめながら一輪の後をついていった。

「広い建物ですね」

「そう？ 長らくこの建物に住んでいるからかもれいけないけど、別に私にとっては普通に思えるわ」

「凄いですね、迷子になったりしないんですか？」

「自宅で迷子って、洒落にならないわね」

「私はなりそうで怖いです」

一輪は流石にそれはないと思ったが、実際響子は結構方向音痴であつた。

山奥で山彦に囲まれて暮らす分にはそれでも何ら問題がなかったからだ。

帰り道が分からなくなっても、近くの山頂に立って大きな声で叫べば、同族がそれを返してくれるので、その方向に帰れば良いだけであつた。

なので、実は最初の頃は命蓮寺に来るだけで道に迷ったこともあつたし、それ以前に大きな建物に入ったこともない。

幸いだつたのはここが平屋建てだつたことだろう。少なくとも城や洋風建築の家にはとても響子は住めそうもない。

「そう言えば、今はどちらに向かっているんです？」

「応接室よ。その角を曲がった所。貴方もまず一通り話を聞きたいでしょう?」

「わあ、ありがとうございます!」

途端に響子の顔色がぱあっと明るくなった。

ここまで分かりやすい子を、一輪は覚えている限り見たことがなかったが、分かりやすい子は嫌いではない。

むしろこの寺に居座るあの”捻くれた問題児の居候”に比べたら、よっぽど好感が持てるというものだ。

(この子の爪の垢を煎じて吞ませたらよくなるかしら)

内心でそう思いながら、一輪は廊下の曲がり角にさしかかった。ちょうどその時、

「おおっと」

曲がり角の向こう側から突如人が現れたかと思うと、反射的に回避行動にでる2人。

その、曲がり角の向こうからやってきた人物を見た途端、響子にはすぐにそれが誰か、初見とは言えなんとなく分かった。

身の丈ほどある重そうな錨を背負い、緑をあしらった白のセーラー服という一見寺とは縁のなさそうな格好。

この、どこから見ても『私、海出身妖怪ですよー』オーラを漂わせる彼女を、響子がかつて新聞で読んだ憧れの船幽霊と帰結させるのも無理はない事であった。

実際その通り、寺の一員にして聖輦船の船長、村紗 水蜜その人である。

この時、当然のように、収まりかけていた響子の心拍数はものすごい勢いで急上昇した。

「あれ？ 一輪、その子どうしたの？」

「新入りよ。これからうちについてちょっと話するところだったの」
「ふーん」

新入り響子にとっては一世一代の大イベントであったが、寺の住人である一輪や水蜜にとってはこれは決して珍しいことではなかった。

そのためそれを聞いた水蜜が、いつものことが、と思うのも無理はない話なのである。

一方、そんな冷静な対応を響子にまで求めるのは無理があった。
あれこれ思考が巡る前に、響子はほぼ反射的に頭を下げつつ声を張り上げた。

「や、山彦の幽谷 響子と言います！ よろしくお願いしますッ」

びしつと90度垂直お辞儀を決めながら挨拶を果たした響子。

だが正常な判断ができない状態で響子が発する大声は至近距離範囲で十分な破壊力を持つのは先ほど確認した通りである。

幸い寺の作りが強固だから建物が損傷を受けることはなかったが、近くにいた一輪と水蜜がダメージを受けたことは言うまでもないだろう。

まして一輪の場合、先ほどの一撃からさほど時間を開けずにもう一撃である。

このような悪意の無い一撃ほど対応に困るものはない。

「ず、随分威勢がいいわね。元気が良い子は好きだけど、もうちょっと控え目でもいいよ」

のけぞった際に落とした帽子を拾いながら水蜜は苦笑を浮かべて

言ったが、その後ふとあることに気づいた。

「もしかして、こここのところ門前で般若心経唱えながら掃除してくれる子がいるって噂になってたけど、もしや貴方？」

「はい、少しばかり御手伝いさせてもらってました！」

「なるほどねえ」

この時、村紗は少しずつこの山彦に興味を抱きつつあった。

そもそも山彦自体見るのが初めてであつたし、それを除いてもなかなか面白そうな子である。

「一輪、この子の面倒、私に見させてよ」

「……大丈夫なの？ 村紗に任せると、少し大事な部分が抜けそうで怖いよね」

「平気平気、いざって時はフィーリングで何とかするから」

言うが早いか、水蜜は響子の手を握り、

「さあ、行くわよ！」

「えっ、えっ？」

一輪の不安もいざ知らず、響子を引っ張る形で水蜜は応接室へ向かい駆けだした。

響子は響子で、憧れの人に会ったかと思つたら次の瞬間には手を握られて引っ張られ、もう頭がまともに回らない状態でされるがまま状態。

残された一輪だけが耳なりと頭痛に苛まれるのであつた。

二話目：響子ちゃんお寺に案内される（後書き）

幼女誘拐、ダメ絶対

はい、どうも。作者の兎です。

少々今回の話は短めかもしれませんが、話的には区切りが良いと判断したためここまで。

とうとう船長さん登場です。登場直後に掻っ攫いです。流石船長、やる事が違う。

さて、次の話には新たに2人ほど出したいところです。

（一応、予定は決まっています）

まあ、次回ものんびり書いていきたいと思います。

たぶん。

三話目・響子ちゃんいじめられる（前書き）

前回までのあらすじ

響子ちゃん、憧れの命蓮寺に入門させてもらえることになったはいが、（一話目参照）

船長さんに気に入られて色々教えてもらえることに。（二話目参照）

三話目：響子ちゃんいじめられる

水蜜に手をひかれやってきた応接室。

そこは、新しい畳が敷き詰められた8畳ほどの簡素な和室であった。

何せ中央に机が置かれている以外本当に何も無い部屋なのだから簡素というより他はない。

強いて言うなら、応接室を挟んだ廊下の反対側はすぐ縁側であり、庭がよく見えた。

その庭もまた決して派手な様式に飾られる事もなく、若葉を通じて初夏の気配を醸し出していた。

「適当に座つて。お茶が何か持つてくるから」

「あ、ありがとうございます」

適当に、と言われたが本当に適当に座るわけにもいかない。

響子はきちんと机の前にビシッと正座し、ピーンと背筋を張った。実のところ、響子はここ何年もともに正座という物をしたことがない。

する機会がなかったと言っしまえばそれまでだが、それでもこつも厳格な雰囲気だといふ正座してしまふものである。

もつとも、一輪の方は兎も角、水蜜が”厳格”な人かと言うとそうでもないように思えてきたのだが。

そんな響子の姿を見て、水蜜はついクスツと笑ってしまった。

響子が可笑しいわけではない、ただ昔の自分と重ね合わせると自分が可笑しく思えてしまうのだ。

水蜜が白蓮に救われて寺に來たのはもう千年以上も昔のことになつてしまつたが、あの日のことはまだしっかりと覚えている。

まだ”人を襲う船幽霊”としての性分が抜け切れていなくて、ビ

シヨビシヨの服で畳を濡らしながらよく白蓮にそつぽを向いて困らせていたものだ。

それに比べ、まだ初々しいというのに真面目な響子を見ると、どうも恥ずかしさがこみ上げる。

無論そんなことを知る由もない響子は、誰もいないのにただまっすぐ前を見つめ、姿勢を硬直させていた。

何度も言うが、彼女はもう自分の事でいっぱいなのである。

それから間もなくして、水蜜は麦茶を持ってきた。

春から夏に変わろうとしている今は冷たい物の方がいいだろうと思ったのと、水蜜自身が猫舌なので冷たい方が好きだという個人的な理由と、両方である。

当然、響子はこれにも

「ありがとうございます！」

と、ビシッと綺麗な45度を描く折れ線お辞儀をしたのであった。水蜜はそれを見ると、響子を挟んで机の反対側に座ると、笑いながら語りかけた。

「別にそんな堅苦しくしなくたっていいわよ。私も昔はかなりやさぐれてて、しょっちゅう聖の手を焼かせたくらいだし」

「ふえ？ そうなんですか？」

これは響子にとっては意外なことであった。

『お寺の人』真面目』、『お寺の偉い人』超真面目』という公式を導入していた響子は、当然水蜜もまた昔から超真面目であつただろうと思っていたのだ。

「確かに一輪とかは昔からあの調子でお堅いけど、あの頃の私はま

だ荒れてたからねえ。でもそんな私ですら今はお寺のお努めもこなせるようになったし、貴方ももうちょっと気楽に構えて大丈夫だよ」「ほええ、参考になりました」

そう返事はしたものの、気楽になれと言われて気楽になるのはちよつと難しかったので、響子は結局そのままのビシツとした姿勢で話を聞くことにした。

実際、そこで行われた水蜜の話というのはあまり堅苦しい物ではなかった。

むしろ、響子が思っていた以上に粗っぽく雑な物であったと言っても過言ではなかった。

一輪が危惧していたように、水蜜による説明にはあちらこちらに穴があつたし、それについて響子が尋ねると「あれ、どうったかな」と不安にならざるを得ない返答。

正直なところ、水蜜自身分かつていないことが多かった。

ただ面白そうな後輩が入ってきたからとつかしてみただけで、正直なところ仏門関係の知識なら一輪の方が圧倒的に多い。

更に言えば、水蜜の見込みの甘さが露見した形でもあった。

ズブの素人相手なら簡単な説明だけで十分だろうと思っていた水蜜であつたが、何せ響子は門前で密かに般若心経をマスターしたり門下生の話を密かに聞いて仏教知識について少ばかり学んだりしたエリート(?)である。

それに比べて自分はどうかと、入門当初の自分は話にもならず、正直今の自分でも若干怪しいところである。

確かに千年以上”死んでいる”のは事実であるが、そのうちいくらを費やしたかという話が変わってくる。

白蓮が封印される前は先述の通り修行には殆ど真面目に取り組んでおらず、白蓮封印と共に自身も封印された地底時代は聖輦船の封印を解き、白蓮を救出することを最優先に取り組んできた。

つまり、仏教に専念できるようになってきたのは白蓮復活を果たしたここ最近のことなのである。

少なくとも（水蜜の知る限り）ずっと仏道に取り組んできた一輪とは偉い差があるのだ。

（……見くびった）

気づいた時にはもう遅い。

しかも響子は水蜜の事を純粹に尊敬しているのだからより性質が悪い。

とうとう水蜜も、相手が悪いと諦めざるを得なかった。

力量差はハートと根性で乗り越えるのが村紗流であったが、知識量差がハートで埋められるほど世の中甘くはない。

（だからと言って一輪は何となく呼びづらいし……）

そう、一輪は呼びづらい。

任せておけと言ってしまった手前、やっぱりお願いしますとはいにくいのだ。

ならば誰だ、誰を呼べばよいのだ、そんなの決まっている。

「ちょっと待つて。どうも私じゃ上手く説明できないのが多そうだから――」

水蜜はそう断りながら立ちあがった。

「だから聖を呼んでくるわ」

「えええっ!?!」

響子にとってそれはまさに青天の霹靂であった。

正直なところ、響子にとって白蓮は雲の上の存在であった。

言わば、この寺の最深部で日夜修行にはげみ、下っ端修行生には

会うことすらほとんどないと勝手に思い込んでいたのだ。

その白蓮がこれからここに来ると言う。

「今までも寺の偉い妖怪、一輪と水蜜に会ったが、それはあくまで『たまたま会った』という形であった。」

「だが今度は違う。更に偉い方が来るというのに、それは『自分に会いに来る』のである。」

恐れ多さに逃げ出したくなる気持ちすら湧きかけたが、それはそれで失礼というものだ。

「じゃあ、ちょっと待っててね」

水蜜が部屋を後にし、部屋には響子ただ1人。

だと言っのに、いつ白蓮が来るかも分からないというこの環境下ではとてもリラックスできたものではない。

ただ背筋をピシッと伸ばし、唇を真一文字に引き締め、額にうっすら汗を浮かべ、ちょっと小刻みに体を震わせながら、響子はガツチガチに固まってしまった。

わずかな時間すらとてつもなく長い時間に思えた。

それからどのくらいの時間が経っただろうか。

実際にはあまり時間が経っていないのだが、響子の体感時間はさまざまのものであった。

だが、ここで響子の中で緊張とは別の問題が徐々に芽吹き始めていた。

（足、痺れてきた……）

そう、慣れない正座を長らく続けていたことで、足の先から感覚が失せてきたのだ。

だがいつ白蓮が来るかも分からないというのに正座を解いてリラックスできるはずもない。

思わぬ敵の存在の出現で追い詰められた響子であったが、受難はこれのみで終わらなかった。

「おお？ 見かけない顔ね」

ふいに背後から話しかけられ、ビクッと飛び上がりそうになった響子。

だが振り返ってみると、そこにいたのは直感的に白蓮ではなさそうだということに気づいた。

黒のワンピースに長いニーソックス、持っている三又の鉾とアンシメトリーな翼がすぐ目に着いた。

この時、響子はこれが誰だか分からなかったが、この相手こそ寺の居候、封獣 ぬえであった。

「あ、ご無沙汰しています。新入りの響子と言います、よろしくお願いします」

足がしびれているので向きを直すことすらできなかったが、それでも響子はぺこりと頭を下げた。

だが、それを見てぬえはにやりと笑い、

「ああ、あんたが”響子”って奴ね。聞こえたわよ、さっきどこかの誰かさんが廊下で大声で自己紹介してたの」

「えっ、あっ、あの、ごめんなさい……」

謝る響子であったが、こういう相手には引つ込むどころが攻勢を強めるのがぬえの性分である。

持っていた鉾の反対側、とがってない方の先端でおもむろに響子の足をつき始めたのだ。

正座して足がしびれているということはぬえも分かっている。だ

からこそ突つついているのだ。とんでもない所業である。

「やつ、あ、足痺れてるんです、やめてください」

「い、や、だ。せつかく昼寝してたのに、その誰かさんのせいで起きちゃったのよねえ。誰のせいでしょうねえ」

口ではそう言うものの、ぬえの表情は怒りというよりは喜びに近かった。面白い玩具を買ってもらった子どもの喜びに良く似たあの感情である。

「やう、ごめんなさい、悪気はなかったんです、あうっ」

「えー、なーに、きこえなーい」

さらに調子に乗ったぬえは、今度は鉾攻撃をやめ、直接響子の頬を両手でつまむと左右に引っ張って伸ばした。

「ふにい、や、やへへふははいい」

「おお伸びる伸びる。こりや面白い、気にいったわ。あんた、今日から私の子分になりなさい」

「ふええ！？」

「何よ、弱小妖怪の分際でこの私に意見しようっていうの？」

そう言うては更に頬を強く引っ張る。

「あいははははは、いはい、いはいへふ！ いひへはいへえッ」

すっかり響子はされるがまま状態のであつた。

だが、その目がしらに浮かべた涙を見て調子に乗るぬえ。

早くも四面楚歌、この状況にどうしようもない響子。

だが、そこへ

「ぬえッ！」

怒号と共にとんできた錨。

それは、背の小さな響子の頭上をかすめるようにして通り過ぎ、少し大きいぬえの頭部めがけて飛んできた。

「おっと」

とつさに頭を下げてかわすぬえ。

錨はそのまま飛んでいき、奥のふすまを無残に突き破って隣の部屋に消えていった。

ひしゃげたふすまの枠の形状が、その威力を物語っていた。

そしてそこへ間髪いれず、今度は水蜜が戻ってきた。

「またあんたはそうやって悪戯ばかりして！」

「おお恐ろしや、船長さんのお怒りだ。ま、ちっとも怖くないんだけどね」

そう言い残し、ぬえは応接室から逃げ出した。

「あ、こら！ 待ちなさい！」

水蜜も急いで後を追う。

「待てと言いつつ馬鹿なんてあんたぐらいよ、のろのろ船長」

「言ったわね！？ 覚えてなさいよ！」

「あつはは、つかまえてごらん？」

そのまま2人は縁側から庭に飛び出し、建物の影に消えていった。

ただ1人残された響子は、何が起きたのか理解が追いつかず茫然と庭を眺めていた。

そこへ

「大丈夫？」

誰かが後ろから声を掛けてくれた。

「あ、はい、たいしたことありません――」

途中まで言いかけて言葉が止まる。

振り向いてみれば、そこにいたのは、自分に声をかけてくれたのは、誰あろう聖白蓮その人だったのである。

三話目：響子ちゃんいじめられる（後書き）

あたしゃぬえちゃん ガキ大将 天下無敵の少女だぜ

はい、どうも。作者の兎です。

今回は水蜜とぬえにフォーカスを当てて書いてみました。

唐突ですが、水蜜はたぶん頭を使うより体を動かして覚えるタイプだと思います。

なんでそんなことを思ったかと言うと、そうすると頭がキレる一輪とちよūd良いペアになるんじゃないかな、と思ったからです。たぶん一輪だけだったら、水蜜だけだったら、地底から脱出して白蓮を救出することなんてできなかったと思います。

2人が互いの長所を活かし、短所を補ったからこそ、偉業を成し遂げられた。

そんな相互関係を築けていると良いと思います。

ぬえは割とやりたい放題で書かせてもらいました。

実際にボクのイメージではここまで粗暴になっています、ぬえちゃん。

もうちょっと撫子させても良かったかな。

さていよいよ聖さん登場しました。

プロローグも大詰めですね。

四話目：響子ちゃんと白蓮さん（前書き）

前回までのあらすじ

意を決して仏道に飛び込んだ響子ちゃん。（一話目参照）

先輩に気に入ってもらえたり（二話目参照）

居候にいじめられたりしたが（三話目参照）

意外な形で憧れの白蓮さんに会えました。

四話目：響子ちゃんと白蓮さん

響子は未だ、自分の目が信じられなかった。

初めて命蓮寺を知ったあの日に見た新聞、そこに載っていた写真。そこに写っていた、臙脂色のマントに黒と白のコントラストが目立つ袈裟を纏った妖怪の英雄。

それが、今自分の目前にいる人物と寸分も違わぬことなどすぐに分かった。

聖 白蓮。

生まれて初めて生の目で見た彼女は、とても優しい柔和な笑みで自分を見つめていた。

今日に入って最高レベルの緊張を長時間維持しっぱなしの響子であつたが、おそらく今この時ほど何も考えられなくなることは生涯2度とないだろう。

とたんに体が震える。

『大丈夫？』と声をかけてはもらつたが、その答えとして何と返したら良いものか言葉が全くでてこない。

鼻のすぐ右横を一筋の汗が流れていくのにも響子は気づけず、ただ何もできずにいた。

すると響子の心境を察したのか、白蓮は響子のすぐ近くまで歩み寄ると、視線の高さを合わせるようにその場に座り、

「そんなに強張らせなくても大丈夫よ、響子ちゃん」

そう言いながら、そつと響子の頭をなでた。

これは響子に、まったくもって不意打ちに近い衝撃を与えた。

妖怪を救い続けてきた偉大な英雄である白蓮に直に名前を呼ばれたというだけでも言葉で表せぬほど感銘を受けるところであるが、さらに今回の場合まだ響子は名乗ってすらいらないのだ。

自分が決して有名な妖怪ではないというのは響子自身が一番よく分かっている。

妖怪山彦は本来、山の奥の奥にひっそりと住む隠遁なる妖怪。その種族存在が外部に知れることはあれど、個人が集落外の者に名を知られるなどまずありえぬ話なのである。

「あ、あの、どうして……」

驚きを隠せぬ響子に、白蓮は微笑みかけながら言った。

「貴方の元氣な挨拶が私の部屋にまで届いたから、かしらね」

そう、何のことはない。種族が山彦云々など全く関係なかったのだ。

ただ単に、本当に単純に、つい先刻に水蜜と会合した時に発した挨拶が建物中に反響し、その一部が白蓮の耳に届いただけだったのである。

ぬえに目をつけられる切欠となった挨拶が白蓮に名前を読んでもらう切欠ともなったとは、人間万事塞翁が馬とはまさにこのことである。

響子もついつい赤面してしまった。

「さて、少しばかり貴方と話をしたいところだけど」

白蓮はそう言いながら立ち上がり、

「せっかく天気も良いことだし、どうせならあちらで話しましょう」

廊下を挟んだ所にある縁側の方を指差した。

「は、はい！」

響子は威勢の良い返事と共に立ち上がった。

まだ足のしびれは残っていると言えば残っているが、火事場の馬鹿力という言葉があるように肉体のダメージなど気の持ちようである外何とかなることもある。

増して妖怪などは、そのような精神優位性が人間に比べ著しく強いことが多い。

そうして2人は縁側に向かった。

最初に前を歩いていた白蓮が縁側に腰掛け、響子は隣に座って良いものかと躊躇したが、

「お隣、どうぞ」

と白蓮が言うものだから、結局少しもじもじしながらも彼女の隣にちょこんと腰かけた。

「あの、さっきの挨拶、うるさくなかったですか？」

恐る恐る響子は白蓮に尋ねてみた。

本当はこんな自分のアイデンティティを自ら傷つけるようなことは考えたことすらないのだが、先ほどぬえにこき下ろされたのがまだ効いているのである。

それに対し、白蓮は微笑みかけながら答えた。

「とんでもない。とても元気な、良い挨拶だったわよ。私はあいう挨拶は素敵だと思うわ。元気だったことはとても大切な事だから」

それを聞くと、響子の顔色がぱあっと明るくなった。

安心したのと同時に自分の特技を白蓮に褒めてもらえたので、そ

れはそれは幸せな気分であつた。
すると、ちょうどその時、

「こらあ、ぬえッ」

「あつはは、遅いおそおい、日が暮れちゃうわよー」

ちょうど白蓮と響子の目前を横切るようにして庭を逃げるぬえ、
そしてそれを追う水蜜。

「ま、このぬえ様がちよいとその気になれば、あんだなんて屁でも
ないってことよ」

「ええい、この減らず口め！」

水蜜は立ち止まると（意図せずもちょうど白蓮と響子の真つ正面
であつた）、背負つた錨から伸びた鎖の先端を投げ縄状に組み合わ
せ、ぬえめがけて投げつけた。

もうこの時、水蜜とぬえの間にはかなりの距離があつたが、鎖の
輪は誤らずぬえの逃げ道を先読みするように飛んでいき、

「ぐえっ」

ぬえの胴体をとらえた。

逃げようにも、水蜜が鎖を全力で手繰り寄せるものだから、じた
ばたもがきながら結局は地面を引きずられていくしかない。

結局、あつと言う間にぬえは水蜜の手により捕獲されたのであつ
た。

「は、離しなさいよ馬鹿っ」

「さあ、捕まえたわよ。どうしてやろうかしらねえ」

力の限りぬえは暴れたが、素のスピードは兎も角腕力なら水蜜の方が上なので逃げることはできない。

そのまま水蜜はぬえを引きずり、元来た道を帰るようにして建物の影に消えようとしていたが、

「あの、村紗」

白蓮に声をかけられ、水蜜は立ち止まった。

「あまり乱暴なことはしてはいけないわ」

「しかし聖、こういう奴は甘やかすと付け上がるだけですから、いっぺんガツンと言ってやらなきゃ駄目なんです！」

そう水蜜は拳を握って熱く語った。

「……ほどほどにしないと駄目よ」

「ええ、分かっていますとも。何、乱暴なことはいたしません、ちよつとしたコミュニケーションって奴ですよ。ね？　ね？」

そう笑いながら、水蜜はぬえの方を向いた。

その水蜜にすっかり口を塞がれたぬえは全力で首を横に振ったが、今更それで何が変わるわけでもない。

結局、ぬえと水蜜の姿が完全に建物の影になり見えなくなったかと思うと、一発、轟音と同時にまるで地震のように地面が揺れた。

いくら先刻自分がいじめられたとはいえ、響子には少々ぬえが気の毒に思えた。

「……元気すぎるのも考えものかしら」

白蓮はその隣で、額に指をあて顔を俯けていた。

「聖様？」

「ごめんなさい、世の中って難しいものね」

白蓮は苦笑しながらも響子の方に向き直った。

「さて、話を戻しましょうか。最近、毎朝お寺の前を掃除してきていたようですが、何かあったのかしら？ 山彦が山を下りてくるなんて並の事ではないと思うのだけれど」

「あ、あの、実は最近、山彦としての存在意義が少しずつ分からなくなってきたんです。ただの迷信だとか言われたり、そもそも山で叫ぶ人間がいなくなってきたりして、『ああ、山彦やってるなあ』って日が無くなってきて――」

それから響子は、今まで内心にため込んでいた物を思い切って話してみた。

徐々に存在そのものを忘れられつつあるという不安、存在意義を失いつつあるという不安、そうした不安な心境を全て赤裸々に語ったのだ。

熟練の山彦なら兎も角、彼女はまだ幼い半人前、よって抱えていた不安も人一倍大きかったのだ。

白蓮はそれを適度に相槌を入れつつ頷きながら聞いてくれたが、響子の話が終わると

「なるほど、貴方も苦労してきたのね」

そう微笑みかけてくれたが、急に真面目な表情になり

「でも、せっかく話してくれたのに申し訳ないけれど、私はどんなに考えても貴方のその問いに答えを用意してあげることはおそらく

できないと思う」

その言葉と雰囲気の変化に、響子の表情が若干曇りを見せた。

「聖様でも分からないことがあるんですか？」

「そう。周りから何でも知っているように思われることもあるけど、実は私は自分のことすらよく分かっていない。だから、世の中のこととも分からないことだらけ。」

もし私が全ての答えを知っているのなら、おそらく寺にこもらず自由気ままに暮らしているでしょう。けれど、まだ見つけれない答えなんて山ほどあるわ。

だからこそ私はここで修行をしている。きっとこの寺にいる人は皆それぞれ違う問いを抱えているし、その答えを探しているのだと思うの。」

難しい話ではあったが、響子には何となく白蓮が何を言いたいかは分かった。

あくまで”何となく”であり上手く説明することはできそうもないが、でも白蓮の意図については半分くらいは理解しているつもりだった。

「だから、さつきも言ったけれど、私はどんなに考えても貴方のその問いに答えを用意してあげることはおそらくできないと思う。」

それは、その問いは私ではなく貴方が抱えている問いだから。つまり、その問いの答えを見つけれられるのは貴方以外誰もいないの。

でも、私は貴方に答えを用意することはできなくても、一緒に答えを探してあげることができる。」

そう言つと白蓮の表情にあの笑みが戻ってきた。

「どうかしら。もし良かったら私達と一緒に『答え探し』、やってみない？」

そう聞かれた響子であったが、答えを出すのに迷いなどなかった。

「はい、お願いします！」

そうビシッと45度お辞儀を決め込んだ。

今の話だけでも、ここに入門するだけの勇気を響子の心に満たすには十分すぎるものであった。

「ありがとう、これからよろしくね」

「はい！」

また1人新しい門下生が命蓮寺に加わった瞬間であった。

この時、響子はすっかり今後の新生活のことで頭がほとんど一杯であった。

ここに来る前に既に仏教生活という物に憧れを抱いていたので、それが実現した今、頭がほくほくするのも無理はない。

「何か分からないことがあったら、私でもいいし、誰かに聞いてみるといいわ。みんな優しい人ばかりだから」

白蓮がそう言った、その時。

「こらあ、村紗ッ」

「ち、違っの！ これには深い訳があつて！」

ちょうど白蓮と響子の目前を横切るようにして庭を逃げる水蜜、そしてそれを追う一輪。

「新入りの説明は任せると言っておきながら、その新入りを放って遊び呆けていて、まだ何か申すと言つか！」

「あれはぬえが――」

「問答無用！ 莫迦にかける言葉はなし！」

一輪は立ち止まると（意図せずもちょうど白蓮と響子の真っ正面であつた）、

「雲山、つかまえて！」

拳状にかたどつた雲山に、水蜜を捕まえるよう指示を出した。

もうこの時、一輪と水蜜の間にはかなりの距離があつたが、雲山のスピードと一輪のコントロールの前になすすべはなく、

「ふぎやつ」

水蜜をとらえた。

逃げようとしたが、次々と雲山の拳パーツが飛んでくるものだから、結局四肢を別々の手に押さえられてしまった。

結局、あつと言う間に水蜜は一輪の手により捕獲されたのであつた。

「さあ捕まえたわよ。ちょっと向こうでお話しましょうか、拳で」

「で、できれば言葉でお願いします！」

この時水蜜は逃げようと思えば逃げられたかもしれないが、一輪が放つ怒りのオーラをもろに受けて逃走しようという心すら折られていた。

一輪を怒らせたままにしておくと、どんどん後になって蓄積され

た一撃が飛ぶというのは水蜜も良く知るところである。

「あの、一輪」

白蓮に声をかけられ、水蜜は立ち止まった。

「後生だからあまり乱暴をしないでね」

「しかし姐さん、こういう奴は甘やかすと付け上がるだけですから、いっぺんガツンと言ってやらなきゃ駄目なんです!」

そう一輪は拳を握って熱く語った。

「……ほどほどにしないと駄目よ」

「ええ、分かっていますとも。何、乱暴なことはいたしません、ちよつとしたコミュニケーションって奴ですよ。ね? ね?」

そう笑いながら、一輪は水蜜の方を向いた。

「はい、大丈夫です。私達仲良しですから」

水蜜もそう言いながら笑ったが、目が笑っていなかった。むしろ涙目であった。

そんなわけで一輪に連れられて水蜜は建物の影に消えていったが、それから間もなく

「歯をくいしばれ!」

という怒号と共に柱か壁が堅そうな物が碎け崩壊する音が聞こえた。

「……本当は皆、優しいのよ。ちょっと血の気が多いだけで。だからあまり怖がらないで」

白蓮は額に指をあて顔を俯きながら、響子にそう言うので精一杯であった。

四話目：響子ちゃんと白蓮さん（後書き）

水蜜「せ、殺生はいけないと思います！」

一輪「大丈夫、貴方はもう、死んでいる」

はい、どうも。作者の兎です。

今回は重かったりはっちゃけたり、不思議な回となりました。

一度面倒をみると言ったからには何があっても途中で投げ出してはいけません。

後輩を持つにもペットを飼うにも、こればかりは鉄則です。

今回初挑戦の白蓮さん。命蓮寺頭領の白蓮さん。

敷居の高さを感じさせないカリスマ、を目標に書いてみたのですが如何だったでしょうか。

（レミリアや神奈子のような格の差を見せつけるカリスマとはベクトルが違うのです。90度ほど）

実は今回、この話を書くために昔使った倫理の教科書を押し入れから引つ張り出してきました。

相変わらず宗教の世界は難しいものです。

おそらく白蓮も周りの妖怪に仏の教えを受け入れてもらえるよう、色々工夫しているのでしょね。

戒律で酒が呑めぬと定められた仏教が、酒浸りの幻想郷民に受け入れてもらえるかと考えると、何というお先真っ暗。

そんなこんなで真面目な話になってしまったように見えるかもしれませんが、血の気の多いギャラリーが大騒ぎしているのでそうでもないかもしれません。

みんないい子なんです、本当は。

言われてみれば今回は新キャラが出ませんでした。が、まあ前回ほど
つとしか出番がなかった白蓮さんなどカウントして良いかも分から
るので、今回は白蓮さんの回ということで。
星蓮船メンバーも未登場は残り3人。
次回はもう少しゆるく行くと思います。
たぶん。

五話目：響子ちゃん早くもピンチ（前書き）

前回までのあらすじ

なんやかんやあって仏道に飛び込んだ響子ちゃん。（一話目～四話

目参照）

そして時に、尼さんは強かった。（四話目参照）

五話目：響子ちゃん早くもピンチ

寺に来るまで響子は知らなかったのことなのだが、命蓮寺では毎日修行を行っているというわけではない。

これは、白蓮が門下生のことを考慮した措置である。

毎日修行に励むに越したことはないように思えるが、これだと自身の存在意義を発揮する機会が失われてしまう。

人間を襲い怖がらせてなんぼの妖怪なのに、人間そっちのけで修行に努めても心は満たされぬ。

そんなわけで、修行を行う日と行わない日をおおよそ半々くらいの割合で設けているのだ。

（そもそも寺ができたのが最近であるため、寺とは別に自宅を持つ妖怪も多い）

そして残念な事に、響子がめでたく門下生入りを果たした今日は、言わば”定休日”であった。

こういったわけで今日の寺は閑散としていた。

無論、”定休日”と言えど住職に当たる寺の住人たちは完全オフというわけではない。

今後の活動について議論することもあれば、外へ遊行に出ることもある。

寺の掃除や身の回りの整理など雑務もこの日に片づけてしまうことが多い。

今、水蜜がさつき壁に開けた穴を直していたり、その隣で一輪がさつき壁に開けた大穴を直していたりするもの、今日が定休日ゆえ比較的忙しくないからこそできるのである。

ちなみに本当は他にも、毘沙門天代行を務める副頭領の星、その一番部下を自称するナズーリンの2名がいるのだが、本日は外へ布教中のため不在。

つまり賑わう時はとても賑わう命蓮寺も、今は響子を含めて5人

しかないのである。

「あのー、何か私も手伝いますか？」

壁に向かって金づちを振るう先輩二人の背中に向かって、響子は話しかけた。

「いえ、これは私が壊したところだから、私が直さないといけないのよ」

「そうそう。あ、でもその釘をとってくれると助かる」

「はい」

伸ばされた水蜜の手に釘を渡す響子。

それからしばし、金づちが木を打つ音だけが聞こえるという無声作業。

おそらくここに自分がやれることはないと察した響子。

仕方なく（という言い方も変だが）、先ほど白蓮と話をしたあの縁側に向かった。

まだ白蓮はそこにいた。

「聖様、私もどこかお掃除したいのですが、手が足りていないところなどありませんか？」

「うーん……特に汚れている所はなかったと思うけれど」

「でも、一輪さんと船長さんが頑張っていると言うのに私だけ何もしないと云うのも……」

「そう、それじゃあねえ……」

「長っ！ それでもって広っ！」

白蓮に相談した結果、響子に課せられた任務は『廊下の雑巾がけ』となった。

底の深い取っ手付きの桶に水を汲み、一緒にあつた雑巾を手に取り、とりあえず一番近い廊下に出た響子。

『廊下の雑巾がけ』は掃除の基礎中の基礎なので、響子も全く予想していなかったわけではない。

しかしここは、外から見ても広い命蓮寺。内側に入るとさらに広く思え、この広さが全く持って予想外であつた。

縁側沿いにずっと走る廊下、その長さは響子が今まで見てきたどの廊下よりも長いものであつた。

無論、白蓮もこの広い寺の雑巾がけを1人にやらせる事が大変であることなど重々承知である。

それでもなお響子にそれを言ったのは、新入りたる彼女に寺の構造を教えるのにちょうど良い機会だと考えたからだ。

「ほええ、今日中にこれ終わるかなあ」

その白蓮の意図を理解しているかは別として、響子はさっそく雑巾を濡らして絞りはじめた。

この季節になってくると、水の冷たさが心地よく覚える。できる限り堅く絞った雑巾を広げ、床に押し当てると

「よし、行くわよっ」

と一直線に走りだした。

この時、新入り響子、『ああ私、仏教やっているなあ』と感慨にittaっていた。

勿論言つまでもないが、雑巾がけと仏の教えに何ら因果関係はない。

「おー、やってるやってる」

雑巾がけに精を出す響子を遠めに、水蜜と一輪は未だ壁の修復を行っていた。

普段は雑だけど寺（前身は自分の船）のことになると急に几帳面になる水蜜と、普段から几帳面な一輪が作業すれば、それは時間がかかるのも無理はない。

「懐かしいな、私も昔はよく雑巾がけしてたっけ」

「村紗に水仕事をさせると大抵びしゃびしゃになるのよね。廊下も水浸しになったし」

「あの頃はまだ雑巾が上手く絞れなかっただけよ」

「昔から腕力だけは十分あったじゃないの」

「そんな、人を力馬鹿みたいに言わないでよ。がさつな一輪と違って、私だってこれでも列記とした繊細でか弱い女の子なんですからね」

と言った途端、よそ見していた村紗は釘を持っていた”自分の指”を思いつきり金づちで打ってしまった。

「痛ッ！ 痛い！ 一輪、絆創膏か包帯か何か持ってない？ 絶対折れた、今絶対私の指折れた！」

「折れてないわよ、それくらいで。よそ見して寝言言いながら作業

しているからそんなミスするの」

一輪は実に澄ました顔でサラツと言いのけたのであった。

一方、そんな壁の修復に励む2人を物影から眺めている者がいた。井戸に放り込まれたまま放置され、つい今しがたようやく出られたばかりのぬえである。

全身ずぶ濡れになってしまったため、スカートの裾を絞りながら、物影から2人を見ていた。

2人とも壁の修復に神経質になっているから、何かをしかけるのは少々相手が悪い。

だがその向こう、雑巾がけに夢中になっている響子を見つけ、即座にぬえの頭脳が悪い方向に回転を始めた。

「そうよ、私がこんなびしょびしょになったのも元をただせば全部あいつのせいだし、一発くらい仕返ししても罰当たらないわよね」

酷い言いがかりもあったものだ。

この時、すでにぬえの中では何をしてやるか考えがまとまっていた。

基本的にぬえの頭には常時悪戯が百八式までそろっているのである。

「ふい、先は長いわ」

額に浮かんだ汗をぬぐい、響子は息をついた。

想像していたよりも雑巾がけとはハードな修行なのね、と内心呟

きながら雑巾を洗う。

そこへ

「また会ったわね、新入り」

同じく桶と雑巾を持って現れたぬえ。

それを見て、思わず響子はビクツと身構えた。

まだ数時間前の正座つんつんの惨劇を忘れられるはずもないのだ、無理はない。

そんな響子を見て、ぬえは

「何脅えてるのよ。さっきのは私が悪かったわ、お詫びに一緒に掃除しましょ」

と笑って見せた。

この笑み、当然作り笑いである。

だが純情な響子はそんなことに気づくはずもなく、

「はい、お願いします!」

と言ったものだから、ぬえは内心大笑い。

今、響子は心の中で

(なんだ、話してみればやっぱり良い人なんだなあ)

と思っているが、その一方でぬえは

(どいつもこいつもこんな馬鹿ばかりだったら、やりやすいんだけどぬえ)

なんて考えているんだから可哀想な物である。

そうしてぬえは、含み笑いを浮かべながら、雑巾を桶の中に浸した。

しかしこの桶の中身、水ではない。それどころか、透明な油である。

当然、手を入れた瞬間にぬるつとした感覚が指と指の間を這うが、今更そんな事を気にするぬえではない。

こうして油まみれになった雑巾を、あまり絞ることもなく取り出した。

「私はこつちをやるから、あんたは別なところをやつて」

「分かりました」

そう言つて響子は自分の桶を持つて別な所に行つてしまった。

こうして1人になったぬえは、油まみれの雑巾を床にびたつと置くと、廊下に油を塗りはじめた。

響子のように直線状に雑巾がけすると自分でまいた油を自分で踏むことになるため、ワイパー状に床を拭きながら後退する方式を採用。

しかもこの方法の利点は、桶の中身を知らぬ者には本当に雑巾がけているように見えてしまうところである。

油が塗られた床は、水で拭いた床より綺麗に光沢が見える。だがそれは油の光沢、偽りの美に他ならない。

だが逆に言えば、油が塗られた床も遠目にはよく掃除された床と見えてしまうのだ。

ぬえの考えた罠の中でも特にお気に入りのもので、設置・回収する手間さえ除けば文句なしの傑作であった。

一時間もすると、響子も大体手慣れてきた。

まだ廊下がどのように配置されているかを理解していないとは言え、おおよその掃除は終えたように思えた。

それに、ぬえが手伝ってくれている（と思い込んでいる）から、だいふ楽になったように思っていた。

「ここの雑巾をかければ大体終わりがしらね」

と雑巾を広げた先の廊下は、不思議と雑巾がけする前から光沢があるように思えた。

もしかしたらぬえが先にやってくれたのかもしれないと思ったが、別に2回雑巾がけてしても問題はないだろう、そう響子は思い足を進めた。

その途端、床を蹴った足がずるっと滑った。

「ふぎやつ」

顔をはじめとし、全身をしたたかに打ちつけられた響子だが、どうしたわけか止まらない。

床を蹴っているわけでもないのに、まるで床の上を滑るように体が進み続けるのだ。

そう、ここは既にぬえによって油を塗られた魔のスリッポイルロード。摩擦は限りなくゼロに等しいのだ、止まれるはずがない。

すぐさまこのことに気づいた響子は顔を上げた。廊下の突き当たりにあったのは、先ほど自分が桶や雑巾を借りた掃除用具置き場。

「うわあああ、止まって止まって止まってえッ」

そうは叫ぶが止まるはずもなく、結局は掃除用具置き場に激突。箒が倒れ、桶が落ち、雑巾が舞う惨劇。だがさらに事態を悪化、その落ちた桶の1つがたまたま響子の頭にすっぽり入ってしまったのだ。

「あうっ、と、とれない！」

決して響子の頭が大きいわけではなく、桶が小さいのだが、いずれにせよつかえてしまった事に変わりはない。

ちょうど桶の鉄の輪の部分に響子の鼻が引っかかってしまい、無理に引っ張ると鼻が痛くてたまらないのだ。

「だ、誰か取ってえ！」

叫んでは見た物の、その声は大半が桶の中で反射してしまい、外部に漏れた音は常人の普通の話声程度。

その上前は見え、全身油まみれで床も油まみれ。

これでは誰も気づけないし、響子自身も思うように動けない。しかもそこへ

「大丈夫？」

声をかけたのは、誰でもなく真犯人のぬえ。

油を踏まぬよう浮遊しながら、後ろから響子に話しかけた。

「あ、お願いします、取ってください、取れないんですう」

べそをかきながら懇願する響子。

見えない事をいいことに、ぬえは腕を組んでニヤツと笑いながら

「はいはい」

と、響子のかがんだ背中に足を当て、

「そうら、飛んでいけえッ！」

思いつきり足で押し出した。

無論その先もオイルロードである。

「みやあああああッ、やだやだやだ止めてえええッ」

再び油の上を滑って行く響子。その叫びは誰にも届かない。

しかもこの時、もっと大きな問題があることに、視界を閉ざされた響子は気づかなかった。

この廊下の突き当たりは庭に面する縁側、しかもその庭には正面に池がある、と来た。

このまま勢いを殺せずに直進した場合速度を考慮して、池に落ちるか、ワンバウンドして池に落ちるか、どちらかであった。

ぬえとしてはどちらでも良く、ただ響子を面白おかしく池につき落としただけであった。

そのためだけに寺中を油まみれにするとは、なんとまあ壮大な御苦労をこなしたものである。

「ふおおあああああッ」

そんな大ピンチとも知らずに床を滑る響子。

着々と迫りくる廊下の先端。

その悪夢の終着点に近づいたびに高まるぬえの興奮。

そして、ほとんど速度を落とせぬまま、とうとうその最果てが訪れた。

廊下の最果て、縁側から響子は投げ出された。

「ふあっ!？」

何が起こったかも理解できない響子に飛べるはずもない。

すべてが自分の描いた筋書き通りに終わる、そんな勝利をぬえが
確信した瞬間――

「危ないッ」

池に落ちる寸前であつた響子を誰かが抱きかかえた。

こうしてようやく響子は止まったのであつた。

「どちら様か存じませんが、怪我はありませんか？」

「あ、ありがとうございます！ お寺の新入りの、響子と言います！」

その”誰か”に下ろされ、ようやく二本脚で久々に地に立った響子は、桶をかぶったままぺこりと頭を下げた。

「新入りですか……、こちらこそよろしく願います。ところで失礼かもしれませんが、その”桶を被る”というのは酷く不便に思えるのですが、キヤラ付けか何かですか？」

「はっ、ち、違ふんです。中で引つかかっちゃって取れないんです」
「なるほど、困っているわけですね。分かりました、少々乱暴になるかもしれませんが」

そう言つと、その”誰か”に桶を引つ張られた。当然鼻が引つかかる。

「痛い痛い、痛いです！」

「おっと、失礼しました。痛いというのに無理に引きぬくわけにはいきませんね。では仕方がない、少しばかり動かず直立していただけますか」

「は、はい」

そう言われ、響子は気をつけの姿勢で直立した。

するとその途端、『響子の頭には傷1つつけないまま』被っていた桶が縦に一刀両断され、ゴロンと転がり落ちた。

木の部分は兎も角、鉄の輪の部分すら包丁で豆腐を切ったときの如く縦一直線に切断されている。

それでいて特に痛みを感じることもなく怪我をすることもなく、外側の桶だけが切り捨てられた様は、本当に見事としか言いようがなかった。

しかし響子が驚いたのは、その桶が綺麗に外されたというより、その外してくれた”誰か”の姿を見たことからだった。

「ようやく御顔を拝見できましたね」

神々しい猩々緋の服に風になびく純白の袖、金と黒の入り混じった髪。

そびえ立つかのように立派な槍と、青白く輝く宝塔を持った彼女、

「寅丸 星と言います。以後よろしく願いますね、新入りさん」

そう言った彼女のことを、響子が知らないはずもなかった。

副頭領の星、妖怪でありながら毘沙門天代理を務めるという白蓮にも劣らぬ偉業の持ち主である。

「こ、こちらこそよろしく願います！」

反射的に響子は深々と頭を下げた。
そうすると、星は

「それはそうと、見たところ貴方、服の方も大変なことになっている
ようです。ナズーリン、何か着る物を持ってきてあげなさい」

と振り返ったが、

「……ナズーリン？」

響子から見れば当たり前かもしれないが、星からすれば多少戸惑
うの無理はなく、

星の背後をついてくるように一緒に帰ってきたはずの一番部下ナ
ズーリンがいつの間にかいなくなっていたのである。

そして、いつの間にか首謀者ぬえもまんまと寺から逃走していた
のであった。

五話目：響子ちゃん早くもピンチ（後書き）

桶「解せぬ」

はい、どうも。作者の兎です。

ぬえの悪行もエスカレートする中、いよいよ寺の副頭領、星様登場です。

前回で白蓮について「敷居の差を感じさせないカリスマ」と言いましたが、星は「神々しさを見せつけるタイプのカリスマ」を目指して書きました。

つまり神奈子やレミリアと同タイプのカリスマです。

初期の頃からドジっ子設定がついて回るようになった星ですが、個人的にあまり好みではないので、この方針で行くと思います。

そういえば前回書き忘れたこと。

前回あたりまで、白蓮のことを「妖怪の英雄」と称したことが数回ありましたが、これは、紫を「妖怪の賢者」と称する事に対する対のような関係を意識して使いました。

他にももう1人くらい、誰かを「妖怪の。。。と呼ばせてみたいなんて。

肩書きって素晴らしいですね。

まあ、それだけです。

さて、次回はもしかしたら響子がメインではないかもしれませんが。

名前だけ出てきたナズーリン、逃げ出したぬえ、その辺りの話を書いてみたいと思います。

たぶん。

六話目：ぬえちゃん大逃走なう（前書き）

前回のあらすじ

響子をいじめるべくお寺を油まみれにしてしまったぬえ。（五話目参照）

そしてナズーリンが動き出す。（五話目参照）

六話目：ぬえちゃん大逃走なう

「お、いい感じいい感じ」

油まみれになってしまった服の代わりに、響子が貸してもらった服は、よりにもよって水蜜のセーラー服であった。

何故セーラー服になったのか、それは単純に水蜜が一番最初に服を貸すと名乗り出たからである。

名乗り出た理由は、今寺にいる者の中で自分が一番響子と体格差が少ないのと、

（響子に服を貸す？ あ、でも、この子ならセーラー服似合うかも）

なんて思ってしまったからである。

そんなわけで、多少ぶかぶかとは言えセーラー服を貸してもらえた響子。

何気に御揃いだが、それより響子が驚いたのは水蜜の部屋に入れてもらい、その箆笥の中を見てしまった時。

そこにバートと揃うセーラー服の群れ。それも、パツと見て違いが分からない。

「あの、なんでおんなじ服たくさん持つてるんですか？」

と聞いてみたら、

「同じじゃないわよ。細かいけど色、生地の厚さ、動きやすさ、保水力、緩衝度、丈の長さ（ミリ単位の違い）、それから……」

その他いろいろな項目が微妙に違うらしい。

正直なところ、結局あまり大差ないように思えてしまうのだが、それでも熱弁する先輩を見ると

（すごい、なんかよく分からないけど、でも、すごかつこいい）
妙な感心をしてしまうのであった。

「ちっ、これからって時に帰ってきやがって」

一方こちらは、寺から少し離れた、妖怪の山一合目。

一目散にここまで飛んできたぬえは、息を落ち着かせながら木に寄りかかるように降り立った。

星はぬえの最も苦手とする相手である。あれに比べれば一輪や水蜜、それどころか山に居座る天狗や地底に住まう鬼すら可愛いものだ。

なぜそこまで恐れるのか、まずこれは白蓮にも言えることだが、底知れぬ実力の持ち主だということがあげられる。

一輪や水蜜とは付き合いが長いだけに、彼女らのできることとできないことが大体分かるようになってきた。

だがさらにハイスペックを持つ星や白蓮は、本当に不可能などないのだろうかと思えるほど実力未知数なのだ。

その上で妖怪としての力のみならず、ぬえと相性が悪い法力までもを軽々と扱えるから性質が悪い。

（本当は相性が悪いとぬえが思い込んでいるだけなのだが、思いこみによりそれが現実となるのが妖怪の悪い点）

その上で白蓮と星を分ける決定的な違いは地雷の場所。

あくまで勘だが、白蓮は殺生など取り返しのつかぬことをしない限り苦笑しながら許してくれるという確信がある。

その地雷ポイントさえ踏まずに歩けば、例え相手が悪くても怖くはない。

だが星の場合、その地雷ポイントがどこにあるのかとんと見当がつかない。

性格は穏やかなのだが、中々感情を表に出さないので素性がいまいちつかみにくい。

しかも星は軍神代理。実は好戦的でした、なんてことが無いとも言切れない。

よって、この地雷に関してはピンポイント避けではなく、保険の意味をこめて大きく迂回せねばいけないのである。

そしてもう1つ、星を敵にまわすには厄介な点がある。

「……ここまでくれば、そう簡単には分かるまい」

「悪いね、もういるよ」

背後から予期せぬ返事が届き、ぬえは心臓が縮みあがる思いがした。

もしやと思い木の裏側に回りこむと、その声の主、ナズーリンが木によりかかるように立っていた。

これがもう1つの厄介な点、忠臣ナズーリンの存在である。

小生意気で口が悪くしつこい、と悪い点だけで原稿用紙1枚埋められるほど嫌な奴だとぬえはつくづく思っている。

（実はナズーリンも、態度がでかい割に頭が悪く役に立たない、とぬえの悪い点を挙げるだけで原稿用紙1枚埋められるほど嫌な奴だと思っているのだが）

「な、何の用よ」

「この後において白を切るとは呆れた根性の持ち主だね。ま、それ

はいつものことだから何とも思わんが」

ナズーリンはそう言うと、腕を組んでぬえの方に向き直った。

「君が寺中を油まみれにした下手人だと言うことは子鼠から聞いている。それも、明日になれば大勢の門下生が来るというのに、だ。無論、ご主人様があの程度のトラップに躓くとは思ってもいないし、他の誰が転ぼうと私の知ったことではない。

だがね、もし明日になり門下生が滑って転び、こんなつまらぬことで求心力が失われていくななんて馬鹿げた話があつて良いと思うかい？」

「ふん、お前が困るならお前が掃除すればいいだけじゃんか」

「ゴメンだね。なぜ君の尻ぬぐいを私がしなけりやならない。君が汚したんだ、君が掃除するのが筋つて物だと思っただけだね」

「言わせておけば、この子鼠風情が！」

頭にきたぬえ。

まず弾幕用を暗雲を展開、ナズーリンの視界を一気に奪つ。

同時にナズーリンの足を踏み、逃げ道を閉ざした上で、親指に人差し指をひっかけ

「……不意打ちとは感心しないね」

「このぬえ様を怒らせたお前が悪いのさ」

ナズーリンの額めがけ、渾身のでこピン。

人間のでこピンは「痛い」で済むが、身体能力が出鱈目な妖怪の場合、それで済まないことも多々。

まして何もかも出鱈目なぬえの場合、その時の気分がおおよそ身体能力と言ってもいいくらい精神状態が体に反映される。

結果、後ろの木にまでめりこむ程度の衝撃を受けたナズーリンの

KO負け。

もつとも、不意打ちに近いこの戦いを”勝負”と言って良いかどうかは別として。

「私に御説教なんて、千年早いわよ」

そう言い捨てると、ぬえは宛てもなく飛び立った。

妖怪の山、三合目。

沢沿いに飛んでいたぬえであったが、滝壺に河童が営む茶屋を見つけた。

「ん、そろそろ小腹もすいてきたし、甘味でも頂こうかな」

こう見えて（どう見えているというのだ）、甘味好きである。そうと決まれば即実行。すぐさま急降下、茶屋の前に降り立つと適当に椅子に座り、店主に向かって言った。

「みたらしだんご2本とお茶1杯ちょうだい」

「それとヨモギだんご3本も。勘定は一緒にいいよ」

はいよーっと、中から店主の声。

一方、『誰だよ今ヨモギだんご頼んだ奴』と隣を見てみれば、いつの間にか座っていたナズーリン。

「げっ、いつのまに!?!」

「勘違いしないでくれよ。私の奢りじゃない、君の奢りだ」
「だ、誰がお前なんかに奢るもんか！」

予想外のことに戸惑いながら、ぬえは店を飛びだすと全速力で山を飛び下りた。

自身の所業がしつこいことは別として、しつこい奴は大嫌いである。

おそらくナズーリンは自分が山を登ると予想しているから、降りてやれば、そう、霧の湖にでも隠れてやれば分からないだろう。

あまり速く飛ぶのは得意ではないが、それでも出来うる限りの速さで霧の湖に向かったぬえ。

「あー、疲れた、でも、ここまで、くれば……」

正直、だんごを食べそびれたことは残念だったが仕方ない。

あのうるさいのに目をつけられるよりよほどマシである。

霧の湖は、その名が示す通り今日も霧が溢れ、前もぼんやりとしか見えなかった。

何もない面白くないところではあるが、そんな中ぬえは霧の向こうで誰かが釣りをしていたことに気づいた。

霧のせいでよく分からないが、まあ驚かした拳句、湖の中に突き落としてやれば少しは腹いせになるだろう。

そう思い、慎重に近付いていく。

釣り人は蓑を被っていてよく分からないが、大きさから見るにまだ子供のようだ。

これは楽勝ね、そう思ったぬえは正体不明の種を身にまとい（これで相手には恐ろしい化け物に見えるはず）、肩を叩いて話しかけた。

「ちよつとあんた、その竿私に貸してよ」

振り向いた子がどんなに驚くかと期待してみれば、振り向いてみればなんとナズーリンであった。

これにはぬえが驚きである。

「君に貸せるのはこの雑巾だよ。せいぜい頑張って掃除してくれ」

正体がばれている以上、種は効かない。

ぬえはぼんと渡された雑巾をナズーリンの顔に投げつけ、同時に飛び立った。

（今度は、どこだ？　どこなら気づかれない？）

悪知恵ならいくらでも働くぬえだが、追いつめられると弱い。

必死に知恵を絞り、ひらめいたのが『人の家の中』であった。

ならば、目立たぬ所にある家が良い。そうだ、魔法の森だ。霧雨魔法店だ。

もういい加減、全力で飛ぶのも疲れてきたが、仕方ないことである。

そうだ、もし主がいなければベッドを貸してもらおうしよう。いても脅せば同じ事だ。

そう思いながら飛び続け、ようやく着いた霧雨魔法店。

店の表には『不在御免』の掛札。

しめた、即座にぬえは侵入口を探す。

魔法使いの家ともなれば鍵は全て魔法、力ずくで開けるのは難しい。

だが幸いな事に、裏口のドアノブに手をかけると、何の抵抗もなく開いた。

主、魔理沙が鍵をかけ忘れていたのだ。

「よし、邪魔するわよ」

入ってまずあったのがキッチン、それから廊下を進んでダイニング、階段を上がって物置、その向かいに見つけたベッドルーム。和風派を自称する割にはベッドは実にふかふかで寝心地良さに思えた。

「人間の癖に、こんな上等な所に寝るなんて生意気ね」

寺に入り浸るようになったぬえだが、基本的に寺は布団で寝るのがセオリーなので、ベッドなんて久しぶりだ。

起きたらこのベッドを持ちかえてやろうか、なんて思いながら布団をめくると

「君もそう思うかい？ 奇遇だね、私もだよ」

既にナズーリンが寝ていたものだから、もうぬえは頭が痛くて痛くて仕方がない。

「ところで掃除の件なのだが――」

「うるさいうるさいっ、お前はそこで永眠している！」

布団をかぶせ、反対側の部屋の物置を開ける。

そこにあったガラクタの中、何か良い物はないかと探して見れば錆びた鎖が目についた。

しめたと言わんばかりに、ベッドルームに戻って布団をめくる。

「改心したかい？」

まだナズーリンがそこにいるのを確かめ、

「誰がするもんですか！」

布団をかぶせるとベッドごと鎖でぐるぐる巻きにした。

「これでついてこれまい」

これで魔理沙が帰ってくれば、まずナズーリンも無事で脱出はできなだろう。

だが自身もへとへとである。できればどこかで休みたい。

他に安心できる場所、と言われても中々出てこないものだが、兎に角飛びながら考えようと裏口を開けると、

「やあ、階段を下りるだけなのにえらく遅かったね」

仁王立ちして待っていたナズーリン。

もう驚き疲れて、もしくは呆れて物が言えないぬえ。

そんなぬえの様子を見て、ナズーリンはニヤツと笑いながら言った。

「なんだ、もう息があがつてるのかい？ 情けないものだね。まあ、いいさ。まだ逃げるかい？ それともまだ私を倒すかい？ 私としてはどちらでも良いんだよ。」

そうやって君が無駄なあがきを見せれば見せるほど、連れて帰る時に暴れなくて済むというものだ。さあ、思う存分逃げてくれ。どこだって構わないよ、君を探すなんて造作もない事さ。

そうだ、君を追っていたら小腹がすいた。また茶屋に逃げてくれよ。君を追うという名目なら経費で落とせるしね。今は抹茶パフェが食べたい気分なんだ、さあ早く」

昼下がり、ぬえは自分から寺に帰ってきたかと思うと、誰に言われるまでもなく雑巾片手に無言で掃除を始めた。

「ちよつと、あれどうしたのよ。ぬえが自分から掃除してるじゃない」

「ひよつとすると新たな異変の前触れかもしれない」

そんなぬえを傍目に一輪と水蜜がこそこそ話をしているが、ぬえはそれに気づかず黙々と作業している。

作業こそしているものの、今、ぬえの頭の中では、あの憎たらしいことこの上ない鼠をいかに合理的かつ自分の手を汚さずに排除するか、それだけを考えているのである。

六話目：ぬえちゃん大逃走なう（後書き）

適当な英単語の前に「ナズーリン」と付けると必殺技のように聞こえる。

「ナズーリンペンデュラム」

「ナズーリンロッド」

「ナズーリンストーカー」

「ナズーリン抹茶パフェ」

はい、どうも。作者の兎です。

今回は宿命のライバル、ナズーリンに登場してもらいました。

誰にとつて宿命のライバルかと聞かれれば、その相手はボクです（おい

と言うのも、過去の作品を友人に見せた所

「おまえのナズは軸がぶれている」

と（もつと言葉を柔らかく）言われたことがあるので、言わば今回はリターンマッチとなりました。

イメージとしては、鉄拳制裁より精神的ダメージの大きい口撃がメイン？

原作での初対面巫女相手に「馬鹿みたいだね」と言いのけたあの感じを元にキャラ付けしてみました。

うまく表現できたかな。

さて、今回のお二人。

命蓮寺の「犬猿の仲」な感じを前面に出そうということを書きました。

全員仲良しというのもメリハリがないかな、と思って。

（勿論その方が平和なのですけどね）

いよいよ星蓮船キャラも残り1人と言いたいところですが、
見て分かる通りまだナズと響子が未対面なのですよね。

次回はどちらかと言えばKTさんではなくそちらを書いていきたい
です。

たぶん。

七話目：響子ちゃん夕食に招かれる（前書き）

前回のあらすじ

響子ちゃん、仏道入門して一生懸命働きました。（五話目参照）

七話目：響子ちゃん夕食に招かれる

時は過ぎ、夕暮れ。

今日だけで廊下を二周くらい雑巾がけし、ついでにたった今、庭も一通り掃除した響子。

貸してもらったセーラー服は少しばかり土で汚れてしまったが、それに気づかないくらい掃除に励んでいた。

額に浮かんだ汗をぬぐって、山に向かって傾く夕焼けを眺めた。

「……今日は色々あったなあ」

恐らく今日は、ここ数年で最も充実した日となっただろう。

（あのいじめっ子を除けば）一輪も水蜜も星も白蓮も、皆良い人たちであった。

初対面の自分に優しく接してくれたし、相談にも乗ってくれた。

響子はとても幸せな気持ちであった。

だが、そろそろ夕暮れ。帰る時間と思ってもいいだろう。

響子自身は既に独り立ちを果たした身なので、帰らなくても誰が心配するわけでもない。

問題なのはいつまでもこの寺に在留する事の方で、流石に夜まで長居するわけにはいかないだろうと考えていた。

「明日も来ても、大丈夫かな」

勿論、明日も早朝から山を下りて掃除に来るつもりではいる。そうしたら明日はもっと別な修行をさせてもらえるだろうか、なんて考えていると

「響子ー？」

縁側から一輪が響子を呼んだ。

「あ。はい。何ですか？」

「もし良かったら、夕飯うちで食べていく？」

「わ、良いんですか!？」

思いがけない事に響子は驚いた。

ちよつと頭の端で『今夜の夕飯何にしようかな』なんて考えていたくらいであつたから、まさか御馳走になれるとは思つてもいなかったのだ。

「良いのよ、今日一日たくさん働いてくれたからね。何かしてあげないとこつちが申し訳ないわ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて!」

「分かつたわ、もうちよつと待つててね」

そう言つて一輪は奥に行つてしまつた。

一輪こそ命蓮寺の炊事担当であり、精進料理の作り方なら一通りマスターしている。

(やっぱり、この寺の人たちはみないい人ばかりだなあ)

未知の精進料理を想像しながら、響子は感慨にふけていた。だがこの時、響子は未だナズーリンとは未対面であつた。初対面における命蓮寺の鬼門、ナズーリンと。

「豚汁食べたい」

炊事場に戻った一輪を待ち受けていたのは、ようやく後片づけを終えたぬえであつた。

「ねえ、豚汁食べたい。作ってよ」

「それ、殺生原則禁止の寺で言う台詞？」

振り向くこともせず、一輪は淡々と米を研ぎ始めた。

「もう何日動物性たんぱく質食べてないか分からないよ。たまには良いじゃん」

「百万歩譲って作つたとしても、貴方はそれを口にできるほど修行を積んでいるとは思えない」

「ちえっ、けちんぼ」

頬をふくらませて出ていくぬえ。

水蜜なら煽てれば作ってくれそうだが、残念ながら炊事場を支配しているのは熱心な仏教徒、一輪である。

そもそも仏教では肉食は禁止されているし、それは多少戒律が緩められた命蓮寺でも何ら変わらない。

余談だが、「多少戒律が緩められた命蓮寺」と言つたが具体的に次の三つに収束されている。

『無駄な殺生は禁止』（妖怪は人間を襲う物、という最低限の定義を考慮したギリギリの譲歩らしい）

『みんな笑顔で元気に楽しく』（あまりぎちぎちに縛りすぎてもどうかと思つた白蓮が考案したもの。いわゆるビギナー向け戒律）

『自分が行つたことは（できる範囲で）自分で何とかすること』（壁に穴を開けたり廊下に油をまいたりした者は自分で修理すべき）

あくまでこれらはビギナー向けであり、白蓮や星や一輪など熟練者はもつと厳しい物を順守している。

「まったく、ぬえもこの寺にいるなら少しは勉強するべきよ」

そんな愚痴をこぼしながら米を研ぐ一輪であつた。

だがその炊事場と壁一枚挟んだ外では、一輪は全く気づいていなかったが、壁によりかかつて座りこんだナズーリンが干し肉をこっそり食べていた。

ばれると煩いので隠れて肉を食べるのはナズーリンのいつもの手口だ。

戒律違反だということはナズーリン自身も重々承知しているのだが、毘沙門天に直々に仕えている身にもなればこの程度の特権は許されると思っている節があるのである。

（君こそ、この寺にいるなら少しは目を光らせるべきだと思うけどね）

そんなことを内心で呟きながら、今日のぬえ搜索に協力した子鼠たちに干し肉を小さくちぎっては渡していく。

子鼠を幻想郷中に拡散させて情報を共有しながら搜索活動を行うと、効率は非常に良いのだが、こうした管理コストに多少の難があるのだ。

人海戦術とダウジングは時と場合に依じて使い分ける必要がある。

夕日も落ち、宵闇の訪れ。

大きめの円卓に運ばれてくる料理を前に、響子はこれが精進料理か、と頷いていた。

その料理を挟んで向かいに白蓮、その隣に星が座っているのを見ると、二大偉人の前に円卓が国境のように思えてしまう。

ちなみに、一輪が作った料理を運ぶのは水蜜の仕事であり、本人に言わせれば『運搬業って船長がやった方が格好つくじゃない？』らしい。

たまにずっとこけて転んで一品くらい台無しになってしまうのは可愛敬。

「今日はどうもありがとう。おかげで綺麗になったわ」

響子の向かいに座っていた白蓮にそう言われて、響子は当然嬉しくなった。

「こちらこそ、何から何までありがとうございました！」

そう言って礼を返す。

さてさて、そんな美味しそうな料理の匂いをかげばご飯の時間と察するのは誰だって同じ。

特に鼠は鼻が利くから、すぐさま探り当ててしまうだろう。

そんなわけで、誰に言われたわけでもなくとも夕飯の時間だと察したナズーリンが居間にやってきた。

この時、響子と目が合ったのが、2人のファーストコンタクトとなったわけだが

（あ、鼠さんだ。お寺には鼠さんもいるんだ）

特にナズーリンのことは知らなかった響子はそんなことを思った。前もって彼女の存在を知らなかったというのも大きい、見た感

じ自分より身長も同じか小さそうだということもあり、響子はナズーリンのことを（少なくとも他の住人に比べ）重く見ることはなかった。

一方ナズーリンはナズーリンで、

（新入りか？ いや、それよりなんで船長の服を着ているんだ。それとも、”そっち側の新入り”なのか？）

と、目の前の新入りを眺めていた。

”そっち側の新入り”とは、何か。

寺に来るのは檀家や門下生ばかりではない、死体もまた墓に入れられるために来ることになる。

『セーラー服』水死体』が成立しているナズーリンにとって、”そっち側の新入り”とは、つまりそういうことである。

きちんと供養しなかった死体が妖怪化する例は決して珍しくなく、そもそも水蜜もその一例である。

「あの、今日から新入りになりました、山彦の響子と言います。よろしく願います」

響子が頭を下げると、ナズーリンは

「ふーん、山彦か。確か、山奥に籠り人を驚かす妖怪で、山を降りること自体ほとんど好まないと聞いていたんだが、君は廃業でもしたのかい？」

といつも癖で初対面の相手に堂々と冷やかしを浴びせたが、これがいけなかった。

響子も流石にこれにはカチンと頭にきた。

確かに山を降りたのは事実だが、言うまでもなく廃業というつも

りは毛頭ない。

「違うわよ！ 確かに今は下火だけど、でもきつといつか人間に山彦の恐ろしさを知らしめてあげるんだから！」

頭に来ていた事もあって、敬語がどこかへ吹っ飛んでしまったが、特段響子は気にしていなかった。

いくら先輩とは言え、嫌なことを言われるのは嫌なのである。

しかしナズーリンにとって、この響子の反撃は想定内の事であった。

そもそも、この一言を引きだしたかったが故に冷やかしを浴びせたのだ。

ナズーリンの嫌いな物を端的にまとめると”猫”と”猫かぶり”である。

前者は種族の都合上、生理的に受けつけないのでどうしようもない。

問題は後者、”猫かぶり”。

自ら寺に来るほど真面目な妖怪であれば、社会的挨拶を一通り覚えていく程度の教養を持ち合せている事が多い。

だから、この寺で初めて会う者は大体毎回決まり切った挨拶をしてくる。だがそれでは個性が見えてこない。

そこでちよいと毒のある言葉を投げかけてやり、社会的通例という表皮を引っ剥がして相手の中を見てやろうという魂胆なのだ。

そうした観察業（程度によっては監視とも言つ）こそナズーリンの本職であり、探し物はあくまで副業にすぎない。

まあ、毒舌云々に関しては彼女の素の性格が混じっていると言っても過言ではないのだが。

「ナズーリン、言葉が過ぎますよ」

星がそう言つて顔をしかめると、それまで得意げだったナズーリンの表情が一変して澄まし顔になった。

「おっと、これはこれはご主人様。お見苦しいところを見せてしまい大変失礼いたしました」

そのオンオフの切り替えの速さに、響子は啞然としてしまった。ナズーリンとしては敬意を払うべき相手には礼儀を尽くし、それ以外の相手には皮肉めいた口調で話すという切り替えをつけているだけだが、周りから見れば猫かぶりと思われるのも仕方がない。

本来、猫かぶりはナズーリンの嫌いな物なのだが、その本人が猫かぶりと思われるのは実に皮肉めいた物である。

「何？またナズーリン何か言つたの？」

お盆に乗せて味噌汁を運びに現れた水蜜がそう言つと、ナズーリンは相変わらず澄まし顔で

「別に、いつものことさ。特段変わった事は言つてないよ」

「貴方の場合、その”いつも”が既に喧嘩腰でしょ？ 少しは何とかしなさいよ、その性格」

「これでも善処はしている方なんだけどね」

さらりと言つてのけるナズーリンを見て、水蜜はあることに気づいた。

（響子とナズーリン、ひょっとすると相性最悪じゃないかな）

片や熱心で生真面目な性格の持ち主、片や捻くれた性格と毒舌の持ち主。

これはとんでもない爆弾を抱えてしまったかもしれないぞ、水蜜はそう思いながら味噌汁を置いて厨房に戻ると、ご飯をよそっている一輪に小声で言った。

「あのさ、ナズーリンと響子のことなんだけどさ——」

「私も絶対あの2人は相性悪いと思う」

「あ、やつぱり？ で、あそこで拗ねてるぬえは何？」

「私が豚汁作るまで動かないそうよ」

「何この爆弾三角形」

厨房の奥にたたずみ無言の抗議を続けるぬえをよそに、一輪は淡々とご飯を盛り、水蜜は淡々とそれをお盆の上に乗せていった。

今日の献立。

ご飯、味噌汁、ホウレンソウのお浸し、若竹煮、蒚の漬物、豆腐と野菜炒め、エア豚汁（ぬえの空想の産物）。

肉魚類ゼロの食卓とは言え、貧乏な物ではない感じを思わせると共に季節感も出す料理法は一輪ならではの。

なんだかんだ言って食欲に屈してしまっただぬえも現れ、新入り響子を迎えたためいつもより1人多い食卓。

「それでは、いただきます」

白蓮が箸をとったのを合図に、

「いただきます」

皆が箸をとる。

響子にとって初めての精進料理。

胸を高鳴らせながら、落の漬物をつまんで口に入れた。

そして、驚いた。

その美味しいことと言ったら、ここ最近自分が作ってきた食事に比べたらとても形容しがたいものであった。

「どう？　うちの料理」

一輪にそう尋ねられると、響子は目を輝かせて

「美味しいです！　今度作り方教えてもらっていいですか？」

「あら、いいわよ。私としてもお手伝いが増えると助かるしね」

実際、炊事番は殆ど一輪1人で行っている。

本当は猫の手も借りたくなる時もあるが、白蓮や星に頼むのは恐れ多い。

ぬえに頼めば何をしでかすか分からないのは自明であるし、ナズーリンのつまみ食い頻度は異常である。

強いて頼めるとしたら村紗だが、どんぶり勘定で行われる彼女の料理はやたら塩辛いと不評である。

よって消去法で一輪ソロで料理を作っているのだが、

（まあ、響子なら大丈夫でしょう）

おそらく一からイロハを教えば良い働きをしてくれるだろうと一輪は思った。

「わ、本当ですか！？　ありがとうございます、もう皆良い人すぎ

て感動してます！」

響子が興奮を抑えきれない様子でそう言つと、その隣でナズーリンが口にご飯を運びながら

「君の感動はずいぶん安いだね。持つて行つても質屋の主人が苦い顔をするな」

そうボソツとつぶやいたのであつた。

「ナズーリン、口の中に物を入れたまま喋つてはいけません。それと貴方は食べるのが少々速すぎる、食べ物はず30回噛んでから喉を通すものです」

星がそう苦言を呈すると、とりあえずナズーリンは口の中にあつたご飯を呑みこむと

「確かに少々不注意がすぎましたね。しかしながらご主人様、1つだけ言わせてもらえれば、私達のような鼠社会では30回も噛んでいては生き残れないですよ。その間に皆、食糧を喰い尽くしてしまいますからね」

「しかし今の貴方は自分の食事が確保されているでしょう。誰も横から取りませんから、落ち着いて食べなさい。急に食べると内臓に悪いですよ」

「善処はしてるんですけどね、それでも」

そう言つたナズーリン。

筑前煮を口に運ぶと普通なら3回の所を5回噛んで呑みこんだ。彼女なりの”善処”らしい。

「うつ、こ、小骨が喉に刺さった」

唐突に水蜜が喉を押さえる。

それに驚いた響子であつたが、何か言う前に

「小骨が入つてゐる料理なんてないわよ。魚使つてないんだから」

一輪が即座に制した。

全部分かつてゐるのだ、これが村紗の遠回しな『食事に魚を使え』アピールだと。

”船長ジョーク”はとても分かりにくい物がたまに混ざつていて、たまに白蓮すら理解できないこともある。

全パターン理解しているのは一輪くらいである。

「と、豆腐の小骨が……」

「ないから」

ここまでがお約束。

「村紗、小骨が刺さつた時はご飯を食べると良いわよ。よく取れるから」

今日もまた”船長ジョーク”をいまいち理解できなかった白蓮が
そう言つと、水蜜はご飯を口の中にかきこんで呑みこむと

「いやあ、ありがとうございます。おかげで小骨とれました」

と、刺さつてもいないエア小骨の礼をさらりと言つてのけた。
これで終わるかと思いきや、

「船長。私が30回以上噛むようにご主人様から直々に注意を受けたのを見ていながらご飯を丸のみするとは、君もなかなか太い奴だね」

さらにナズーリンが横槍を入れたり、拳句の果てには今まで黙っていたご飯を食べていたぬえが

「ぬえ、私も小骨が刺さると嫌だからさ、豚汁作ってよ」

と、一輪に支離滅裂な要求を出したり。

寺での食事と言えどもつと厳格で静粛な物だと思っていただけに、響子は目前で行われる止まらない口戦を、箸を止めてただ茫然と見守るのであった。

七話目：響子ちゃん夕食に招かれる（後書き）

ぬえの食卓

エア”豚汁”

エア”鶏肉の唐揚げ”

エア”ジンギスカン”

エア”なんでも言うこと聞いてくれる一輪”

エア”ナズーリンの土下座”

現実是非情である

はい、どうも。エア作者の兔です。

一通り命蓮寺の住人が描けて満足です。

星以外の言うことなど聞きそうにもないけど食い意地は有り余るナズーリンとか、

精進料理に飽きてお肉を食べたくてしょうがないぬえとか、
ちよつと作法にはうるさい星とか、

食事に関しては全部一手に引き受けている一輪とか、

よく分からない”船長ジョーク”とか、

よく分からない”船長ジョーク”に真摯に対応する白蓮さんとか。
今回は割と大暴れしました。はい。

次回はたぶんこれの延長線上な話を書きたいです。
たぶん。

八話目：響子ちゃんと変な生き物（前書き）

前回までのあらすじ

仏道に入門した響子ちゃん（四話目参照）

掃除を頑張り（五話目参照）、

夕飯をいただきました。（七話目参照）

八話目：響子ちゃんと変な生き物

お夕飯も頂き、外もすっかり暗くなってしまった戌の刻。

一日中掃除に精を出し、美味しいご飯でお腹いっぱいになった響子。

「ふああああ」

と、あくびを1つ。

早寝早起きの習慣を続けてきた響子にとって戌の刻は就寝時刻にリーチをかけている。

ましてここ何年振りに充実した日を送ったこともあり、すっかり疲れてしまったということもある。

そんなわけで、うとうとと船を漕ぐ響子。

「あら、もしかして眠いの？」

一輪に声をかけられ

「ふいえ、だいじょうふでふ」

と大あくびしながら響子は答えたが、どう見ても大丈夫には見えない。

「良かったら泊まっていく？ 布団ならたくさんあるし」

「ふえ？」

「それにほら、貴方の服も洗ったのはいいけどまだ乾いてないし」

「あ、そっか……。じゃあ、ふあああ、不躰ながらお世話になりまふ……」

目をこすりながら響子はぺこりと頭を下げた。

と言うか、もう頭を下げているのか船を漕いでいるのかパツと見て分かりにくい。

一輪はどちらかと言えば昼型妖怪なので、その気持ちは分からんでもない。

未だ人間としての一面を強く残す白蓮や、その白蓮に長きにわたって付き添ってきた一輪は昼型生活を好む傾向にある。

逆にぬえやナズーリンなど妖怪の特性を強く持っている場合は夜中に活発化しはじめる。

本来人間であつたはずの水蜜も、船幽霊化を機に夜行性化したままであり、星にいたつてはいつ寝ているのか分からぬ有様である。いずれにせよ昼型夜型の区別なく数日間睡眠をとらずに過ごしていることも珍しくはないのだが。

「じゃあ布団しいててあげるから、先にお風呂に入ってきてちやいなさい。お風呂の場所は分かるわよね？」

「はい、ありがとうございます」

昼に雑巾がけで寺を一周したので、構造に関してはよく分かっている。

響子は礼を述べてふらりと立ち上がると、部屋から廊下に出た。

廊下は灯りもなく暗がりに満ちていたが、響子にはこの程度なら見通すことなど容易い。

人間と違い、妖怪の暗闇を見通す能力はほぼ例外なく高いのだ。

よって、寺の構造さえ覚えていれば何ら怖くはない。

雑巾がけた時の記憶と照らし合わせながら響子は1人廊下を進む。

そうして、廊下の曲がり角、浴室まですぐという所まで来たときであつた。

例えるなら”ぐにゅ”っと、得体の知れない何かを足で踏みつぶしてしまった感覚が響子に伝わってきた。

ハッとして足をあげると、白くて丸い何かが潰れている。
その時、

「もしもし、その貴方？」

不意に背後から不気味な声をかけられ、響子はビクッと体を震わせながら振り向いた。

ずぶ濡れの青い服にビショビショの青いショートヘア、廊下にぽたぽたと水滴をしたたらせながら少女が立っていた。

どうしたわけか左目を押さえて立ちすくんでいる彼女、顔色はあまりよろしくない。

「この辺りに私の大切な物を落としてしまったの。貴方、知らない？」

落としてしまった、と言われてまっさきに響子が思い出したのは今自分が踏んでしまった白い変な物であった。

「も、もしかして、ごめんなさい、今踏んでしまったんですけど、これですか？」

そう言っって響子が”それ”を指差すと、少女は声を震わせて

「あ、ああ、お、おまえ、よくも、よくも……」

そう言っって響子の両肩を手でつかんできた。

それによって少女が隠していた左目が見え、響子は思わず息を飲んだ。

なぜなら本来目玉があるはずのそこに目玉はなく、代わりにどす黒い血の色でべったり塗られていたからだ。

そのおぞましい光景に、眠気も吹き飛び臆した響子は声も出せずガタガタと震えていた。

「おまえ、よくも私の目玉を踏みにじったなあッ！　代わりにお前の目玉をよこせえ！」

そう叫び、少女は響子の目めがけて手を伸ばした。

その瞬間にとうとう何かが切れた響子、慌てて少女の手を振り払うと

「や、やあッ、助けてええええッ」

声をあげると同時に、逃げるように走りだした。

振り向いている余裕なんてない。唐突な出来事に混乱していて、何が起きたのかすらまともに理解できていなかった。

兎に角慌てふためいて、ろくに前も確認せずに廊下を走った、ちよつどその時。

たまたまその時部屋から出てきたナズーリンと鉢合わせになり、響子は危うくぶつかりそうになった。

「おおっと、君か。何があったのかは知らんが、少しは前を見て――」

そういつもの調子で言いかけたナズーリンの肩をつかんで揺さぶりながら響子は

「出た、なんか出たあ！　なんか怖い一つ目お化けがいたの！」

と、声を張り上げた。

思いつき揺さぶられた拳句、近距離で大声を出されては流石のナズーリンもたじたじである。

「ま、待ってくれよ。何？ 一つ目お化けだって？」

「そう、本当に怖かったの！ こっち！」

そう言つて響子はナズーリンを引きずるように、問題の廊下に連れていった。

だが、既に廊下はもぬけのから。あれだけの出来事が嘘のように消え去っていた。

「……何もいないじゃないか」

「いたの！ 本当にさっき、一つ目お化けがいたの！」

「ふん。一つ目おばけ、ねえ」

ナズーリンは鼻で笑ったが、ふと廊下に何かが落ちているのに気づいた。

それこそ先ほど響子が踏みつぶした白い物体である。

その物体を調べるべく廊下にかがみこんだナズーリン、一人にされるのは怖いのでその後をびったり追う響子。

2人の注意が完全にその物体に向けられたとき

「もしもし、その貴方？」

またも背後から不気味な声が来た。

振り向くと、先ほど響子が見たずぶ濡れの少女が、全く同じように左目を手で押さえて立っていた。

響子は思わず息をのみ、ナズーリンの後ろに隠れたが、そのナズーリンは特に臆した様子もない。それどころが

「君の探し物はこれかい？」

と挑発するように、その白い物体を拾い上げた。

「あ、ああ、お、おまえ、よくも私の目玉を踏みにじったなあッ！」

少女は何のためらいもなくナズーリンに飛びかかった。

「代わりにお前の目玉を――」

そう叫んで少女がナズーリンの肩をつかもうとする、それこそまるで響子の時と全く同じように。

だがそこはナズーリンが1枚上手であったようで、すかさず少女の”左目”、そう、ただの空洞であるはずの”左目”を、

「よつと」

……突いた。早い話が目潰しである。

すると少女、空洞になった目を突かれたはずなのに

「おんぎゃああああッ」

と目を押さえてうずくまった。

「ひ、酷いよナズっち！ 問答無用でいきなり目潰しするなんて、いくらなんでもあんまりだあ！」

「ふん、小傘、君こそそろそろ相手を選ぶことを学習したら良いんじゃないかな」

少女、実名は小傘、は涙目になりながらナズーリンに訴えかけた。驚くことに、空洞だったはずの左目にはいつのまにか髪色と同じ青い目が入っていた。

一方でナズーリンはいつものペースで蔑むような笑みを浮かべている。

「まあ、今回は努力した方だというのは認めてやっても良い。たとえば、これなんてそうだ」

そう言つてナズーリンは目潰しに使つた自分の指を眺めた。その指はあのだす黒い色が全体を覆っていた。

「墨、だね。完全な黒ではなく、うまく朱を混ぜておどろおどろしい色を作り上げた努力は認めるよ。」

それに、それを自分の瞼に塗りつけ、いかにも片目を失つたかのように見せつけた演出までは、まあ大根役者の三文芝居としては上々の方だ」

褒めているのか貶しているのかいまちよく分からない言い方だが、さらにナズーリンは例の白い物質をつかんで話を続けた。

「だがこれはまずかった。こいつ、ただの玉こんにやくだろう？ 色合いも大きさも似ているし、目玉なんてそうそう触る機会があるわけでもない。」

だから暗がりならばこれで騙せると踏んだのだろうがね、ネズミは鼻が利くんだ。いくら匂いに気を配っても、エキスパートの前には無駄な足掻きに過ぎないのさ。

ま、私が君の立場なら、本物の人間の目玉くらい事前に準備した上で悪行に踏み切ったんじゃないかな」

「そ、そんな本物の目玉なんて怖い物用意できないよお」

涙目でナズーリンに必死に訴えかける小傘を見てみると、響子もすっかり気がぬけてしまった。

これがさっきの一つ目お化けの正体かと思うと、何だか驚かされた自分が妙に悔しいのであった。

「ふん、目玉が怖いとは最近の妖怪も情けなくなったものだね。ただでさえ幻想郷の人間は妖怪に慣れてるんだ。

かなり手の込んだことをしないと、驚くのは精々世間知らずな山彦くらいだよ」

最後に響子を一瞥し、ナズーリンはすたすたと来た道を帰っていた。

まさか最後に自分まで陥れるとは思っていなかった響子は啞然としていたが、一方で

「な、なんだいなんだい！ ナズっちのいじわる、けちんぼ、いやしんぼ！ 次こそ鼻を明かしてやるから待ってなさい！」

小傘は涙をぬぐうとナズーリンにむかってそう叫びながらどこかに走り去ってしまった。

俗に言う負け犬の遠吠えという奴で、どうせ次回だって明かすはずだったその鼻で笑われるのは目に見えている。

「……行っちゃった。なんなんだろう、あの人」

ただ1人茫然と取り残された響子。

ふとその時、小傘が逃げて言った廊下の先の方の隅に何か立てかけてあるのに気づいた。

歩み寄って見てみると、それは紫色の唐傘であった。

茄子を意識したような配色に一つ目と口が描かれ、そこから妙にリアルな舌が伸びている。

もちろんこんな奇妙な傘を見るのは響子も初めてであったが、傘というからには先ほどの小傘とかいう少女と何ら関係がないとも思えない。

「あの人の忘れものかな」

と、手に取ったとほぼ同時

「ん？ 何事か面白そうな気配がしたから来てみれば」

そこへひょいっと現れたのは、小傘と同じ悪戯属性の娘、ぬえ。

ぬえは現れるや否や、響子が身構えるより早くその手から茄子傘を抜き取ってしまった。

「あんだ、なかなか面白そうな物持つてるじゃないの。ちょっと貸しなさいよ」

「え、でもそれ、あの……」

貸しなさいと言う前に既に奪っている辺りはご愛敬。

ぬえはあの悪だくみの頬笑みを浮かべながら、手慣れた手つきで傘を開く。

そこへ

「あ、あのー、ここに傘忘れて行かなかった？」

決まりが悪そうにこっさり帰ってきた小傘。

だが、その傘をぬえが持っているのを見て大仰天。

「あら、小傘。その忘れ傘ってこれのことかしら」

「そうだよ、それだよ。ぬえちゃん、お願いだからそつと返して？」

冷や汗を浮かべる小傘であったが、ぬえはにやりと笑い

「返して」だって？ この私に物を頼む時は、せめて” ください” をつけるところから始めろって何度言ったら分かるのかしらねえ」

と、開いた傘の内側を指でつーつとなぞった。

ただそれだけの行為のはずなのに、これに小傘は鋭い反応を示した。響子にとっては予想すらできぬ事であった。

「うひゃうっ！？ く、くすぐったい！ お願いします、返してください」

「いやーだ。あんたのガードって結構固いから、この遊びをするのも久しぶりなのよね。思う存分楽しませてもらうわ」

と言いながら今度は傘の内側をこしょこしょとくすぐり、骨をつーつとなぞるぬえ。

「ひやははっ、く、くすぐった、ひううっ、くははっ、そ、そこダメっ、そこくすぐりたい、ひゃうううっ」

脇を押さえたりお腹を抱えたりで抱腹絶倒する小傘。

彼女の正体が傘の付喪神であるということは、持っているあの傘こそが小傘の本体なのだ。

つまり本体に与えられた刺激が少女部分にフィードバックされるというとんでもない弱点を抱えている。

そのくせ本体に抵抗手段はないので、万が一本体が悪意を持った第三者の手に渡った瞬間、小傘の未来は暗くなる。

「うひゃあああ！？ や、やめっ、はははっ、だめだめくすぐった
いよ、ひうつ」

特に、普段傘として触られるはずの無い部分（持ち手、雨粒の当た
たる表面以外）は総じて触られるのに慣れていない。

よってこういうところを攻められるのが小傘にとっては非常に脅
威となる攻撃であるし、それをぬえは十分理解している。

そう、理解してやっているのだ。確信犯である。

ただし、流石のぬえも本体の傘のどの部分が小傘のどの部分に作
用するのは分かっていない。

完全に分かり切った物ではないからこそ、楽しむ対象になるのだ。
小傘にはいい迷惑である。

無論、これらのことはついさつき小傘に出会ったばかりの響子が
分かってはいるはずもない。

なので小傘がどうして抱腹絶倒しているのかさっぱり分からず、
故に傍観することしかできない。

（な、なんだろう、この変な生き物）

最初は見ると語るも恐ろしき、目玉を欲しがる一つ目お化け。

だが一皮むいてみれば、そしてこのザマである。

いまいち何が起きているか分からないが、ちよっぴり可哀想に思
う響子であった。

八話目：響子ちゃんと変な生き物（後書き）

セクハラ、ダメ絶対

はい、どうも。作者だったかもしれない兎です。

8話目を書きなおさせていただきました。よってもうちょっとプロローグが続きます。

せっかく自分の手で書いているので、自分で納得が行くような進み方にしたいのです。

そのため旧8話を差し替えてこの8話目を書かせてもらいました。混乱させてしまったのならすみません。

そんなわけで小傘ちゃんです。

オッドアイだったり本体がどっちか分からなかったり、妙にネタにつきない小傘ちゃんです。

せっかく怪談を勉強しているのだからと、夏の風物詩的意味合いもかけてちよつと頑張らせてみました。

でも最後はへたれて終わってしまいました。

ぬえと違って悪い子にはなりきれないですね。がんばれ小傘ちゃん（最近はおくがあるお方の影響を多大に受けた結果、小傘がアモーレ アモーレと連呼するようになりました。がんばれ小傘ちゃん）

そんなわけで、たぶん次はお風呂です。

はい、お風呂です。

たぶん。

九話目：響子ちゃんお風呂に入る（前書き）

前回までのあらすじ

夕飯を頂いた響子ちゃん。（第七話参照）

泊めてもらえることになったけど、お風呂の途中でまさかのクリーチャー出現。（第八話参照）

最終的にやつつけたのはぬえでした。（第八話参照）

九話目：響子ちゃんお風呂に入る

「も、もう質屋に行けない……」

十分にもわたるセクハラの末に解放され1人ぼっちとなった小傘は、本体の傘を抱えて廊下の隅に座り込んで鬱オーラを放っていた。花も恥らう236歳の乙女だというのに、体中をくすぐられて顔を真っ赤に染めながら絶え間なく奇声を上げさせられ続ければ、それは誰だって落ち込む。

その犯人たるぬえは爽やかな笑みを浮かべてどこかに行ってしまったし、響子に至ってはもう何が起きているのか分からなかったので早々に退場してしまっていた。

ちなみにこの『もう質屋に行けない』発言は付喪神的概念の上に成り立っている言葉であり、人間にも分かるように翻訳すると『もうお嫁に行けない』になるのだとか。

多々良小傘、花も恥らう236歳の乙女、店頭に並べられればそれなりの価格で買ってもらえる自信は未だ捨てていない。

（現代人に分かるように言えば、合コンにさえ行けば男を釣ることもなど容易いと思っている女の自信）

その逃げたぬえがどこに行ったのかは定かではないが、退場した響子と言うと、浴室にいた。

自宅以外のお風呂に入ること自体久しぶりだったので恥じらいがなかったわけでもなく、広めの更衣室には他に誰もいなかったというのにこっそり服を脱いだ。

そうして浴室の扉を開け、

「広っ！」

まずはその広さに驚いた。

普通の1人が入れるくらいの桶風呂かと思いきや、そこにあつたのは同時に10人くらいは入れるのではないかと思えるほどの大きな浴槽。

早い話が銭湯規模といったところで、これには響子も腰を抜かすかと思つた。恐るべし、お寺。

余談だが入浴習慣の先祖を日本に持ち込んだのも仏教であり、そういった意味では寺のお風呂が整備されているのも頷ける（！？）話なのである。

そんなわけで、まさかこんなところでこんな豪華なお風呂に辿り着けるとは思つてもいなかった響子。

それも今こうして風呂にいるのは1人だけなので、独占状態（！）である。

とりあえずまずは体と頭をよく洗う。それも、念入りに3回ほど。何から何まで面食らうことが多い日だから、失礼のないようにしつつ慎重になっているのである。

それからようやく響子は湯につかった。

「ほふう、あつたかあ……」

思わず一息。

その気持ち良いことと言つたら、これまた未経験の域で一人勝手に感激してしまった。

実際の所は『お寺への憧れ補正』と『今日一日ずっと頑張った補正』が響子に満足感を与えているのだが、そんなことに気づくはずも無い響子、

「お寺って凄いなあ」

と、一言呟いた。

それでもやっぱり誰も来ていないようだ。

その時、響子の中にピーンとある考えがよぎった。

右を見て、左を見て、もう一度右を見た。誰もいない、よし、誰もいない。

そうやって自分が今一人であることを十分確かめた上で、浴槽の淵にとろんと寄りかかると、

「でへへへ、余は満足じゃ」

響子は緩んだ頬をそのままに、満面の笑みでそう言ってみた。

何のことは無い、この一言が言いたかっただけなのだ。

ただ周りに誰かいたら恥ずかしいから辞めようと思ったのだが、誰もいなかったので決行した。

するとその時、浴室の戸がガラツと開き、

「そうですか。満足していただけたのなら私たちも嬉しいですよ」

と言いながら入ってきた者がいた。

響子がガバツと顔を上げて見てみると、寄りにもよって星であった。

（見、見られた！？）

羞恥心から顔が真っ赤に染まった響子、あまりの出来事にひっくり返りそうになったが、

「調子に乗ってすみませんでございござい」

正座に直って45度きつちり頭を下げた。

だがここは浴槽、そんなに頭を下げたら着水するに決まっている。そんなわけで、せっかく述べた謝罪文は途中から文字通り水泡に帰してしまった。

「いえいえ、別に良いですよ。私もそういう気持ちはよく分かりますしね」

そう笑いながら言うと、星は体を洗い始めた。

その間、ずっと流れる沈黙が響子にとっては酷く気まずいものにした。

無論、星は機嫌を悪くしているわけではなく、単に石鹸の泡が口に入るのが嫌なので話さないだけなのだが、そうなると響子も話しにくい。

何せ響子は新人、星は立場的に寺の中でも相当上の方に位置している。

そのプレッシャーは、やっぱり大きかった。

結局、響子は星が髪を洗い終わるまで何もできずにただ硬直していた。

そして、ようやく（実際はそんなに時間はかかっていないのだが、響子の体感時間的には）ようやく”髪を洗い終わった星が、

「お隣、良いですか？」

「は、はい！」

浴槽に、それも響子の隣あたりに入ってきた。

白蓮の時もそうだったが、偉い人が隣にやってくるというだけで響子はプレッシャーに負けそうになる。

もう今日だけで何度経験したかも覚えていない。

それに加えて、星は偉いだけにあらず、毘沙門天代理でもあれば虎妖怪でもある。

響子にとっては、これらのどの側面から見ても怖いように見えた。

「あの、そんな肩に力を入れなくても大丈夫ですよ？ 別に獲って食べたりなんかしませんから」

星はそう言うのと苦笑してみせた。

そうは言われても、急に態度を変えることなどできるはずもない響子。

とりあえず何か返事はできないかと頭を必死に回して、そうだ、と思い出した。

「あ、あの、お昼はどうもありがとうございました！」

少々苦しいところではあったが、ぬえに被せられた桶をとってもらった昼間の出来事をとっさに話題に出した。

こうして考えてみると、どうもサプライズ登場が多い気がするの
は気のせいだろうか。

「礼には及びませんよ。誰かのお役に立てたというだけでも、私は十分嬉しいですからね」

星はにこやかに答え、そして言葉を続けた。

「そう言えば、私こそ礼を言わねばなりませんね。今日一日、うちのお手伝いをしていただいたようですから」

「あ、ありがとうございます」

唐突とは言え、褒められて嬉しくないはずがない。
響子は頬を緩ませて礼を言った。

「ところで、せっかくなので聞いてみたいのですが、寺の生活はどうでした？」

「はい、みんな優しい人ばかりでとても楽しかったです」

今日出会ったばかりだというのに優しく接してくれた白蓮や一輪や水蜜らのことを思い出しながら、響子はそう答えた。
勿論、心の底からそう答えたつもりだったのだが、

「……本当に？」

星が響子の顔を覗き込むようにしてそう聞き返してきたので、少々ドキッとした。

別に嘘をついたつもりはないが、逆にそう聞き返されると困ってしまう。

「は、はい」

「そうですか、それならよかったです。すみませんね、困るような質問をしてしまって」

自分の質問が意図せず響子を戸惑わせてしまったことをすぐ悟った星は、申し訳なさそうに言いながら苦笑を浮かべた。

「いや、実はお夕飯の時にナズーリンが貴方に対して少々不躾なことを言っていたように思えましてね。傷ついてはいないかと心配だったのですよ」

「あ、いえ、別に大丈夫です」

「なら良いのですが」

そうは言った響子ではあったが、実際の所は単に忘れていただけであった。

思い出せば確かに、カチンと来る言葉を何回か吐かれている気がする。

先ほどの小傘襲撃時も助けてくれたのかと思いきや、最後の最後でやっぱりトゲのある言葉を残していった。

そうやって回想にふけるうちに、響子はもう1つ思い出した。

あの高圧的で毒舌家なナズーリンが、ただ1人従順に頭を下げた人物。

それこそ今目前にいる星であった。

気づいてしまえばますます不思議に思えてきて、響子はそのことについて知りたくて仕方がなかった。

「あの、星様とナズーリンはどのような関係なのですか？」

そう尋ねると、星は少しばかり考え込んでしまった。

こんなことを聞かれるとは全くもって予想外だったのである。

十数秒ほど腕を組んで思案に暮れていた星であったが、ようやく良い答えが見つかったのか響子の方に向き直った。

「そうですね。ナズーリンは自分を、私の一番部下と思っているようです。しかし私から見れば、ナズーリンはかけがえのないパートナーと言ったところでしょうか。

ですので、できれば私は立場の上下など関係なしで一緒にいたいのですが、ナズーリンがどうしてもそれだけは許してくれないのです。難しいですね」

そう言って星が浮かべた困ったような苦笑は、今までの苦笑いとは何かが違うようであったと、そんな風に響子には思えた。

「それに、正直なところ私はナズーリンが羨ましいです。確かにあの子は口が悪いですが、それ故の卑近さを持ち合わせています。事実、今貴方が最も敷居の差を感じずに話せる相手もあの子ではないでしょうか」

そう言われると、確かにそのような気がしてきた。

小傘に驚かされたとき、もしあの廊下の先にいたのがナズーリン以外だったら、無理に現場まで連れて行っただろうか。

そう考え直すと、響子は星の言うことも尤もであると思った。

「私の場合だと、どうしても初めて会う人には怖がられてしまうことがよくあるのですよね。」

その点、すぐ誰とでもなじめるナズーリンを見習ってみたいとも思うのですが、これもやはりあの子からすれば好ましくないようで、『ご主人様は毘沙門天様の代理なんだから、もっと威厳を持って格式高く、少し高圧的に周りと接するくらいでちょうど良いんだ!』と怒られてしまいます」

でも、ナズーリンは少々気難しいし口が悪いところもありますが、根は良い人なのです。気に障ることもあるでしょうが、どうか少し多めに見てあげてください」

星にそう言われては、響子もそれを受け入れざるを得なかった。

別段、依頼者である星が偉い人だからとか毘沙門天代理だからとか、そんな理由ではなく、ただ単に今の話を聞いていただけでも十分に受け入れる気になった。

その反面、響子はナズーリンが羨ましかった。

星はその卑近さが羨ましいと言ったが、響子からすれば星にここまで大切に思われていることが羨ましかった。

家族でもなければ同族でもない、にも拘わらずここまで誰かに大

切に思ってくれる人というのを、未だかつて響子は見たことがなかったのだ。

そもそもこれまでは同族（つまり山彦）以外とコンタクトを取る機会があまり多くなかったので、当然と言えば当然ではあるが。

「さてと、あまり長湯しすぎると待っている人に悪いですし、そろそろあがりますか」

「あ、はい」

そうして、2人は風呂から出た。

更衣室に戻って、濡れた体を拭いた響子であったが、ここで大切なことに気づいた。

（寝巻き、どうしよう）

借りたセーラー服のままで寝るというのも何だか変な話であるが、泊まることなど想定していなかったので寝巻きの用意しているはずもない。

とりあえず湯冷めはしないように下着だけ元のを着たが、それにしてもこの服は寝巻きにもなるのか、とセーラー服とにらめっこ。

一方、星はもう自分の寝巻きに替えてしまったが、そんな響子の様子に気がついた。

「もしかして、寝巻きですか？」

「え、あ、はい、そうなんです。用意してなかったんですけど……」

「うーん、村紗には申し訳ないけどその服は寝巻き代わりにはなりそうもないわね」

星もそう言いながらそのセーラー服を見つめた。

だが、いくら見つめられてもセーラー服が寝巻きに変化するわけ

もない。

どうしたものかと2人で考えていると、更衣室の入り口の方の戸がガラツと開き、ナズーリンが入ってきた。

「なんだ、今あがつた所だったのですね。いや、ご主人様の帰りが遅いものだから、何かあったのかと思いましたがね」

「ナズーリン、いいところに来てくれましたね。実は貴方に1つ頼みたいのですが……」

星がそう言いかけると、急にナズーリンの顔色が曇った。それから、その曇った顔で響子の方を一瞥すると

「ご主人様、まさかこいつのために寝巻きを取ってこいというんじやありませんよね？」

と、例の冷笑を浮かべて星の言葉をさえぎるようにして言いのけた。

勿論、”こいつ”とは響子のことである。

「嫌ですよ。そりゃ、ご主人様が自分の寝巻きを忘れたと言つのであれば私も快く取ってまいりましょう。」

しかし、私はご主人様の部下なのであり、その三下の部下ではないのです。よって、今回ばかりはしっかり嫌だと言っても何ら罰は当たりますまい。嫌です」

「はて、困りましたね」

星はわざと大げさに腕を組んで見せ、

「では仕方がない。私が今着ている寝巻きは、実は響子に貸すために持ってきたということにしましょう。」

それでナズーリン、実はすっかりして私自身の寝巻きを持つてくるのを忘れてしまいました。申し訳ないのですが、取ってきてもらえませんか？」

これにはナズーリンも思わず

「なっ」

と声が漏れたきりで固まってしまった。

顔を高潮させながら、唇を噛んで響子をキツと睨んだかと思うと、踵を返して即座に更衣室から出ていった。

それからほとんど間髪いれず戻ってきたナズーリンの手には、ちょうど響子が着るのに良い大きさの寝巻きが抱えられていた。

そして、ナズーリンは何も言わずそれを響子に押し付けたのであった。

「あ、ありがとう」

あまりにぶっきらぼうであつたとは言え、寝巻きを取ってきてくれた事には変わりはない。

なので響子は礼を言つたが

「”ありがとう”だつて？ 君は恐れ多くもご主人様の話を聞いていなかったようだね。

いいかい、君に寝巻きを貸したのはご主人様であり私じゃない。私は自分の寝巻きを貸してしまったご主人様のために新しい寝巻きを持ってきただけだ。

ただ本当にそうするとサイズの問題とかあるだろうから、こうして君の体格に合う寝巻きを持ってきただけだ。

よって、君が今こうして寝巻きを手に入れられたのも名義的には

ご主人様のおかげなのだから、礼を言うつしたら私じゃなくご主人様に言うべきなんだよ、全くもう！」

そうまくしたてるように喋ったかと、ぴしゃりと更衣室の戸を閉めて出て行ってしまった。

「だから、貴方が持つてきてあげたのですから、貴方が感謝されれば良いじゃないですか」

閉まった戸に対して、星はそう呟いた。

一方、あまりに急な展開で寝巻きをゲットした響子ではあるが、どうして良いのか分からずおろおろしていた。

「あ、あの、これ着ても良いのでしょうか」

「ええ、せっかく持つてきてくれたのですから着てあげると良いでしょう。別に気に病む必要はないですよ」

「は……はい、分かりました」

そう言つて貰えたら大丈夫だろう、と響子はその寝巻きを着はじめた。

「ナズーリンのことは私がなだめておきます、貴方は今晚はゆっくりお休みなさい。」

そうそう、今日お風呂で話したことはナズーリンには内緒ですよ。これ以上機嫌を悪くされて、家出されても困りますからね」

星はそう言いながら、更衣室を出て行つた。

毘沙門天の代理というのも大変なんだなあ、と思いながら響子は寝巻きの帯を結ぶのであった。

九話目：響子ちゃんお風呂に入る（後書き）

「ナズーリン、あまり自棄食いすると太りますよ？」

「放っておいてください！ 今の私を癒せるのは動物性たんぱく質だけなんです！」

はい、どうも。動物性たんぱく質豊富な、作者の兔です。

今回は偉く難産な話となりました。寅さん難しいです。

大きなお風呂というのは何も包み隠さず話せる最高のコミュニケーションの場だってどこかで聞いたことがあります。

そんなわけで今までで最も出番の少なかった星と一緒に響子ちゃんをお風呂に入れてみました。

あとボクにエロを求めるのは間違いです。これだけは言える。

今度こそプロローグも終わりに近いのかもしれませんが。

最後を飾るは誰でしょうか。

それは次で明らかにしたいと思います。

たぶん。

十話目：響子ちゃんおやすみなさい（前書き）

前回のあらすじ

お寺にお泊りすることになった響子ちゃん。（八話目参照）
お風呂にも入ったし、ナズ君をお冠にさせながらも寝巻をゲット（
九話目参照）。
あとは寝るだけです。

十話目：響子ちゃんおやすみなさい

ナズーリンが未だお冠でいる一方で、とりあえずお風呂は頂いた響子。

さて、問題は寝る所である。

ここは自分の家ではないので、当然自分の寝室などあるはずがない。

どこで寝れば良いのだろうかと廊下の真ん中で困っていると

「おっと、響子？ どうしたの、その寝巻」

そこにたまたま通りかかったのは水蜜であつた。

響子がバツチリ寝巻を着こんで『今から寝ます』雰囲気を漂わせているのに対し、水蜜はいつものセーラー服で背中には錨。

それどころか手には柄杓に釣り竿に網に提灯に魚籠と、何かいつもより装備が増えている。

先に質問したのは水蜜の方だが、むしろ『どうしたの、その格好』と聞きたいのは響子の方であつた。

「ナズ、じゃなかった、星様に貸してもらいました」

「……うん、ナズーリンに貸してもらったのね」

「でもナズーリンは全部星様のおかげだと思えって」

「ナズーリンなら言いかねないわ」

こんなこと水蜜にとっては日常茶飯事である。

ナズーリンはやたらと（時には本人の意向を無視してまで）星を持ちあげたがるのだ。

初対面なら誰でも戸惑うと思うが、慣れてしまえば可愛い光景に過ぎない。

「と言うか、あの、船長さん。その格好はいつたい？」

響子は水蜜の持つ釣り竿とか魚籠とかを指差しながら尋ねた。
すると水蜜は誇らしげな笑みを浮かべた。

「決まってるじゃない、夜釣りよ、夜釣り」

「こんな夜中に釣りに行くんですか？」

「釣りの真骨頂は夜釣りにあり、って言うてね。響子も一緒に行かない？」

「いえ、私は眠いのでいいでふ、ふああああ」

タイミングを見計らったようにでる欠伸。

響子は本当に眠くて寝たくてどうしようもなかったが、水蜜はと言うとむしろ目は冴えわたっていた。

何せ船幽霊は夜行性妖怪である。むしろ水蜜が眠くなるのは太陽の日差しが降り注ぐ昼間なのだ。

一重に妖怪と言えど、このように生活パターンがバラバラに分かれることは決して珍しいことではない。

「それにしても、お寺の方も釣りに行く事があるんですね。ちょっと驚きました」

響子がそう言うと、水蜜は否定するように指を振ると

「甘いわよ、響子。仏道に仕えるのだけが”あま（尼）”じゃない、海の女と書いても海女^{あま}って読むんだから！」

ビシッと響子の方に指を向けながら答えた。

もし一輪がこの場にいたら『貴方は何を言っているの？』と一蹴

されるところだが、

（な、なんかよく分からないけど格好いい……！）

無知な響子からすれば憧れ補正でこう見えた。

「しかも私はただの海女じゃないわよ。死後は言うまでもなく、生前だって海に潜り続けてきた、この私にロックオンされた魚介類で魚籠に入らなかった奴はいないわ」

村紗水蜜、享年16歳。

生まれも育ちも死に場所すらも海の女である。

実は死後の大半を過ごした地底に海などあるはずもなかったのだが、それはご愛敬ということ。

地底を脱出した今でも山村在住におさまっているが、それもご愛敬ということ。

何はともあれ、この格好つけた船長アピールが響子の目に格好よく映らなかったわけもなく、

「よく分からないけど船長さんって凄いんですね！ 釣り、頑張ってください！」

響子は目を輝かせて言った。

実際何がどう凄いのかは響子もよく分かっていなかったが、凄そうに見えれば格好いいのである。

一方、格好いいと言われてやる気が上がってきた水蜜も

「よっし、今日は響子のためにでかい奴とってくるわよ！ まあ、枕を高くして待ってなさい」

「はい、おやすみなさい」

「いや私は寝ないんだけど、まあ、おやすみ」

帽子をかぶり直すと、張り切って玄関に向かっていった。いつかは自分もあんな格好よくなれるのかなあ、と響子は水蜜が行ってしまうのを見守っていた。

そうして水蜜が去ってからしばらくして、鯛でも釣るのかなあ、鯉でも釣るのかなあ、なんてばわ想像していたところで

「はっ、違う違う、寝るところどうしよう!」

ようやく元の本題に戻った。

だがこればかりは一人で考えてもどうしようもない。

白蓮や星に聞くにしては不釣り合いな問題であるし、水蜜はたった今釣りに行ってしまった。

今ナズーリンに会ったら何を言われるか分かったものではない。ぬえに至っては論外中の論外である。

とどのつまり、消去法により

「……一輪さんに聞こう」

響子はそう判断せざるをえなかった。

そこから響子が一輪に会うのに、さほど手間はかからなかった。とりあえず居間にいるかなと思って向かったその途中で、ばったり遭遇したからである。

一輪は、響子の格好を見るや否や、すぐに

「あー、ナズーリンがご立腹だったのはこういうわけね」

と、すぐさま事の経緯を見抜いた。

「え？」

「その寝巻、ナズーリンのでしょ？ 大きさを見れば分かるわよ。で、さしずめ星さんに上手く丸めこまれて、不本意ながら貴方に貸してあげたのね」

「おお、凄い、大体あつてます」

「ぬえと違つて三手先まで読みやすいのよね、ナズーリンって」

実を言うと、ナズーリンを飼いならしているのは星だけではない。一輪もまた、時には食べ物を餌に、時には星からの指令という形式をとるなど、機転と知略を用いてナズーリンをよくこき使う。

このような理由で、一輪もナズーリンの行動パターンは（星ほどではないにしろ）ある程度はつかんでいる。

それにしても雲山、水蜜、ナズーリンなど多くの者をほぼ自在に使役する一輪のその様は、まさに中間管理職の鑑とも言えよう。

この使役者リストに響子が加わる日もきっと遠くない（響子のこゝとだから喜んで加わりそうだが）。

「兎に角、貴方に寝巻を渡すのを忘れたからどうしたかと思つて様子を見に行こうとしていたんだけど、取り越し苦労だったみたいね。ならいいわ」

「あ、そうだ。一輪さん、私、どこで寝れば良いんでしょう」

「うーん……とりあえず応接室の机をどけて布団をしけば使えそうよね」

応接室と言えば、今朝ほど響子が初めて通された部屋である。確かに机以外何もない殺風景な部屋ではあつた記憶がある。

「じゃあ、とりあえずそこで待つててちょうだい。お風呂はいったら布団しきに行くから」

「大丈夫です、私の寢床ですから私がやります」

「あら、じゃあ頼むわよ。布団とかは全部、隣の部屋の押し入れの中に入っているから」

「分かりました、おやすみなさい」

「うん、おやすみ」

そう言つと一輪は行つてしまった。

応接室の場所は既に分かっているので問題ない。

響子も、眠い目をこすりながらとぼとぼと廊下を歩きはじめた。

だがこの時、この2人のやりとりを影でのぞき見していた者がいたことに、とうとう響子も一輪も気づけなかった。

「……よし、応接室ね」

”彼女”はにやりと笑つと、響子とは別ルートで応接室に向かつて飛び立った。

響子の歩く速さからすれば、飛んでいる”彼女”の方が早く着くことは自明であった。

「応接室、応接室つと……ふああ」

そう呟きながら応接室を目指す響子の口から、かみ殺す間もなく欠伸が漏れた。

何度も言つようだが、響子は早寝早起きがモットーであるが故に、今とても眠いのである。

「うつん、ねみゆい……ん？」

廊下の突き当たりを曲がって縁側に出た響子は、そこでふと立ち止まった。

その先、大体応接室の辺りの縁側に、誰かが座っているのを見つけたのである。

それもちょうど、響子が昼間に白蓮と話をしたあの場所。そして、今座っているのも

「聖様？」

「あら、響子」

やはり白蓮であった。

その場所に白蓮が座っているのを見ただけで、別に呼ばれたわけでもないのに、響子は無意識的に隣に座ろうとしてしまった。

そしてハッと居直り

「隣、座ってもいいですか？」

と、わざわざ几帳面に聞きなおしたのであった。

「ええ、どうぞ」

「ありがとうございます」

お礼まで律儀にこなしてから、響子は白蓮の隣に腰かけた。

昼も思ったことだが、不思議と彼女の隣にいるというのはとても落ち着けるように響子には思えた。

「聖様、ここで何をなさっていたんですか？」

「ちよっと遅めの夕涼みってところかしらね。実はここに座ってみる景色が一番好きなのよ」

「ふーん……ふああ」

ちょうどここからは、寺の庭がよく見えた。

若葉の芽を吹いた桜の木や既に青々とした紅葉の木が並び、端には昼間響子が落とされそうになった池も見えた。

なのに、ちょうど昼間にぬえや水蜜や一輪がどんちゃか騒ぎを繰り広げた場所とは思えないほど静かで、明暗の違いも相まって全く別の場所と思えるから不思議である。

ちなみに、響子としては正面の参道の方が好きだった。

自分が通い慣れた道というのもあったし、やっぱりそちらの方が『いかにもお寺』という感じがしたので、偉く気にいつていた。

だが白蓮にそう言われると、なるほどこちらもありものかもしれないと、早くも感化されはじめていた。

「あら、眠かったの？ ごめんなさいね、呼びとめちゃって」

「いいんです、私が自分で止まったんですから」

そう言いながら、響子は目をこすった。

確かに白蓮の隣というのは居心地の良い場所であったが、言いかければ眠い時に座ると更に眠くなる場所でもあった。

「今日一日お疲れさま。初めてのお務め、どうだった？」

「とても楽しかったです。ちょっと怖かった時もあったけど」

「怖かった時？」

「……ぬえさんとかナズーリンとか」

響子がそう答えると、白蓮はクスツと笑った。

「分からないでもないわ、それ。でも、2人とも悪い人じゃないのよ。やんちゃだったり口達者だったりするのも可愛げのうち。きつ

と貴方もすぐ慣れるわ」

「そうだといいんですけど、でもやっぱりまだ苦手です」

そう言つて響子は苦い顔をした。

ナズーリンからは寝巻を貸してもらつていたので悪く言うのは気がひけるが、ぬえから受けた悪行の数々はまだ忘れられそうもない。

「大丈夫、もし何かあつたら誰かに言うといいわ」

「はい、分かりました」

そう答えた響子であつたが、ついに溜まりに溜まつていた睡魔の堰が崩れた。

くつつきそうになる瞼を頑張つて開けながらも、ぽてつと、響子は白蓮にもたれかかった。

そんな響子に対し、白蓮は響子の頭を優しく撫でながら、そつと囁いた。

「おやすみ」

「はい、おやすみなさい。明日も頑張りました……」

ほとんど無意識で呟いたその台詞を最後に、響子は深いまどろみの中に落ちていった。

くうくうと、その大きな声からは想像もできないような静かな寝息を立てる響子の頭を、白蓮はただしばらく、優しく撫で続けた。

「自分でやるって言つてたけど、ちゃんとできたのかしら」

お風呂からあがった一輪は、きちんと身支度を整えると真つ先に応接室に向かった。

響子自身の生活能力を疑問視しているわけではなく、むしろぬえや小傘など響子に悪戯をしかけてくる者が現れるのではないかと、そちらを危惧していた。

そして応接室前の廊下の突き当たりを曲がると、すぐに白蓮の姿が目に入った。

「あ、姐さん」

「しっ、しっずかに」

白蓮は小声でそう言いながら、人差し指を立てて見せた。

それから、その指で静かに響子の方を指差した。

響子は白蓮の膝を枕に、すやすやと眠っていた。

「……こんな具合で、動くに動けなくなっちゃったのよね。風邪ひかせる悪いから、ちよつとそこから毛布か何か持ってきてちょうだい」

「分かりました」

困ったように微笑んだ白蓮の頼みを、一輪は和やかに笑いながら二つ返事で了承した。

実に可愛らしい寝顔を見て微笑ましかったのと、自分の心配が取り越し苦勞であつたのと、混ざった笑みであつた。

それから、一輪は持ってきた薄い布団を響子にかけてあげた。

「姐さんはどうされます？」

「頃合を見てなんとかするわ。後はもう大丈夫よ」

白蓮がそう言うと同時に、響子がぴくりと身を縮こまらせた。起きてしまうのではないかと2人は冷水を浴びせられたような思いをしたが、幸い、響子起きる気配はない。

「……これじゃあ、朝まで動けないかもしれないわね」

そう言いながらも、白蓮の表情は優しいものであった。

「むにゃんにゃ……はらそーぎゃーてー……」

寝言でまで般若心経を唱えた響子を見て、2人は顔を見合わせる
とクスツと笑った。

「この熱心さは、私達も見習うべきかしらね」

「村紗やぬえに、響子の爪の垢を煎じて飲ませたいくらいですよ」

そんな風に静かに盛り上がる一輪と白蓮であった。

だがその様子を、先ほど風呂前で一輪と響子の話を立ち聞きしていた”彼女”は死角から眺めていた。

「ちっ、好き勝手言いやがって」

その正体は、紛れもなく、ぬえであった。

どうしようもない腹立たしさでその手に握られた油性ペンを強く握った。

1人で寝静まった響子の顔に落書きしてやる計画が、白蓮によってふいになってしまったのがどうしようもなく悔しいのであった。

「ちえっ、また小傘いじめてくるか、それとも村紗の邪魔してやる
うか」

そう呟いて、宛てもなく夜空に飛び立ったのであった。

十話目：響子ちゃんおやすみなさい（後書き）

翌朝

響子「おはようございます。大きい魚、釣れました？」

村紗「……通り魔に突き落とされた」

はい、どうも。神霊廟をやってしまった、作者の兎です。

今後当分、少なくとも委託まではネタばれ内容は含みませんのでご安心を。

そんなわけでようやくプロローグもおしまいです。

やっぱり題名が題名ですもの、はらそーぎゃーてーで締めたかったのですよ。

そしてやっぱり最後は白蓮さんでしめたかったのですよ。

こういったわけで、こんなラストになりました。

膝枕は背中合わせと共に2大ロマンとして挙げられる素晴らしい物だと思っています。

良いよね！ 膝枕良いよね！ ふう。

プロローグも終わり。

次からは命蓮寺の住民以外も出てくるようになると思います。

さて誰からだそう（実は決めている

兎に角、できる限りがんばります。

たぶん。

十一話目：小傘ちゃんはふかふか耳が好き

響子がお寺に来てから数日経った。

お務めも少しずつ板についてきた響子であつたが、そんな彼女は今は庭の掃除をしていた。

「ぜーむーとーどーしゅー、のーじょーいつさいくー」

お経の空読みは未だ健在である。

少しは寺の修行にも参加することができたが、写経は兎も角、座禅はまだまだ得意になれそうもない。

仏道マスターへの道は先が長いのである。

「……ふい。大体一通りは終わつたかしら」

響子は額に浮かんだ汗をぬぐつて、綺麗になつた庭を見渡した。

今日も限りなく青空が広がる良い天気である。

ちりとりを集めたごみを捨て、そのちりとりも箒と一緒に片づけて、響子はお堂に戻った。

「あー、お務めを終えた後の達成感ほどすがすがしいものはないわ」

両手を挙げて伸びをした響子。

さて次は何をしようか、とぼんやり考えながら廊下を歩いていると

「しつこいって言ってるだろうツ、いい加減にしてくれよ！」

「ぎゃふん！」

と、言い争う声がしたかと思えば、居間から小傘が転がり出てき

て、床に這いつくばって沈黙した。

響子にとっては前も確か人を驚かせるような登場をした”変な生き物”だが、今回はどうも確信犯ではないようである。

「ちえっ、なんだいなんだい、ナズっちのけちんぼ。少しくらいいいじゃない、減るものじゃあるまいし」

うつぶせに倒れたまま、小傘は顔もあげずぶつぶつ呟いた。

そんな小傘に恐る恐る近づく響子。初めて会った日のトラウマがまだ残っているのである。

「あー」

響子が語りかけると、小傘はのっそり顔をあげた。

「ん、確か貴方はこの前の……」

そう言つと、青い方の目を閉じ、両手を前に突きだして

「うらめしやー」

と低音域を効かせて唱えてみせたが、響子からすればこれは怖いというよりはリアクションに困るというものであった。

「……え、ダメ？」

「な、な、何が？」

素の態度に戻った小傘に、響子はきょとんとしながら答えた。

「怖くない？」

「いや、全然」

アドリブには滅法弱い小傘であつた。

最近では事前に念入りの準備を行つても驚いてくれない人間が増えていくというのに、準備なしで誰が驚いてくれようか。

そんなわけで、響子の平然とした反応を見た小傘は再び床に突つ伏した。

「な、なんてさもし世の中なんだ。私がこんなにひもじい思いをしているというのに、よつてたかつてこの仕打ちはいくらなんでも酷過ぎる……」

そんな小傘を見て、悪い事しちゃったかな、と響子は内心思った。人間に存在意義を否定され始めたという意味でも、今の世がさもしいというのは響子とてよく分かる。

「あー」

響子は小傘の頭を突つつきながら語りかけた。

小傘は半ばそをかきながら、やっぱりのそりと頭をあげた。

「私達山彦も最近ひもじい思いをしているのは一緒だからさ、よかったら一緒に頑張ろうよ。ね？」

響子がそう言うと、小傘は正座に居直ると響子の手をがっちりつかんだ。

「地獄で仏を見た！」

「あ、ありがとう。だから、脅かしつことかそういうのは無しの方
向でお願いします」

「大丈夫、これからは全力投球で驚かせてあげるから！ 期待して待ってて！」

「そついうのは無しの方向でお願いします」

そのオーバーな反応に少々響子は戸惑ったが、膝を交えて話してみれば根っからの悪人というわけでもなさそうである。

むしろ背負っている物の類似性故に、良い友だちになれそうだと思った。オーバーなところは否めないが。

「……それにしても、私も山彦って初めて見たわ。山に向かって何か叫ぶと返してくれるのは知ってたけど」

小傘が態度を改めて響子を見つめたものだから、響子は少しばかり恥ずかしかった。

「本当は山奥でひっそり住む種族だからね。私もお寺に来る前は山を降りた事もなかったし」

「ふーん。じゃあ、今度山に行ったとき『やつほー』って言ったら返してくれる？」

「あ、そついうのは24時間365日、盆も正月も関係なく、うるう年の2月29日も含めて大歓迎よ。山彦一同お待ちしてるわ」

「じゃあ、今度山に行ったとき『うらめしやー』って言ったら驚いてくれる？」

「う、うーん、要相談ということだ」

結局そこに行きつくんだ、と響子は苦笑せざるを得なかった。

そこら辺は種族の違いによって生まれる価値感の違いとして割り切るべきなのかもしれない。

「ちえっ、世の中甘くはないか……、そつ言えば、貴方もなかなか

珍しい耳してるのね」

小傘にそう言われ、響子は自分の耳に手をやった。

「え、これ？　そうかなあ。貴方の色違いの目の方が珍しいと思うけど」

「だってほら、私は唐傘お化けだし。それより、ね、ちょっと触ってもいい？」

「別にかまわないけど、あまり乱暴なことはしないでね」

齧られたり引つ張られたりするのとは勘弁願いたいところである。そんな響子の意思が通じたのかどうかは兎も角、小傘はそっとその手を響子の耳に伸ばした。

「あ、思ったより柔らかい。そして貴方もふかふかなのね。いいなあ、こういう耳に憧れるわ」

「なんかくすぐったくなってきた」

「ああ、もう、食べちゃいたい」

「食べちゃ駄目だよ、いや本当に駄目だからね！」

「本当にもう、このふかふか感が……、あ、そうだった、思いだした」

そして再度小傘は居直った。

「実はさ、ほら、あれ」

小傘が指さす方を見ると、居間の端でナースーリンが昼寝をしているところであった。

向こうをむいて寝ているため表情はうかがいしれないが、ただ座布団を枕にして睡眠中のようなのである。

元から夜行性の傾向が強いナズーリンは、寝るとしたら夜より昼を選ぶ方が多いので、昼寝自体は（新入りの響子は兎も角、ある程度長くいる者からすれば）よく見られる光景である。

「ナズつちも尻尾とか耳とかいじり甲斐のあるところがたくさんあるんだけどさ、一向に弄らせてくれないのよね。減るもんじゃないのに。けちんぼ」

そう言つて小傘は拗ねたような表情を見せた。

確かに、響子とてナズーリンのそうしたところに全く目がいかなかったわけではない。

何せまず、あの大きな耳であり、そして籠を吊るすほど器用な尻尾である。

（言われてみれば、ちょっと興味あるかも）

そうは思ったものの、これは中々難しい問題である。

何せあのナズーリンの性格を考えれば、まあ気易くOKがでることはないと言いきつて良いだろう。

「まあ、気持ちは分かるけど……」

とは言え、この時の響子は小傘に感化された部分が強かった。

どうしてもあの丸々とした耳を突いてみたい衝動に駆られていたのであった。

そこでどうしようと迷った挙句、まずは様子を見るべく、抜き足差し足で近づいてみた。

そして、廊下側からでは見えなかった表情、つまりどのくらいナズーリンが熟睡しているのかを確かめるべく、彼女の正面に回ろうとした時、

「……何か用かい？」

ナズーリンの目が開いた。

血走ったその目は、かなりイライラが溜まっている証拠でもあった。

この時、響子は思いだした。小傘は自分が来る前に既にナズーリンに手出しをしていたのだ。

それからまだたいした時間が経っていないとすれば、まだ苛立ちが引いていないのも無理はない話である。

余計なことでナズーリンの苛立ちの的になるのは、響子としても避けたかった。

「いえ、別に」

「なら放っておいてくれないかな。君は毎晩寝ているから清々しいだろうが、私にとってこれは4日ぶりの休眠なんだよ」

「ご、ごめん」

その声色からして、ナズーリンの苛立ちは相当なものであった。

キツといつも以上にきつい目で睨まれては、響子も退散の一択以外選択肢はなかった。

足音を立てないように響子が引き返そうと後ろを振り向いたその時、信じられない光景が彼女の目に飛び込んできた。

小傘が、助走をつけるべく十分な距離をとって、軽いストレッチ体操をしているのだ。

これは、ヤバい匂いがする。響子は直感でそう察した。

（そ、それも無しの方で！）

ジェスチャーで伝えようと身ぶり手ぶりを駆使した響子であった

が、小傘はそれに気づき

（今度こそ仕留めてやんよ、任せとけて）

と親指を立てて爽やかな笑顔を浮かべた。

響子は頭を抱えた。

その直後、小傘は助走をつけたかと思うと、バツと飛びあがり

「驚き桃の木三度目の正直、青天の霹靂パラソルトルネードアタック！」

と、錐揉み回転でナズーリンに飛びかかった。

もう悪い予感しかしなかった響子は、目を瞑って耳を塞ぎ、巻き添えを喰わないように部屋の隅避に難しつつ震えていた。

ドタバタと伝わってくる振動だけでも、今何が起きているか響子が察するには十分であった。

やがて、その振動もなくなった。

恐る恐る響子が目を開けてみると、棚は倒れ、畳はめくれ、机はひっくり返っていたという具合に酷いものであった。

その中心で、ナズーリンは先ほどと同じように座布団を枕にすやすやと寝ていた。

小傘はどこに行ったのかと響子が部屋中を眺めると、居間と面している庭の塀に小傘の形をした穴が開いていた。

「……南無阿弥陀仏」

響子は静かに冥福を祈った。

十一話目：小傘ちゃんはふかふか耳がお好き（後書き）

無茶しやがって

はい、どうも。昼寝大好き、作者の兎です。

本当は昨日のうちに更新するつもりが昼寝してしまって今日にもつれこみました。

ふかふかの布団も好きですが、ふかふかの耳も好きです。

祖母の家で飼っている猫の耳や尻尾など、たまに触りたくなります。

……話がそれました、どうでも良いですね。

まあ、小傘も妖怪、頑丈にできているので案外ひよっこり帰ってくるでしょう。

問題はむしろ、ここまで荒れてしまった居間の方ですね。

これ、誰が直すのでしょうか。

喧嘩両成敗、ナズ君と小傘ちゃんでしょうかね。

もっとも、それまでに小傘が帰ってくればの話ですが。

なんだかんだ言ってナズになついている小傘と、たまに切実に困るナズはボクの理想形の1つです。

小傘の素の人格は人懐っこいイメージが結構強いかも。（怪談モード除く）

しばらくこんな感じでショート話を書いていけたらと思っています。
たぶん。

十二話目：白蓮様の納涼大作戦

「あちゅい」

命蓮寺、未の刻（午後2時くらい）。

さんさんと照りつける夏の日差しを受け、外は高温多湿の過ごしにくい空気が流れていた。

おまけに風は一向に吹く気配もなく、せつかく軒下に吊るした風鈴もチンともリンとも鳴きやしない。

こんな暑い日は、流石の響子もやる気半減。
いつもなら自分から進んで掃除に向かうところも、今日はすっかり居間でダウンである。

そして、その隣には

「あちゅい」

もうほとんどその台詞しか言わなくなった小傘が微動だにせず畳に突っ伏していた。

「あちゅい」

オウム返しは山彦の癖の1つであるが、こつも同じことばかり言われてはどちらが山彦か少々あやふやになってしまう。

「ねえ、小傘？」

「……なに？」

「そろそろ、その”あちゅい”は辞めにしない？　なんか、言われる度に暑くなってくる気がするわ」

「だって暑いんだもの」

「そりゃあ、私だって暑いよ」

「じゃあいいじゃん……それにしても……あちゅい」

暖簾に腕押し、ぬかに釘。

まるで態度を改める気配の無い小傘に、響子は早々に説得を諦めた。

何をするにも頑張れないほど暑いのだ、仕方ない。

そんな具合で響子がため息をついた時、小傘はようやく立ち上がり、そして生気を感じられない足取りで縁側まで出ていった。

はたして何のつもりだろう、と響子が見ていると、小傘は大きく息を吸い込み

「暑いって言ってるじゃない、太陽の馬鹿ーッ」

と、声高々に叫んだ。

これには響子も反射的に反応してしまう。

いくらやる気がなくても、山彦としての血が、本能が、声をあげると言っているのだ。考えるより先に体が動いてしまう。

響子は縁側まで駆け出ると、小傘の隣に立って大きく息を吸い込み

『暑いって言ってるじゃない、太陽の馬鹿ーッ』

勿論声色もきちんと真似て、しつかり山彦としての使命を遂行したのであった。

だが声の爆心地とでも言うべき地点のすぐ隣に立っていて、しかも大音量に耐性のない小傘からすればたまったものではない。

あまりにも大きな音に驚いてひっくり返り、そのまま沈黙した。

その場にはただ、妙な達成感に包まれた響子が幸せそうな笑みを浮かべて立っていたのであった。

そして、その声を聞きつけて

「貴方は相変わらず元気ねえ」

一輪がやってきた。

今、響子が大声をあげた割に一輪が平然としているのは、もうすっかり慣れてしまったからである。

もう響子が来てから日が経った命蓮寺で、今更この山彦絶叫で驚く者など誰もいなくなっていた。

襖一枚隔てていれば『あー、響子がまたやってるよ』と流すこともできるようになっていたのであった。

さて、そんな風にしてこの場に足を運んだ一輪を待ち受けていたのは

「……尼さん、水、お水ください……」

今にも死にそうな小傘であつた。

もちろん妖怪ともなれば、今にも死にそうだからと言って、放っておいて死ぬわけでもないのだが。

そういった理由も含めて危機感など全くない一輪は、そんな小傘を見て悩ましげに額に手をやるとため息をつき

「それに比べ、近頃の若い野良妖怪と来たら、いやはや、たるんでおると言うか何と言うか……」

「だって私、元は雨傘だもん。日傘と違って暑いのは嫌なんだよ……だからお水、できれば雨水がいいけどもうこの際井戸の水でも海の水でも何でもいいや、お水ください」

「だって」じゃない。そんな心構えだから『最近の妖怪は士気が

低下している』なんて言われるのよ。そもそも貴方の場合――」

「あうう、お説教はいらないのに……」

こうなると一輪は長い。

説法を生業としているからなのか、元からそういう性格なのか、はたまた歳のせいなのか、兎も角一輪の説教というのはやたら長い。増して相手が小傘のようにもの覚えがいまいちな妖怪な場合、説教が終わる頃には『なんで私怒られてるんだろう』と当初の原因を忘れる事もザラである。

そんなわけで、ただでさえ蒸し暑いこんな日に説教という名の耐久レースが待ち受けているとは誰が予想できただろうか。

どうしてこんな面倒な事になってしまったのだろう、と小傘がほぞを噛んだその時

「一輪、あまり暑いのにそうかつかしたのでは余計暑くなるわよ」

ちょうど良いタイミングで白蓮が、水の入ったコップを持ってやってきた。

「いや、姐さん。しかしですね……」

「それにこまめな水分補給は大事よ。熱中症って怖いんだから」

そう答えながら白蓮は小傘に水を渡した。

病気にも強い妖怪が熱中症などかかる機会もなく、その意識も希薄なはずなのだが、そこは元人間の白蓮、人間の病気には滅法詳しい。

「わあ、ありがとうございます！」

言うが早いか、小傘はコップを半ばひったくるように受け取ると

一気に飲み干した。

一方、ものの見事に話の腰を折られた一輪は少々やりきれない様子である。

だが、一番どうして良いのか分からないのは、そんな一輪と小傘の様子を見て、どちらも大好きなだけにどちらについて良いか分からず傍観しているしかない響子である。

「ぶはあ、生き返った！ 元氣と勇氣と驚き百倍、いつでも人間脅しに行けるわ！」

たったコップ一杯の水にしては少しばかりオーバーではあるが、その言葉通り小傘は先ほどの死に体状態とは比べ物にならないほど漲っていた。

「それにしても今日は暑いわね。夏は暑い物だけど、あまり暑過ぎても過ぎにくいし、何とかしようかしら」

そう言いつつ白蓮は鳴らない風鈴と、その先に広がる晴天を眺めた。

「ならば、打ち水でもしましょうか」

一輪は首筋の汗をぬぐいながらそう答えた。

暑いのは誰だって同じであり、一輪とて例外ではない。

ただ、暑い日に暑いと言ったのではだらけた妖怪の前で示しがつかないということで態度に出していなかったにすぎない。

すると、白蓮は感心したように

「なるほど、それは名案ね。なら、早速今からやりましょう。響子、小傘、貴方達も手伝ってちょうだい」

と提案し、

「はい、分かりましたっ」

「合点承知の助でございます！」

響子も小傘も二つ返事でこれを受け入れた。

働けば働くだけ涼しくなる仕事とあれば、響子の労働意欲に火がつかないはずがない。

小傘としてもたった今もらった恩があり、その熱は流石に未だ冷めていない。

「あ、水仕事なら村紗を呼んだ方が手っ取り早いわね」

それに気づいて、一輪はぽんと手を打った。

船幽霊ともなれば河童と肩を並べられるくらいには水の扱いに長けている。

その上、いちいち井戸から水を補給しなくても延々と水をまき続けられるという点でも打ち水作業と相性が良い。

そうと決まれば。

「村紗ー、ちょっと来てー。打ち水するから力貸してほしいの」

一輪がそう建物内部の方に呼び掛けると

「分かった、今行くー」

とすぐに水蜜の返事が返ってきた。

だが、”今行く”と言った割には来る気配がない。

「村紗ー！」

一輪が叱咤をかけると、ようやく奥の方から水蜜が現れたが、

「ごめんごめん、遅れて。ちょっとこいつが離れてくれなくて」

そう言った水蜜の右足にはべったりとぬえがしがみついていた。

「と言うかあんたもしつこいわよ、いい加減にしなさい」

「だって仕方ないじゃん、暑いんだもん。村紗1人だけ涼しい思いをしてるなんて罪よ、罪」

いくら水蜜が振り払おうとしても、ぬえは離れようとはしなかった。

「……と言った具合なんです」

とうとう水蜜も困り顔で白蓮の方を見た。

「確かに、村紗は体温低いから、気持ちとは分らないでもないけど」

流石の白蓮もこれには困ってしまった。

一方この言葉を真に受けたのが小傘である。

どれ、と言わんばかりに水蜜の手を触ってみると、

「あ、ほんとだ。冷たい」

こうして知らないオプションが2つに増えてしまった水蜜。

一般的な恒温動物の平均体温が30台後半をキープしているのに
対し、彼女の平均体温はおおよそ20 前後を維持している。

まるで死人のような体温だが、実際死人なのだから仕方がない。
生前はきちんと36.7 ありました、とは本人談。

「ええい、2人そろって離れなさいよ！ 特にぬえ、あんたに至っては冬は寄ろうともしないくせに！」

「だって冬の村紗は身も心も経済的にも冷えきった女だし」

「こんちくしょう、余計なお世話よ！ 大体、あんたが奢って奢って言わなければ私の財布だってもう少しあったかいわ！」

水蜜は徐々にヒートアップしていくが、残念ながら体温がヒートアップする気配はなく、ぬえも小傘も貼りついたかのように離れようとしなかった。

そんな光景を端から眺めていた響子だが、なんだかんだ言って和んでいる小傘やぬえを見ると何だか自分も触ってみたくなってきた。そうしたうずうずを押さえきれなくなって、響子はこっそり、恐る恐る水蜜に手を伸ばそうとすると

「響子、後でいくらでも確かめさせてあげるから今はパス！」

「は、はい、ごめんなさい！」

もう振り払うのに必死な水蜜に叱られ、手をひっこめた。

そして、水蜜の苛立ちもとうとう頂点に達しようとしていた。

「ええい、こうなれば奥の手よ！」

そう叫んだ瞬間、水蜜はその場から一瞬にして霧のように消え去った。

唐突な水蜜の消失により、小傘は体勢を崩し、同じくよろけたぬえにゴツンとぶつかった。

霊体化による瞬間移動、スペルカード『シンカーゴースト』の元

ともなつた水蜜の特技の1つである。

完全に物理的干渉から解き放たれる上に短距離とは言え瞬間移動まで可能という大技だが、この状態を保持しすぎると肩がこる、とは本人談。

「まったく、そんなに涼みたかつたらお墓の幽霊で代用してなさい、と」

そう言つて倒れた2人の真上に現れた水蜜は、最後に実体化して

「さてと、お待たせしました。打ち水なら私の本領発揮ですよ、早く行きましょう」

と、白蓮の手を引いて玄関へ早足で歩きだした。

冷房代わりにされるのは御免こうむるが、自分の力が白蓮の役に立てるとするのは水蜜からすれば至上の幸福である。

もう一刻でも速く役立ちたいという思いが彼女を急がせるのであった。

「あらあら、頼もしいわね。それじゃあ、よろしく頼むわよ」

「お任せください！ 私の柄杓でこの命蓮寺をこの夏幻想郷一涼しい地としてみせますよ！」

すっかり張り切つて廊下に行く水蜜と、連れられて進む白蓮。

一歩置いていかれた一輪は、すぐさま響子の手を握ると歩き出した。

「響子、行くわよ。調子に乗った村紗ほど危険な物はないわ、しっかり見張つてないと」

「え？」

「さあほら早く。寺が水没してからじゃ遅いんだから」
「え？」

この時、響子はまだ一輪が何を言っているか分からなかった。

これから行われる打ち水が、ごく普通の打ち水であることに何ら疑いを抱いていなかったのだ。

だがこの後、一輪が何を危惧していたのか、響子は身を持って体験することとなるのである。

続く。

十二話目：白蓮様の納涼大作戦（後書き）

船長さんの本人談は高確率で当てにならない。

→ 船長さんの本人談

はい、どうも。打ち水も大好き、作者の兔です。

打ち水と称して庭中を水浸しにしていた幼少の思い出。

そろそろ初秋の時期だというのにこんな暑い話を書いてみました。
まだ残暑が厳しいということとで容赦していただければ幸いです。
最近の打ち水やっているとところなどあまり見かけなくなっていました。

おそらく冷房なんてない幻想郷ですもの、幻想郷では打ち水はまだ現役ですよ。

幻想入りと見ることもできるかな、いやでもまだ外界でも打ち水は現役だと信じたいです。

そんなわけで（どんなわけだ）、もう少し続きます。

言わばこの話は前編みたいなものです、後編は次話で。

十三話目：ぬえちゃんの超納涼大作戦（前書き）

前回のあらすじ

あまりに暑いので聖さんと愉快な仲間たちは打ち水をする
ことにした。（十二話目参照）

十三話目：ぬえちゃんの超納涼大作戦

白蓮、水蜜、一輪、響子が内水の準備を始めた頃。

「何やら、外の方が賑わっているようですね」

星は自室にて写経に勤しんでいた。

毘沙門天の弟子たる者ともなれば、休日であっても、どんなに夏の暑さが厳しくても、功德を積まねばならないのである。

そついうわけで今日も修行に余念のない星であったが、外から聞こえる賑わいが耳にはいつて、ふと手を止め、顔をあげた。

「なんでも聞いた話だと、打ち水するらしいですよ」

書き物用の机を挟んで向かい側で、ナズーリンが答えた。

こちらはダウジングロッドのお手入れに余念がないようで、星の呼びかけにも顔をあげずせつせと作業を続けていた。

先述の通り、一応ここは星の自室であるのだが、半ばナズーリンの生活メイン拠点と化している。

ナズーリンに自室が与えられていないわけではない。

だが、その自室は既に彼女がダウジングによって集めたお宝（一輪に言わせれば金銭的価値しかないガラクタ）で足の踏み場も残されていないほど一杯なのだ。

それに加えて、そのナズーリン自身も『万が一ご主人様が何か困難に直面した時のために、常時スタンバイしておくのが従者という物だろう？』と言っているのだから仕方がない。

星も別にこれを不便に思っていないようなので、この不思議な同棲関係は結構長く続いているのである。

「何事かと思つたら打ち水ですか。それは風流なことで、今日みたいな日には実に良い考えですね」

そうにこやかに星は答えた。

いくら毘沙門天の弟子とは言え、夏の猛暑を暑いと感じるのに違ひはない。

だがこの返事がナズーリンにとっては大層気にいらなかったらしく、仏頂面で顔をあげた。

「ご主人様。まさかとは思いますが、手伝いに行こうとは思っていませんよね？」

「……駄目ですか？」

「駄目です」

苦笑を浮かべた星に、ナズーリンは厳しい口調で迫った。

「打ち水など小間使いの仕事、毘沙門天様の代理ともあろう貴方にとっては役不足もいいところです。」

” 功德も積まず鍛錬も行わず、何をしていたのかと言えば打ち水に精を出していた ” だなんて、どの面下げで毘沙門天様にご報告できましようか。

少しは体面というものにも気を配ってください」

本来ナズーリンの本業はこちら、毘沙門天代理たる星の監視兼補佐である。

監視と言っても、星のスペックが毘沙門天代理を名乗るに相応しいことくらいナズーリンはよく分かっているので、さほど重々しいものではない。

よってこの本業は、このように毘沙門天代理として相応しくない行動をとった（と個人で判断した）時に小言を言う程度にとどまっ

ている。

この監視対象が優秀すぎるが故に全く忙しくない本業に代わって、むしろ副業のダウジングの方に精が入りはじめたのはもう何百年も昔の話。

それでお給金だけはしっかり貰っているのだから、抜け目のないことこの上ない。

「しかし、これだけの賑わいを見せているということは聖をはじめ寺が総出で行っているのでしょう。私だけ行かないというのも……」
「いいんです！ 本来、それが上に立つ者として相応しい心構えであって、聖の場合は単なる物好きなだけにすぎません。

兎に角、万が一ご主人様があちらに参加するようなことがあれば、その旨はきっちり報告書に書かせていただきますからね！ まったくもう！」

ぶんすかぶんぶんぷんとナズーリンは怒りながら、ダウジングロッド磨きに戻った。

星もナズーリンとは長い付き合い故に、このように叱咤されることにすっかり慣れてしまっただけのもの、

（ナズーリンの言うことも一理あるのですが、それにしても聖達が羨ましいです）

なんて内心呟きつつ、それを表に出すとまたナズーリンがうるさいので、何食わぬ顔で写経の方に戻っていった。

再度、部屋には沈黙が戻った。

「さて、と」

手桶に水を汲み、柄杓を携えて、白蓮、水蜜、一輪、響子の4人は庭に集まった。

もつとも、水蜜に限っては自分自身が手桶のようなものなので、持ってきたのはお得意の底抜け柄杓のみであったが。

「4人もいることだし、手分けしてやれば早く終われるわね。それじゃあ、場所の分担をしましょうか」

指揮をとるのは、言うまでもなく白蓮であった。

早く作業に移りたくて仕方がない水蜜と、それが不安に思えてしかたない一輪、そして響子はそんな3人を交互に見渡していた。

「私は庭の方をやるわ。一輪は物置の近く、村紗は裏口の辺り、響子は参道の方をやってちょうだい」

指揮する立場としては場馴れしている白蓮は、今回もまた手早く指示を出した。

さりげなく指揮者がこの場から自分の担当場所までの移動距離が最も短いのだが、そこは果たして意識されていたのかどうかは定かではない。

「はい、分かりました！ さあ、一輪、行くわよ！」

水蜜は待つてましたと言わんばかりに、一輪の手をつかむとぐい引っ張りつつ歩き出した。

「ちょ、ちょっと、そんな引っ張ったら水がこぼれるじゃない。じ

「やあ姐さん、私達もやってきます」

「そう言い残して、一輪は水蜜に連れられて建物の影に消えていった。」

「それじゃあ、私も頑張ってきます」

最後に残った響子も、手桶を持つと担当場所の参道まで一直線に駆けていった。

さて、そういった経緯で持ち場にむかった一輪と水蜜。

水仕事では力強いとは言え、本人の性格に難がある水蜜に対し、一輪はそれはそれは何度も同じことを言っていた。

水蜜としてもこういう注意は割と慣れっこである。

「村紗、念のため言っておくけど、ほどほどにしないと駄目よ。貴方の場合、すぐ調子に乗るんだから」

「あはは、分かってるよ。一輪は本当に心配性なんだから。大丈夫大丈夫、大船に乗ったつもりで任せなさい」

「船幽霊の貴方がその台詞を言うともた聞こえ方が違ってくるわね。沈みそう」

「まあ、確かに否定はできないわ」

疑うような目で見た一輪に、水蜜は底抜け柄杓を振りまわしながら笑った。

本当に分かっているのだろうかと不安になる一輪だが、水蜜もそ

これまで馬鹿ではないということは分かっている。

それに万が一何かをきっかけに暴走の兆候を見せ始めたら、自分が止めれば良い、ただそれだけのことなのだ。

その止めるというのも、別段難しいことではない。『やり過ぎよ、馬鹿』とでも言ってやれば十分である。

むしろ、いざという時に止めることができないと分かっていたら誘っていないかただろう。

そこら辺は彼女と千年一緒に暮らしていたからこそ生まれる自信である。

「兎に角、しっかりやってよね」

「了解了解」

最後まで終始上機嫌だった水蜜を見ると、まあ何とかなるだろうと一輪は村紗と分かれて自分の持ち場にむかった。

一方、お寺の玄関。

ちようど響子が水をまいているのが遠くに見える位置ではあるが、小傘とぬえはまだそこにいた。

「ねえ、ぬえちゃん、私達も行こうよ。なんだかあれ楽しそうだよ？」

「楽しそうに見えるのはあんたと村紗くらいよ。何が楽しいんだか、私にはさっぱりだわ」

「えっと、水をまくところ」

「だからそれを楽しいと言えるのはあんたと村紗ぐらいだって」

水仕事というだけで目を輝かせる小傘に対し、ぬえは仏頂面でそれを眺めていた。

傘としての使命を全うしたかったけどできなかった小傘は、こう

いう時に余していた労働意欲が再燃してくる。

だがぬえとしては、自分に見返りがない無償奉仕活動など馬鹿馬鹿しくて仕方ないのだ。

人間を襲う妖怪としてのスタンスは似ている2人だが、こういう生活場面になると温度差は顕著に現れるのである。

「えー、でもなあ。ぬえちゃんが行かないなら私だけで行つてきちゃうよ?」

「行けばいいじゃない。別に、1人じゃ寂しいって泣くのはあんたの方でしょ?」

「泣かないよ。じゃ、行つてくるから」

そう言つて、小傘は下駄をはくと響子の方まで駆けていった。そして

「ちょっと貸して」

と響子の手から水の入った柄杓をひつたくるように奪うと

「うらめしやー!」

と叫びながら水をまいた。

返してよ、と言おうとしていた響子であつたが、その反論を封じるように山彦の本能が響子の心中で雄たけびをあげた。

大きく息を吸い込み、小傘の隣で

『うらめしやー!』

と、小傘の叫びをリピートしてしまった。

するとこれに味をしめた小傘、響子の持っている手桶から水を補

給すると

「人間のバカヤローッ」

そして響子も続くように

『人間のバカヤローッ』

「あんまり妖怪様を舐めるなよーッ」

『あんまり妖怪様を舐めるなよーッ』

「今晚おまえの枕もとに呪詛となえに行つてやるからなーッ」

『今晚おまえの枕もとに呪詛となえに行つてやるからなーッ』

「明日の朝になって靴の中に画鋏はいつでも恨むなよーッ」

『明日の朝になって靴の中に画鋏はいつでも恨むなよーッ』

なんとも物騒な打ち水である。

そんなこんなですっかり楽しそうな小傘を遠目に、ぬえは舌打ちした。

「ちえっ、馬鹿みたい。あー面白くない、村紗でもからかつてこよ
うかしら」

ぬえにとつて、自分以外の奴らがわいわいがやがや楽しそうに何かをすること程面白くないことはない。

まして妹分である小傘が、その一員として実に楽しそうであるの腹立たしさに拍車をかけているのだ。

だが、腹いせに村紗をいじろうとしても、その村紗もやっぱり打ち水メンバーである。

面白くない、とぬえは仏頂面で仰向けに寝転がったが

「ん？ 待てよ、そうか、村紗か……」

天井を見上げた時、ぬえの悪知恵脳が本格的に回りだした。
不機嫌だった彼女の顔に笑みが戻るが、その笑みは今の小傘のよ
うに清々しいものではなかったのは言うまでもない。

「良い事ひらめいちゃった、今に見てろ」

上体を起こすと、ぬえは靴を履いて表に向かった。

新たな悪行が幕開けを迎えようとしていたが、この初動に誰も

「一昨日きやがれてんだこんちくしょーッ」

「一昨日きやがれてんだこんちくしょーッ」

そう、誰も気づかなかったのが運のつきであつた。

さて、その頃一輪はと言うと、時々水蜜の様子をこっそり確認し
つつ自分の仕事に従事していた。

幸い水蜜は張り切っていた割には無茶な行動に出ることもなく、
打ち水という言葉にちょうど良い量の水をまいていた。

加減さえしつかりできれば水を扱う作業において水蜜ほど頼りに
なる存在はないということを一輪は再認識していた。

（私の取り越し苦労だったかしらね）

いつまでも問題児扱いする自分が間違いだった、と内心で呟く一
輪。

昔から水蜜はどこか短絡的で血の氣が多い性格であつたが、それでも長い目で見ると大分丸くなつてきたように思える。

そろそろ見方を変えても良い頃合いかもしれないと思いながら一輪は作業を続けたが、その手元が留守になつていた隙に

「ちよつとそれ貸してよ」

前触れもなくそう声がしたかと思うと、ふいを突くように現れたぬえが一輪の手から手桶をひたたくつていった。

「あ、こら！　ぬえ！」

「ひひ、返してほしけりや追いついてごらーん」

ぬえはそう言いながら、奪つた手桶を携えて近くの物置の中に逃げ込んだ。

自分から袋小路に逃げ込むほど馬鹿なぬえではない、おそらく物置の中に何らかの逃走ルートを隠しているのだと一輪は読んだ。

その手段は想像の及ぶ範囲ではないが、そもそもぬえは”正体不明”という言葉ば『想定外の事象の専門家』であるため、何ができてもおかしくないのだ。

よつて一輪は、何の迷いもなく物置に入った。だが、そこにはぬえの姿はなく、手桶だけが取り残されていた。

これが何を意味するか一輪はすぐさま理解したが、寸分の差で入口の戸がぴしゃりしまった。

閉めたのは勿論ぬえである。

普通、建物の中に入った者はまず正面を見る。即ち、その真上は視認対象外、つまり死角となるのである。

ぬえはこれを利用し、物置に入るや否や手桶を手放して天井に張りついて一輪を待っていたのだ。

そして一輪が入ったと同時に、その注目が手桶にあるうちに入口

から脱出。間髪いれず戸を閉めたのであった。

勿論、この戸に仕掛けを施すのも忘れてはいない。戸の側面にたつぷり塗っておいたとりもちが、戸が閉まったことで今は戸と壁の間で粘っている。

すなわち、この物置のたった1つの出入り口であるこの戸も、もう簡単には開かなくなってしまったのだ。
その中に一輪を残して。

「くっ、ぬえ、開けなさい！　ぬえ！」

物置とて寺の大切な備品であり、そう簡単に壊すのは一輪としても回避したい。

だが、そう呼びかけたところでもう物置の前には誰もいない。

ぬえはもう、一輪を閉じ込めたことに満足し、水蜜の所へ向かっていた。

「これで邪魔者は封じたわ」

水蜜をけしかけるにあたり、一輪ほど邪魔な存在はない。長い長い地底生活で、悪知恵に長けるぬえはこの点をよく理解していた。
裏口の方に出たぬえは、そこで水蜜を見つけた。

高潮も鉄砲水も自由自在の水蜜とは思えぬほどちまちまとした作業を見て、ぬえは声をかけた。

「ちょっと村紗」

「あ、ぬえ、よかつたらあんたも手伝って行きなさいよ。涼しいわよ？」

「ふん、さつきから一向に涼しくならないから文句言いにきたのよ。あんた船幽霊でしょ？　かつて西国一帯を恐怖に陥れた船幽霊ムラサ当本人なんでしょ？」

なのに、何よその低出力。夕立の方がまだ怖いわ。そんなちびちびやってないで、もっとバーっと撒きなさいよ、バーっと。」

「あのねえ、いつの話してるのよ。もう”怖がられる妖怪”は辞めたの。それに、仮にも打ち水なんだから程度って物があるでしょうに。」

それでも暑いって言うんなら、あんたも柄杓と桶もってきて一緒に水をまきなさい」

そっけなく水蜜にあしらわれてしまったぬえだが、これくらいで諦めるようなぬえではない。

作戦その1「けしかける」が駄目なら、作戦その2「煽る」の発動である。

「ふーん。できないんだ」

ぬえは挑発の笑みを浮かべつつ、水蜜に背を向けた。

「ま、海から離れてもう千年だもんね。水関係なら村紗にできないことはないと思ってたけど、ご隠居を酷使用するわけにもいかないか。どれ、河童の連中から水撒き機でも脅し取ってこようかしら。機械は文句いわないし、案外あっちの方がへなちよこ村紗より性能良かったりして」

そう言い残して飛び立とうとしたぬえであったが、その服を水蜜はがっちりつかんでいた。

「随分好き勝手言ってくれるじゃないの、ぬえちゃん。もう1度言うてごらん？ 誰がへなちよこだって？」

目の色を変えてぬえを掴んだ水蜜は、顔こそ笑顔であったが、う

っすら青筋が浮かんでいた。

だがこれにひるむぬえではない、むしろこれは彼女が望んだ結果であり、こう喰いついてこなければ面白くない。

「んー？ 誰だろうねー。命蓮寺在住の船長気どりの名前名字共にMさんのことじゃないのー？」

あえて視線を合わせず、ぬえはそう平然と答えた。
この挑発に、とうとう水蜜の怒りに火がついた。

「よーしよしよし、そうかそうかそうですか。なら、特別に見せてあげようじゃないの、そのかわり風邪ひいても知らないわよ！」

そう声高々に宣言すると、屋根の上に飛びあがった。
そして

「下は打ち水から上は洪水起こしまで、私の手にあまる放水任務はないわ！」

と叫びながら、その底抜け柄杓を振りかざした。

途端に、底抜け柄杓から怒濤の如く水があふれ出し、それが勢いをつけて空に昇る。

しかしそれらは所詮ただの水、いくら上に飛ばされたとしても重力から逃れることはできず、結局は大地に降り注ぐ。

即ちそれらは、端から見れば雨、それも滝のような夕立となって空の下にいる者すべてに牙をむくのであった。

「これで面白くなってきたぞ」

ぬえはほくそ笑んだが、そんな彼女のたくらみを見破れなかった

水蜜は、ぬえの思い通りに水を周囲にぶちまけていた。

続く。

十三話目：ぬえちゃんの超納涼大作戦（後書き）

少女監禁、ダメ絶対

はい、どうも。こんなはずじゃなかった、作者の兎です。

本当は前編後編の予定にするつもりが、書いてみたらやたら長くなってしまったので前中後に分けることに。

一応後編まではできていますので、これ以上分割することはなさそうです。

なんか偉い事になってきました。

ぬえちゃん書いてるの楽しいです、いや書いてて楽しくない人なんていないんですけど。

それにしても策士は書いてとても楽しいのです。

そういった楽しさはナズ描写にも共通しているのかな。

こんな嗜好を持つ者ですから、必然的に狡猾キャラがSSに溢れていくかもしれません。

案外、幻想郷住民は狡猾系女子が少なくないですからね。

作戦には作戦で勝負です。

次回はあの子が無駄に魅せます。

たぶん。

十四話目：響子ちゃんの納涼山彦大作戦！（前書き）

前回のあらすじ

あまりに暑かったため、聖さんと愉快的な仲間たちは打ち水をするこ
とに（十二話目参照）。

ところがぬえの暗躍により一輪が物置に閉じ込められ、さらには水
蜜が大暴走。

どうなる、命蓮寺（十三話目参照）。

十四話目：響子ちゃんの納涼山彦大作戦！

「おや、雨でしようかね」

あれからずっと写経を続けていた星は、ここで2度目の休息をいれて天井を見上げた。

ぼつぼつという感じではなく、激しく打ちつけるような雨音が屋根の下までやかましく届いてくる。

「ね、打ち水に参加しなくて正解だったでしょう？　もし行かれていたら、今頃ご主人様までずぶ濡れでしたよ。」

この時期は頻繁に通り雨が降るから、少し辛抱していれば後は勝手に天が大地を冷ましてくれるのです」

やっぱりナズーリンは顔もあげずに答えた。今度はペンデュラム磨きに余念がない。

「聖達、濡れてなければ良いのですが」

「子どもじゃないんですから、放っておいても何とかするでしょう」

心配する星に対し、ナズーリンはそっけない態度をとった。

これがただの通り雨ではなく、実は水蜜の大暴れだということに終始気づかなかった。

一方、建物の中にいたのに事を全て察した者もいた。一輪である。

激しく打ちつける雨音だけで、今の状況をおおよそ把握していた。

「そうか、ぬえの狙いはこれだったか」

自分を閉じ込めるだけで終わっていたかと思っていたため、水蜜のことを完全に忘れていた。

だが考えてみれば、確かにぬえのやりそうなことである。

自分を罠にはめたのも、水蜜を教唆するにあたって最も邪魔な存在であると考えれば納得が行く。

「兎に角、あんたの思うようにはさせないわ！　行くわよ、雲山！」

この開かずの扉を壊し、どうにかして水蜜を止めなければ色々とまずいことが起きるのは百も承知。

具体的には外に干してあった洗濯物の被害など。

こうなれば寺の備品の一時的破壊もやむを得ない。

一輪から指示を受けた雲山、まずは一発、力任せに雲山に扉を殴ってみた。

だが扉はびくともしない。

元々弾幕の流れ弾による破損を危惧しつつ設計した建物なので、こういう物理的衝撃には滅法強いのだ。

まさかそれが仇になるとは、と後悔していても始まらない。

「一発が駄目なら二発、二発で駄目なら三発、三発でもダメなら開くまで撃ちこむまでよ！」

こうして一輪の孤独な戦いが始まった。実際に戦っているのは雲山なのだが。

ところが、この扉のすぐ向こう側、即ち外ではというと、ぬえがこの戸を必死になって押さえていた。

本当は水蜜をけしかけた時点で退散する予定だったのだが、予想外に一輪が早く強行突破を目論みだしたのが痛手となった。

こういう時に小傘が近くにいれば面倒な役を押し付けられるし、最低でも吹きこむ雨を凌げるのだが、こういう時に限って近くにいない。

「あのすかばんたん、なんでこういう時にいないのよ」

こちらもちちらで孤独な戦いとなりそうだ。

「おまえの母ちゃん先祖代々でべそのくせに生意気だー……、うん？ 雨だ」

「え？ あ、本当だ。と言うか、ちょっとこれ強いよ？」

参道で打ち水をしていた響子と小傘も、これによやく気付いた。水蜜の打ちあげた水は命蓮寺の敷地一帯を濡らすほど広範囲に広がっていた。

「わ、強い強い！ 小傘、ひとまず戻ろう！」

「えー、せつかく雨降ってきたのに？」

「雨だからだよ！ びしょ濡れになったら風邪ひいちゃうよ」

「うーん、ま、そういうなら仕方ないか。それじゃ、そんなに長い距離じゃないけどこの傘に入っていこうよ」

小傘はそう言って自分自身の本体を差し出した。差し出しただけで手放すつもりはない。まあ、当たり前である。

むしろこうしたアクシデントに対して積極的に自分を売り込むあたり、ぬえの狡猾さを受け継ぎつつあるのかもしれない。よく誤解されやすいが、小傘にだって学習機能はある。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「よっしゃ、任されたー」

そうしてどうにか寺の本堂に戻った2人であったが、ちょうどそこに屋根の下を伝うようにして白蓮が戻ってきた。

「2人とも今戻ってきたのね。濡れなかった？」

「ええ、私達は大丈夫です」

「と言うか私は濡れてなんぼです」

実際2人はすぐに戻ってこれたため、それほど濡れずにすんだ。響子としては嬉しい事であったが、小傘にとっては少々残念に思え、どうせなら遠回りすれば良かったとすら思うほどであった。

「そう、良かったわ。濡れると風邪の元というからね」

「それにしても、天気雨でしゅうかね。こんなに晴れているのに」

「うーん、雨だったらまだ困らないんだけど」

白蓮は雨どいを見上げて苦笑しつつ言った。

「でもこれ、天気でも何でもなく、きっと村紗が降らせているのよね」

「おお、船長さん、こんなこともできるんだ……」

響子はそれを聞いても、危機感と言うよりはむしろ感心を示した。これほどの事ができる者など河童の中のごく一部にすぎないと思

っていたので、身近な比較対象がいた分尊敬の念も強かった。

「村紗は海で生まれ育った人ですが、もう千年以上海を見ていないはず。たまに海が恋しくなるのでしょうか」

白蓮はそう言って豪雨を眺めた。

綺麗な解釈だけに、”実を言うとなえに唆されただけ”という真実は知らない方が良いのかもしれない。

「それにしても、このまま放っておくわけにもいかないわね。そろそろ止めてあげないと、辺り一面水浸しになってしまうわ」

すでに地面には吸収しきれなかった水が溜まりに溜まって、ちょっとした浅瀬を形成していた。

それを聞いた響子は、一輪が言っていた『寺が水没してからじゃ遅いんだから』という言葉を思い出した。

あの時はどういう意味か分からなかったが、水蜜の力量を知ってしまった今では、やっぱり少々大げさな気もするが少しは分かった気がする。

（そう言えば、こんな大変な時に一輪さんはどこ行っちゃったんだろっ）

響子は知る由もないが、一輪は未だ戸越しにぬえと戦っている。

「村紗、もうその辺にしておきなさい、お庭が水浸しになっちゃうわ」

「船長さん、もういいですよー！ ストップ、ストップー！」

軒を見上げて白蓮が語りかけ、その隣で響子は自慢の大声をあげ

たが、雨がやむ気配は無し。

「……あれ？」

「聞こえなかったんじゃない？ 雨音で」

小傘も雨水のしたたる雨どいを眺めながら言った。

その通り、大粒の雨が屋根を打つ音というのは想像以上に大きく、その中心地にいる水蜜は外部の音が聞こえにくい環境下にいた。

その上、今響子ら3人は屋根の下にいるのに対し、水蜜は屋根の上にいる。

間に屋根を挟んでしまっているという構造が、さらに音が届きにくい要因の1つになっていた。

こうした複数の事情に阻まれ、白蓮の声は勿論、轟音の泰斗たる山彦の響子ですらその声を届けられずにいた。

「仕方ないわね、ちょっと村紗を止めてくるわ」

「ちょっと待ってください、私に考えがあります」

屋根の下を出ようとした白蓮を、響子が引きとめた。

自分の声が届かないという事態に、響子の自尊心は傷つけられていた。

このまま引き下がっては山彦の名が泣いてしまう。

汚名を返上するにはリターンマッチ、再戦を挑むよりほかはない。

ただし、また同じ事を繰り返しては同じ結果が帰ってきて終わり、それでは意味がない。

よって響子とはつさに知恵をめぐらし、彼女なりに作戦を立てたのであった。

「まず私と小傘がいきますから、その後で聖様は――」

その作戦を聞き終わると、白蓮は

「分かったわ、じゃあ早速始めましょうか」

と二つ返事で了承してくれた。

その作戦内容を聞いたところ、自分1人で村紗を呼びに行った方が断然早そうだが、それでは響子の気が済まないと言うのならそちらを優先してあげたい。

そこまで一刻を争う事態でもないので、響子の面目を立たせるためにも協力することとしたのであった。

「よし、小傘、いくわよ！」

「レッツゴー！」

そう掛け声をあげて、響子と小傘は外に飛び出した。

大粒の雨水は小傘が防ぎ、2人はそのまま飛びあがると、白蓮の方に向き直った。

屋根の上で柄杓を振りかざす水蜜も見えたが、実にすがすがしい笑顔であった。

そんなことはさておき、響子はゆっくり息を整える。山彦としてはここが正念場である。

そうした2人の様子を見ていた白蓮は、2人の準備が整ったことを悟ると、こちら大きく息を吸い込み、

「村紗ー、もうその辺にしておきなさいッ」

そう叫んだ。

雨音の中でも聴覚の衰えを知らない響子はこれをキャッチし、

『村紗ー、もうその辺にしておきなさいッ』

山彦の本能に基づいたオウム返し咆哮をあげた。

響子の渾身の雄たけびは庭の木の葉を揺らし、枝をしならせ、雨粒を吹き飛ばし、軒下の風鈴も鳴らし、ついでに物置前にいたぬえすらもひるませ、水蜜を直撃した。

「……響子？ あれ、でも今、聖の声がしたような」

とうとう水蜜はその手を止めた。

それと同時に、豪雨も嘘のように降りやんでしまった。

「船長さん、もう打ち水はいいそうですー！」

今度は響子は普通に叫んだが、雨音がしない今となっては十分な音量であった。

「そうよ、村紗、もうこの辺でやめましょう」

雨があがったことで、白蓮も屋根の下から出てきた。

「あ、もう終わりですか？ まあ、でもちよつとやりすぎちゃったかしら」

ようやくハイテンションから我に返った水蜜であったが、

「ふーん、まさかこの有様を『ちよつと』なんていう言葉で形容されるとは思ってもいなかったわ」

その背後に、青筋を浮かべつつ腕を組んで立っていた者がいた。

「げっ、一輪!？」

たった今物置から脱出してきた一輪であつた。

入口を塞いでいたぬえが響子の山彦ボイスでひるんだ隙について、戸を弾き飛ばし脱出してきたのである。

残念だったのは、そのぬえに逃げられてしまったことだろう。

「あれだけ程度に気をつけなさいって言っておいたのに、せつかく乾いていた洗濯物も台無しにしてくれちゃって」

「い、いや、あの、これには深い訳が……」

「知ってる、どうせぬえに唆されたんでしょ？」

「あ、まあ合ってるけど、よくご存じで」

不意打ちに近い形で当てられた水蜜は少々戸惑ったが、一輪はため息をつきつつ話を続けた。

「ついさっきまで物置に監禁されていたからね、どうせこういうことだろうと思つたわ」

「あれまあ」

「兎に角、見ての通りあちこち水浸しだから、片づけよろしくね」

「えっ、私がやるの？」

急に水蜜の表情が苦笑から後悔の念に変わった。

「当たり前でしょう、あんたがやつたんだから。ま、物置直したら特別に私も手伝ってあげるから、それまで1人でやってなさい」

「……ぬえめ、覚えてろよ」

こうして、水蜜の孤独な水浸しになった庭の排水作業が始まった。

「何か手伝いましょうか？」

白蓮や響子からはそう声をかけてもらったが

「いやいや、これは私がやっただから私が片づけます」

と、本当は喉から手が出るほど欲しい救援人材をあえて断った。

もしこれがぬえだとしたら否応なしに手伝わせるところだが、白蓮達のように無関係な人を巻き込むのは道理に反することである。

結局、途中から一輪が手伝ってくれたとは言え、作業は夕方まで続いた。

だがその間、お寺の住民が普段よりは涼しい思いができたのは水蜜のおかげと言いきつてもいいかもしれない。

そして、山彦としての名誉を挽回した響子はその日ずっと幸せそうであった。

これで終われば事実上ぬえの勝ち逃げとなるのだが、そうは問屋がおろさなかった。

一輪の手から逃げ延びたぬえは、日が暮れても、夕飯の時間になっても、帰ってくることはなかった。

そして、日付が変わる子の刻。

「へくしっ……、あー、思ったより濡れた服ってのは堪えるわ」

周囲の様子を伺いつつ、ぬえは裏口から寺に帰ってきた。

水蜜が雨を降らせたとき、それをまともに浴びたのは村紗だけではなかった。

幅の無い軒下で物置の戸の前でひたすら頑張っていたぬえもまた、吹き込んできた雨を大量に浴びていたのだ。

にもかかわらず、その後は悪事の責任をとることを嫌がり逃げ出した。

少しくらい服が濡れていた方が夏場は過ごしやすいとも思ったのだ。

だがそれはあくまで昼間の話、日が落ちてしまえば濡れた服は想像以上に肌寒かった。

「でも、ま、この時間なら村紗は兎も角、一輪は眠いだろうからあまりうるさく言うまい」

正直なところ帰りたくなったのは日没後の割と早い段階であったが、紅魔館の大時計を遠くから見つつ今まで粘ったのだ。

せめて一輪が弱い時間を狙えば、水蜜の方は上手く丸めこめるだろうという自信があったのだ。

こっそり裏口の戸を開け、居候の身にもかかわらず、まるで泥棒のように忍び込む。

周囲に誰もいない事を確認しつつ、自分の部屋に戻ろうとしたその瞬間。

「ぬえーっ」

刺客は背後、すなわち今自分が入ってきた扉から現れた。

振り向いてみれば、水蜜であった。それも実にこやかな笑顔でそこにいた。

「あ、やあ、村紗、た、ただいま……」

「もう、どこ行ってたのよ、こっちは偉く心配したんだから!」

唐突な水蜜の登場に戸惑うぬえを、水蜜は間髪いれず抱きしめた。

「なっ、ちょ、村紗!？」

「まったくもう、こっちの心配なんて知らずに出歩いて、もう!」

そう言っ水蜜は抱きしめる力を強くする。

抱きしめられるのは服びしょ濡れのぬえ、抱きしめるのは平均体温20の水蜜。

これが何を意味するかは、言うまでもないだろう。

「む、村紗、寒いつ、今はいいからっ、あんた冷たいからちょい離れてっ」

「ん？ 何か言った？」

「だから離れろって」

「え？ なーに？ ごめん聞こえない」

その瞬間、ぬえは悟った。

(こいつ、確信犯だ)

体勢的に見えないが、今水蜜がどんな顔をしているのか、ぬえには手に取るように分かった。

おそらく勝利の笑みだろう。蛇の道は蛇である。

そうしている間にも着々と奪われる熱エネルギー。

船幽霊ムラサ、海から離れて未だなお、ターゲットに恐怖を与える手段は豊富すぎた。

「そうだ、ぬえ、あんたまだ夕飯食べてないでしょ。もうみんなで食べちゃったんだけどさ、デザートのかき氷なら残ってるわよ」

「このタイミングでかき氷とか、殺す気かッ」

「だけどこめんね、お風呂も冷めちゃったのよ。水風呂でよければ今すぐ準備できるけど」

「この鬼畜ッ、外道ッ、血も涙もない悪党めッ」

「でね、ぬえの布団なんだけどさ、昼間うつかり濡らしちゃってまだ乾いてないのよ。それでもいい？」

「わざとでしょそれ、絶対わざとでしょ！」

「あー、でも私の布団は乾かしたから、どうしてもというならそっちで寝るといいわ。私も添い寝してあげるから」

「アホ、永遠の眠りにつくわッ」

「まあまあ、じゃあまずはかき氷食べに行こうか」

「て言うかその前に着替えさせてよ、頼むから！ 昼間の事は謝るから！」

「なーに言ってるのよ、ぬえのために作っておいたのにそんなことしてたら溶けちゃうでしょ？ ほら行くわよ、ごーごーごー」

「うわあああん」

綺麗な笑顔を浮かべつつ一方的に肩を組んで歩きだす水蜜、ベソかきながら引きずられていくように連れて行かれるぬえ。

待ち受けるは居間に置かれたかき氷のイチゴ味。

台所で待機するかき氷のメロン味とレモン味。

乾かす気の全くなかったぬえのふとん。

ぬえの帰宅に合わせて急きょ水で埋めた風呂。

そして何より自分自身が体温20。

ここまでやりこんだ水蜜を遠目に眺めて、

「……もう、なんていうか、どっちもどっちよね」

一輪は深くため息をついた。

本当はぬえが帰ってきたら叱り飛ばしてやるつもりだったが、今となつては相棒水蜜のこの暴挙にすっかり呆れ果てていた。

おかげでもう、今のあの2人にかかわること自体が馬鹿らしいとすら思えるようになってしまった。

仕事だろうが報復だろうが、兎に角1度スイッチがはいった水蜜はもう止まらない、それを再度痛感した一輪であった。

「流石に付き合いきれないわ。寝よ」

そうして一輪は寢床に戻っていった。

それからというものしばらく、ぬえは冷たい物を自分から所望することはなくなったという。

十四話目：響子ちゃんの納涼山彦大作戦！（後書き）

ナズ「なんか風呂はいろいろと思ったら水だったんだが」

はい、どうも。ここに書く内容で初めて困った、作者の兎です。
ぶっちゃけこの納涼エピソードは響子の作戦勝ちを書きたかった
がために考えた話だったのですが、ここまで長くなるとは。
予定外の長さになってしまったことに自分でも反省。

夏バテは怖いですよ。

あまり暑いからと言って調子に乗って冷たい物ばかり食べすぎるとバテます。

エアコンや扇風機をつけっぱなしにしてもバテます。

隣に体温20の人間を置いておくなどもってのほかです（↑
実際、これ書いている自分もちよっと体調崩し気味なのでみなさん
も気をつけて。

さて、命蓮寺メンバー以外も出す出す言っておきながら未だ1人も
出ないこの現状。

そろそろ「ため噓ついたろ」と言われそうで怖いので、ご登場願
うことにしました。

誰が出るかは次回ということで。
たぶん。

十五話目：響子ちゃんと墓場の番人（前書き）

お知らせ

今話から神霊廟の製品版ネタばれ入ります。

十五話目：響子ちゃんと墓場の番人

「ゼーだいじんしゅー、ゼーだいみょうしゅー」

今にも雨が降りそうな曇天の下。

響子は寺の裏の墓地を掃除していた。

境内の中は連日掃除しているが、特段汚す人もいないので、大方綺麗で掃除する必要がないのだ。

しかし、改めて思えば、命蓮寺裏の墓地に來たのはこれが初めてであった。

思ったより広いというのが第一印象。

幽霊がふよふよ浮いているのが見えるが、ここは墓地だし幽霊くらはいは響子も見慣れているのでどうということはない。

第一、寺には船幽霊という強烈な幽霊の上位互換がいるのだ。幽霊など怖いはずもない。

そんなわけで、響子はいつものようにお経を空読みしながら墓地の通路を箒で掃き掃除していた。

だが、

「ゼーむーじょうしゅー、ゼーむー……」

唐突に空読みが止まった。箒を握っていた手も止まった。

ふいに止まってしまった響子の視線の先には、墓石と墓石の間、大地から天を目指すよう垂直に立った2本の腕があった。

そう、腕だけなのだ。

腕が地面から生えたまま微動だにしないという奇妙な光景に目を奪われた響子は、おもわず手を止めてしまったのである。

「……腕？」

腕である。

どう見てもあきらかに血色の悪い腕である。

誰かが墓地に死体遺棄していったのだろうか、とも思ったが、その割にその腕は空に向かって曲がることなく伸びている。

『そういう形の植物なんだよ』と言われた方がまだ説得力があるくらいだ。

（なんで、腕だけ生えてるんだろう）

そう思った響子は、できるだけ距離を取りながら、箒の先端で突いてみることにした。

少しずつ後ずさりしながら、逃げ腰で、カタツムリの歩くような速さで、片方の腕の手首付近に箒の先を近づける。

そして、その先端が触れたかどうかというその瀬戸際で、突如、その腕がぶるつと震えた。

「ひっ」

それだけで響子は驚き、腰を抜かしてしまったが、事態はそこで終わらなかった。

その腕の周囲の地面が盛り上がったかと思うと、その土の中からまずは頭が、そして胴が、最後に足が、まるで踵に蝶つがいでもついているのかと思わせるような動きで現れたのであった。

開き切った瞳孔。

あからさまに血色が悪い肌の色。

まっすぐ前に伸ばしたまま曲がらない腕。

額に貼られた札、『勅命、隨身保命』の文字。

「……お、おおお、おお」

死体がそう呻いた瞬間、生ぬるい強風が墓場に吹き荒れた。

風に飛ばされた何体もの幽霊が、死体の大きく開いた口の中に次から次へと吸い込まれていく。

この異形の光景に、響子は絶句した。幽霊は今までいくつも見てきたが、死体が蘇るなど見たことも聞いたこともない。

ましてその死体が、次から次へと幽霊を喰っているのだ。これほど奇天烈な光景があるだろうか。

だが死体はそんな響子のことなどお構いなしに、その前代未聞の食事を続けていた。

「おお、おおおお……」

ほんの数十秒ほどであったが、その間に三十ほどの幽霊を食した死体。

十分食べ終えたのか、そこで口を閉じた。すると、墓に吹き荒れていた風もぴたりと止まった。

今までどこに目を向けていたのかも分からなかった死体は、そこでようやく、響子の方を見た。

「……お前、誰だ？」

誰だと聞かれれば寺の山彦だという答えがあるが、今の響子にはとても答えられる勇氣はなかった。

「あ、あの――」

「ここは、あー、えーと、おー……、そうだ、ここは崇高なる霊廟へと続く道！ おまえのような者が立ちいる場所ではないのだ！」

響子の話を一方的に遮り、死体は喋り続けた。

「わが名は宮古芳香、この地の番人であるぞ！ 私が番人なのだから、えーと、なんだっけ、あー、そうだ、私が番人なのだからおまえは去らねばならん！」

ただしおまえが我々の、仲間となるのなら、そうだ！ 仲間だ

！ 仲間！ 仲間！ おまえは我々の仲間となるためにこの来たのだろう！ ならばなれ！ 我々の仲間と！」

「そ、そんなのお断りよ！」

窮鼠猫を囓む、という言葉がある。

普段は臆病な山彦妖怪だって、追いつめられれば牙をむくのだ。今回は寺の外、頼るべき人も誰もいない。響子は即座に立ちあがった。

「仲間とならぬと言うのなら、とくと見せてやろう！ 蘇りし戦士の力を！ そして仲間となれ！」

先手を打ったのは芳香であった。

その伸びきった手の先が光ったかと思うと、そこから響子めがけて毒々しい色の弾を打ち出してきた。

これが速かったら脅威になっていただろうが、幸運にもその弾速は異常なまでに”遅かった”。

いや、遅すぎた。遅過ぎて、後続の弾がすぐ前の弾に追いついてしまう。そうして生まれる、圧倒的密度。

正面から避けるには、あまりに絶望的な弾幕。

（——でも、側面にまわれば避けられる！）

響子は即座に察した。

放たれた弾は起動修正できない。ならば低速弾の大群は、大きく

回りこめば避けるのはたやすい。

「おお、避けたかー!」

「貴方こそ、死体なら死体らしく墓石の下で寝てなさい!」

響子の反撃が始まった。

弾の媒質は勿論、山彦ならではの”大声”。

大きく息を吸い込むと、渾身の怒声をあげると共に、その”声”を弾に変えて射出した。

幽谷響子、生まれてこの方、寺の掃除とお経の空読みと弾幕練習は手を抜いたことはない。

そして、ばらまかれた弾のうちのいくつかが芳香に向かって飛んでいく。

「この程度の弾幕、怖くも何ともないぞ!」

その弾の隙間に芳香が入った瞬間、

(今だ!)

響子の弾幕の真骨頂がついに姿を現した。

まっすぐとんでいたはずの弾が突然、何もないところで一斉に反射しはじめたのだ。

「なにをう!?! まーがーったー!?!」

その軌道変化を読めない芳香。

当たる。当たる。弾が、弾幕が、次から次へと。

(よし、このままなら勝てるわ!)

射撃に忙しい響子は、言葉でそれを言うこともできないながらも、内心でそう呟いた。

当たる。当たる。弾が、弾幕が、次から次へと。

その破裂音が聞こえる度に、響子は勝利を確信しはじめた。

当たる。当たる。弾が、弾幕が、次から次へと。

その破裂音が聞こえるというのに、響子の心に戸惑いの感情が芽生え始めた。

当たる。当たる。弾が、弾幕が、次から次へと。

その破裂音が聞こえる度に、だんだん響子の顔色が曇っていく。

当たる。当たる。弾が、弾幕が、次から次へと。

その破裂音が聞こえるというのに、響子は少しずつ青ざめていく。さつきから何発当たったか、もう数えるのも面倒なほど当たっているはずだ。

なのに、なぜ芳香は、この目の前の敵は、いつこうに倒れる気配も見せず、それどころか痛そうな顔すらしないのだ。

まったく体力を削れていない。むしろ自分の方が疲れてきた。

これ以上、弾を連続では撃てない。響子はやむを得ずショットを中断した。

「……終わりか？」

芳香がにやりと笑った。

あれだけ弾を浴びたというのに、その表情には疲れも痛みも見えない。

それどころか、芳香の右腕に、毒々しい光が集まっていく。

「ならば、これで我々の仲間としてやろう！ 毒爪 『ポイズンレイズ』っ！」

そう叫ぶと、芳香はその右腕を力一杯振り払った。

どうも関節に不備があるのか、常人に比べればかなり振りまわした範囲は小さかったが、その手の軌道から弾が射出されるには十分であった。

しかも弾速は速く、疲弊しきった響子にとってこれは驚異的な物であった。

乱れた呼吸を整える間もなく、飛来した弾を避ける響子。

しかし体力も残り少ない今、限界がすぐそこまで来ている状況で、あまり集中力が長続きすることはなかった。

第一波の最後、目前に迫っていた弾を避けた響子、だが避けた先には遅れてやってきた弾が既に目前にあった。

（避け切れない！）

思わず目を瞑ってしまったが、その弾は幸運にも響子の右目のすぐ横を、髪を数本切り裂いて通り過ぎていった。

だがあくまで今のは偶然。第二波が来たら、おそらく勝機は、ない。

「うおー！ 肩がはーずーれーたー！」

ところがここで、曲がらない関節を無理に使ったため芳香も右肩から外れるというアクシデントが発生。

痛覚神経が死んでいる芳香にとっては痛くもかゆくもないが、響子にとっては貴重な隙となった。

来るべき第二波の到来時間が延びてできた隙に乗じて、芳香に背を向けると一目散に逃げ出した。

正直、勝ち負けは既にどうでもよくなっていた。

弾を何発当てても倒れることを知らない化け物とこれ以上戦っても、結局負けは目に見えている。

いや、『負け』だけでは済まされない、とんでもない事態が待っているのではないかと思うと、生きた心地がしないのだ。

「なおったー！ おーっと、逃、げ、た、なー！」

後ろから芳香が叫ぶ声がしたが、弾を撃ってくるかどうか確かめるために振り向くことはしなかった。

箒をその場に忘れてきたが、とりにいつてる余裕なんて勿論なかった。

ただ、響子はまっすぐ前に逃げるので精一杯であつた。

「はあっ、はあっ……こ、ここまで来れば……」

”逃げる時はきちんと寺がある方に逃げる”、響子はまた1つ大切な事を学んだ。

つまり、今回はまったくもって明後日の方に逃げ込んでしまったので、こうして今困っているのである。

とりあえず今は乱れた息を整えて、できるならしっかり休んで体力も補給したいところだ。

「……それにしても」

響子は墓石にもたれかかるように座りこんだ。

誰の墓石かは知らないが、ここにあつてありがとうと言ってあげ

たい。後で。

そして、座ると顔じゅうの汗を手でぬぐいながら、芳香の化け物つづりを回想しつつ呟いた。

「あの化け物はなんだったんだろう、芳香とか言ってたっけ」

「呼んだー？」

背後からした声に、響子は危うく死にかけた。それだけで心臓が止まるかと思っただくらいだ。

恐る恐る墓石から身を乗り出して後ろを見ると、そこには既に芳香が、響子の箒を握りしめて立っていた。

「で、出たあッ」

「おおっ、おまえの顔は見た事あるぞ、えーと、うーんと……」。

そうだ、思いだしたぞ！ おまえは墓場にこれを捨てていった悪い奴だ！ 崇高なる霊廟の傍にこのようなゴミを捨てるとは、悪い奴め！」

そう言っただけで芳香は、その持っていた箒を響子に突き出した。

逆に対応に困ったのは響子の方である。別にこの箒は捨てたわけではない。

ただ単に置いてきてしまっただけであり、返してもらえるのであれば、むしろありがたい。

だが芳香が『捨てた』と怒っているのであれば、今ここで無駄な戦いは回避したい。

「え、あの、捨てたんじゃないくて、忘れてきただけなんだけど……」
「忘れただと！ 忘れた、忘れた、そうか、おまえも忘れっぽいのか！ 私も忘れっぽいぞ！ 同じだな！ おお、同じ、同じ！ 仲間か！ 仲間、仲間！ さてはおまえ、我々の仲間だったのだな！」

？　そうか、私も忘れていたぞ！」

どうも話が勝手に進んでしまう。

しかし、響子にとってはむしろ都合のよい話である。

このまま仲間ということで黙って帰してもらえれば、それに越したことはない。

「あ、えっと、うん、仲間、仲間だからいじめないでね？」

ちよつときこちない口調になってしまったが、事態が悪化しないことを祈りながら、恐る恐る響子はそう言ってみた。

「おお、いじめるものか！　仲間は仲間だ！　そうだ、仲間だ！

仲間、仲間！　先ほどは乱暴して悪かったな、仲間だとは気づかなかったのだ！　仲間、仲間！　もう忘れないぞ、おまえは仲間だ！」

芳香は嬉しそうに声を張り上げた。

どうやら、敵意はないということを理解してもらえたということ
で、響子も一安心である。

「ところで名も知らぬ仲間よ！　おまえは何と言つ名前なんだ？」

「幽谷　響子」

「響子か！　いい名だ！　私はな、私の名前は、あー、えーと、あー、私の名前は、うーん、なんだっけ……」

芳香はそこでぴたりと止まってしまった。

どうやら考え中のようなのであるが、間違つても考えることを要する
ような問題ではないはずである。

下手すると妖精より頭が悪いという不思議な種族、死体。

そもそも芳香の名前は響子も知っている。ついさっき本人から教

えてもらっただけである。

「……宮古 芳香？」

あまりに困っているようだったので、響子はそつとフルネームを教えてあげた。

「おお、そうだ！ 宮古 芳香だ！ 名も知らぬ仲間、いやいや、響子よ、何故私の名前を覚えているのだ？」

「だってさっき教えてもらったばかりだよ」

「なんだとう！？」

芳香は、「さっき会った」という事実にたいそう驚いている様子であつた。

「名も知らぬ仲間よ、私はおまえを覚えていなかったというのに、おまえは私の名を覚えてくれていたのかー！」

おまえ、いい奴だな！ 気にいった、今日からおまえは朋友だ！ 朋友、朋友！ おお、これはいいぞ、朋友！」

勝手に朋友へと格上げされてしまった響子。

本当は芳香の頭が絶望的に悪いだけなのだ。

真実を話すと、先ほどの弾幕戦で芳香が放ったポイズンレイズ、あれを撃つ際に芳香の肩が外れるというトラブルが起きた。

その時だ。その肩が外れた衝撃で、芳香の記憶情報の3割前後が吹っ飛んでしまったのだ。芳香の頭は下手なハードディスクより衝撃に弱い。

だが、一方的とは言え朋友と呼ばれて、響子は悪い気分ではなかった。

「もう忘れないぞ！ 朋友、響子だな！ 響子、響子！ 朋友、響子！ いい名だ！ もう忘れない！ 覚えた、覚えた！」

だが、それでも芳香は何度も響子の名を口にした。

まるで山彦がオウム返しをするかのごとく、何度も、何度も。

それを見て、響子は無性に嬉しくなった。

芳香の頭が悪いのはここまでのやりとりで十分分かっていたが、それでもこうして覚えようとしてくれていることが嬉しかった。

それと同時に、最初に芳香が言っていた『仲間になれ』の意味がようやく分かったような気がした。

（もしかしてこの人、ずっと友だちが欲しかったんじゃないかな）

仲間とは、キョンシー化のことではなく、友だちのことだったのではないか、響子にはそう思えた。

確かに、墓場を見ても他にキョンシーはいない。それどころか、死人に口なし、誰も話し相手となりえる人もいなそうである。

もしかしたらずっと1人で寂しかったのかもしれない。

「今日はいいい日だ、朋友ができた！ そうだ、朋友が——おおっ！？」

突然、芳香は言葉を遮って明後日の方を見上げた。

「……主が帰ってこいと言っている。朋友、響子よ。今日はこれまでだ」

「主？」

響子が尋ねると、芳香はその明後日の方向を向いたまま答えた。

「そう、主だ。我々にも主がいる、主が誰なのかは今はいだせないが、それでも主がいるのだ。その主が帰ってこいと言っている。我々は帰らねばならん、だから今日はこれで分かれねばならんのだ！ だがおまえは朋友だ、何か困ったことがあったらいつでも来ると良い！ 朋友は大歓迎だ！ 私は大抵ここにいるぞ！ だから何かあったらここに来ると良い！」

私もそれまで、おまえの名を忘れず覚えておこう！ 朋友、響子！ 幽谷 響子！ 覚えておく、必ずだ！ また会おう、朋友！」

そう言い残し、芳香は飛びあがった。

颯爽と消えれば格好よかったかもしれないが、頭の回転が遅い芳香は、飛行速度まで遅かった。

「……朋友、か」

あまりに唐突な出来事すぎて、ほとんど芳香に喋らせてしまったが、朋友と呼ばれるのも悪くはない。

仲間と認識される前は怖かったが、（勘違いとは言え）仲間となつてしまえばノリの良い子である。

「また今度、話したいな」

次に墓場を掃除に来る時があれば、必ず話しに行こう。

響子はそう決めて、箒を持って寺に戻っていった。

「お墓に歩く死体？」

「そうなんです。とてもテンションの高い死体がいて、紆余曲折の末に友だちになりました」

寺に帰った響子は、このことを白蓮に言った。

もしかしたら寺のスタッフの一員ではないかと思ったのだ。

「聖様は会ったことはないのですか？」

「いえ、知らないわ。裏の墓地にいるのは幽霊くらいだと思っていたけど、歩く死体も住んでいるのね。初耳だわ」

「とても気の良い死体でしたよ。ちょっと怖かったけど」

「それにしても、歩く死体か……」

白蓮は少し難しそうな顔をして考え込んだのを見て、響子は声をかけた。

「聖様？」

「ん？ ああ、ごめんなさい。ちょっと考え事をしてしまってたね」

すぐさま白蓮はいつものにこやかな表情に戻った。

「それじゃあ、そろそろおやつの時間にでもしましょうか」

「やった！ はい！」

おやつとあって、響子は大喜びで居間に向かった。

そうして響子が部屋から出ていくのを見届けた後、白蓮は畳を見降ろして、腕を組んだ。

（……まさか、ね）

「聖様ー！」

おやつが待ち遠しくて仕方の無い響子の、浮足立った声が白蓮を呼んだ。

「ああ、はいはい、今行くわ」

白蓮は考え事をやめて立ち上がると、居間の方に向かった。

ところ変わって、とある大霊廟の中。

「もうちょつと頭を良くしてほしい、ですって？」

芳香は帰るや否や、いきなり主に対して『もつと頭を良くしてくれ』と願い出たのである。

「そーだ！ この悪い頭は不便すぎる！ 青娥娘々、私はもつと物覚えがよくなりたいぞ！」

「貴方がそんなこと言うなんて珍しいわね、芳香」

この唐突な申し出に、主たる青娥も戸惑っていた。

本来呼びだした理由はただの定期メンテナンスであり、それほど高度な術を行う予定はなかったのである。

「実は、今日、墓場で朋友ができた！」

「朋友？」

「そーだ、朋友！ 幽谷 響子！ いい奴だった！ 私があいつを忘れても、あいつは私を忘れていなかった！ いい奴だ！ 私もあいつを忘れたくない、忘れないと約束した！ だから、もつともつともの覚えが良くなりたいのだ！」

「……なるほどね、よく分かったわ。それで、その響子というのはどんな子なの？」

「チビで弱くて逃げ足ばかり速いけど、でも何故か知らんが仲間だな！ しかもいい奴だった！ いい奴、いい奴！ そうだ、朋友だ！」

「あらあら、芳香が食べ物以外をそこまで気にいるなんて珍しいわね」

青娥は微笑みながら、芳香の額の札に掌を当てた。

道教の術の1つであり、自分の意思をキョンシーに伝えるもつとも手っ取り早い術の1つである。

「……青娥娘々？ 頭よくしてくれるのか？」

「そうね、芳香」

そして、青娥はにっこり笑いながら、言った。

「その響子という子のこと、忘れてしまいなさい」

その瞬間、札を通じて芳香に電流の如く衝撃が走った。

先述の通り、衝撃には弱い頭である。意図的な記憶の破壊も容易いことなのだ。

「おおおッ！？　おお、おおおッ……」

「貴方は崇高なる霊廟を守るために蘇った戦士、戦士に朋友など必要ないの。貴方は主のことと、己の使命を頭に刻んでいればいいの。それに、貴方は私の忠実な下僕なのだから、私にとってどうでもいい者は、貴方にとってどうでもいい者でなければならぬの。分かるわね？」

「お、おおう、おッ、おおお……」

「だから、その響子という子については忘れてしまいなさい。名も、顔も、声も、思い出も、何もかも。いいわね？」

「……お、おお、うおおおお……」

術式を組み込み終わり、青娥は札から掌を外した。

芳香はしばらく濁った眼で限りなく遠方に目を向けたまま停止していたが、それも数分立つと、急に

「おお、うおおおおおおッ！」

と、声をあげた。

「あら、芳香、おはよう」

「おおッ、青娥嬢々！　おはようございます！」

「さあ、仕事の時間よ。貴方の使命、分かるわね？」

「我々は霊廟を守るために蘇ったのだ！」

「そう、その使命を己の胸に刻んで、お仕事頑張ってきてね」

「任せれおう！」

何事もなかったかのように、芳香は霊廟の外に向かって飛び立ち始めた。

「あ、芳香」

その時、青娥が芳香を呼びとめた。

「呼んだ？」

「ええ、呼びました。貴方、幽谷 響子って知ってます？」

「かそだに？ きょーこ？ 何それ、栄養あるの？」

芳香はいつもの調子で、何のためらいもなくそう答えたのであった。

十五話目：響子ちゃんと墓場の番人（後書き）

外付けハードディスク1TB（キョンシー未対応）

はい、どうも。もの覚えが悪い事に定評のある作者の兎です。
いよいよ神霊廟にはいりました。（響子が入っていなかったのか？
！）

かなりすつきりしない終わり方になりましたが、まあ、その。

個人的に神霊廟で最も好きなキャラである芳香。

今回初挑戦してみました。ここまで難しいとは思いませんでした。
まずあのポンコツ前頭葉からはじき出される言葉をどう書くかで偉く迷いました。

続いて、久々にやってみた弾幕描写。やっぱり修行が必要です。

極めつけはこの締め方（ニヤンニヤン

芳香と青娥、幻想郷の従者コンビの中でもかなり異色だと思います。
ボクはゾンビを飼ったことがないので分かりませんが、ゾンビって
どうなのでしょうね。

餌代はかかりそうですね。

今後の響子と芳香に目が離せ……ないのかな？

とにかく、事態は少しずつ加速しはじめました。

恐らくもう止まることはないでしょう（たぶんね

さてさて、次はどうしましょうかね（もう決めてある

まあ、なんとかします。たぶん。

か
ゆ
い

う
ま

十六話目：響子ちゃんの素敵なお部屋

「ふーしょーふーめつ、ふーくーふーじょー」

「ところがぎつちゃん、うらめしやー」

今日の参道掃除は響子と小傘の2人がかり。

響子が真面目なのはいつものことだが、小傘が不真面目なのもいつものこと。

いつものお務めということで響子は汗を流しているが、小傘としては他にやることもないので友人と一緒にいながら同じことをしているだけである。

「ふーぞーふーげーん、ぜーこーくーちゅー」

「おとといきやがれ、べらぼうめー」

掃除しているのは2人だが、効率が倍ではない。

小傘は響子が掃除したところしか箒で掃かないので、実質的な効率はいつもと大体同じである。

「……ふう、こんなところかな」

「およ、もう終わり？ 思ってたより早く終わったね」

「小傘が手伝ってくれたらもうちよつと早く終わったんだけど」

「手伝ったじゃん。相の手を入れるのとかさ」

そんなの”手伝った”のうち入るはずもない。

だが当の小傘は偉く充実感で満たされているようだったので、響子はこれ以上何も言わないことにした。

そこへ

「響子」

名前を呼ばれた響子が振り返ると、

「あ、星様」

珍しくお堂の入口まで星が来ていた。

普段から写経や瞑想といった修行に加えて布教のための外出と忙しい星と、こうして何でもない昼間の時間に会うこと自体が響子にとっては珍しく思えた。

「掃除御苦労さまです。ところで、大切な話があるのですが、今、少々時間をいただいてよろしいですか？」

「はい、大丈夫ですよ」

特に用事はない。掃除もたった今終わったところである。

響子がそう答えると、

「よかった。では、そう焦らなくても良いので、あとで聖の部屋の方に来てください」

星はにこやかに返事をし、寺の中に戻っていった。

珍しいこともあるものだと思いますながら、響子は小傘の方を振り返り、

「一緒に来る？」

と、何気なく聞いた。

だが、響子にとっては意外なことに、小傘はその問いに対して口を真一文字に結ぶと黙って首を横に振った。

「えっ？」

「……私を殺す気かあ!？」

「えええっ!？」

唐突に小傘につかみかかられ、響子もびっくり。

「ど、どうしたっていうのよ、いきなり」

「だって、あの旦那怖いじゃない」

変わった二人称である。

「旦那って、星様のこと？」

「まあ、うん」

その答えは、響子にとっては理解できるものではなかった。

確かに他の人と比べて、その忙しさ故に会う機会のない星だが、怖いと思ったことは1度もない。

誰に対しても謙虚で物腰丁寧な対応をとるその姿勢のためか、実質的下っ端の響子にとっても話しやすい相手である。

（その姿勢は、ほぼ万事高圧的態度を取り続ける部下のナズーリンに見習ってほしいくらいだ）

むしろ、事あるごとに尊大で高圧的な態度で無茶を押しつけてくるぬえの方がよほど怖い。

そう考えると響子には、ぬえにはなついている小傘がぬえやナズーリンといった尊大系女子（!？）になついているのが全くもって妙な話であるように思えたのであった。

「ナズーリンやぬえさんは？」

「うーん……、でもまあ、ぬえちゃんもナズっちも、そこまで怖く

はないかなあ。ナズっちは、ほら、あれはあれで可愛いし、ぬえちやんは――」

そこまで言うと、小傘は照れ笑いを隠しきれない様子で続きを答えた。

「――なんだかんだ言っていていい人だしさ」
「ほう、いいことを聞いた」

何の前触れもなく響いた、この場にいないはずのぬえの声。

小傘と響子はそろって度肝を抜かれたように驚いたが、さらにワッテンポ遅れてぬえ本人が空から急着陆で舞い降りてきた。

「ぬえちゃん、聞いてたの!？」

「まあね、途中から。それにしても、いやあ、良い後輩を持ったものよね。先輩冥利に尽きるわ」

そう言つて、ぬえは、とても良い笑顔で小傘の肩に手を置くと

「ついでだ。わらびもち買ってこい」

「ええっ!？」

小傘の顔がサツと青ざめた。

「あんたねえ、そりや褒められりや嬉しいわよ。でも嬉しいだけじゃ腹は膨れないのよ。言葉で示せたんなら態度でも示してみなさいよ、ほらほら」

「でも今、私、お金ないんだよ」

「金なんて神社の賽銭箱にいくらでも入ってるでしょ。巫女を締めあげて奪ってくればいいだけの話じゃない」

「そんなことしたら巫女さんに締めあげられちゃうよ！」

「ええい、妖怪様が人間を恐れてどうすんのよ、この根性なし！
さあ、行った行った！」

そうまくし立てられては、小傘も行くしかない。

しかし、行くも地獄、帰るも地獄。

とぼとぼと、途方に暮れた様子で1人静かに小傘は寺の門をくぐって守矢神社の方へ歩き出したのであった。

その様子をずっと見ていたぬえであったが、小傘が完全に行ってしまったのを見届けると、響子の方に向きなおった。

「何ばやばやしてるのよ。あんたもさっさと行きなさいよ」

「私も!？」

「当然じゃない、このスカポントン。最近自覚が薄いようだからもう1度言っただけあげけど、あんたも私の下僕ってことになってるのよ。だから、私が行けと言ったら速やかに行けっての。」

「言うか、行けって言われなくても気をきかせて『おかえりなさい、ぬえさん。お疲れでしょう、居間のほうにわらびもちを用意しておきました』くらいやってみなさいよ、まったく」

いつも通りの暴言である。

「で、でも、私、星様に呼ばれてるし……」

響子がそう言っくと、ぬえの表情がぴくつと動いた。

「ちつ……ま、まあ、そういうことなら仕方ないわね。じゃ、小傘が逃げ出さないよう見てくるとするかしら」

言動こそ軽薄なものであったが、それを言ったぬえ本人はという

と、あからさまに苦虫をかみつぶしたような顔をしていた。

この反応に、逆に響子が戸惑ってしまった。まさかぬえが思いとどまってくれるとは思ってもいなかったのだ。

もしさっきのところで『掃除がある』とか『お使いを頼まれた』とか言っていたら、恐らくぬえは『そんなの後回しだ』と言つてきたであろうことは想像に難くない。

すると、その分岐点になった点は何かと考えれば、思い当たる節は1つしかない。

「……そんなに星様って怖いのかなあ」

小傘の後を追うように寺を飛びだして行ったぬえの背中を眺めながら、響子はぽつりと呟いた。

それから響子はすぐに簞を片づけると、真っ先に白蓮の部屋へと向かった。

「失礼します」

と、響子が障子を開けると、部屋には既に白蓮と星が座して響子の到着を待っていた。

「お務めの最中、ごめんなさいね。ちょっとばかり長い話になるかもしれないから、まあ、まずは座ってもらえないかしら」

白蓮にそう促され、響子は言う通り2人の前に座った。

その時響子は、いつになく、どこことなく緊迫した空気が場に流れていた事に気づく。

それに加え、こうして星と白蓮”だけ”しかない場面に遭遇するのも初めてであったので、何が始まるのか内心ドキドキしていた。

「実はね、響子。貴方に聞きたい事があるのだけれど――」

とうとう白蓮が話を切り出してきた。

響子も固唾を飲んで、その話に聞き入る。

「――やっぱり新しい部屋の方が良いわよね？」

「はい？」

全く脈絡の読めない問いに、思わず声がひっくり返ってしまった響子。

とりあえず、題意がさっぱり分からない響子には、これ以外の返答はできなかった。

「聖、響子は今来ただけです。その質問では恐らく意味が伝わらないでしょう」

響子にはとてもありがたいことに、横から星が助け舟を出してきた。

その通り、今の響子にはまず今何の話題が話されているのか分からないのだ。

「部屋、欲しいですか？」

だが、星が出してきた助け舟もまた、乗りにくいものであった。まるで焼け石に水。相変わらず響子にとっては『なんのことですか?』としか思えない。

だが事態は、好転どころか悪化の一途を見せ始めた。

「星、それは誰だつて欲しいわよ。さつきもそう言うことで話をしてたじゃない」

「しかし聖、それはあくまで仮定の話。やはり響子を呼んだ以上、本人に前提部分から聞き直すのが筋というものではないでしょうか」

全くもつてよろしくないことに、星と白蓮の間”だけ”で会話が成立しはじめたのだ。

響子にとってはひとたまりもない。何故自分が呼ばれたのか、これでは何も分らない。

混乱の末に、とうとう響子も意を決し、

「すみません、最初からお願いします!」

と声を張り上げたのであった。

この反撃に、白蓮も星もいっぺんに話すのを止めた。そして

「……そうよね、流石に意味が伝わらなかったかしら」

「私達2人そろつて、少しばかり先走り過ぎたようですね」

白蓮と星は互いにそう言うつと、軽く咳払いをして再度響子の方に向き直つた。

「実はね、貴方がこの寺に来てから結構な日が経つたじゃない?なのに、まだ”貴方の部屋”という物がないでしょ?」

「あ、そういうことだったんですね」

ようやく響子は理解した。

確かに、今こうして3人がいる”白蓮の個室”もそうだが、基本的に寺の住人は皆個室を持っている。

聖輦船を命蓮寺に改築する際に、それぞれ個室を割り振った結果だ。

だがその時、響子はその場にいるはずもなく、当然その時は未だ誰からも認知されていなかった。

よって住民の中では唯一、響子だけが未だ個室を持っていないのだ。

寝る場所などは応接室を使っているが、これも所謂暫定措置状態である。

「そうなの。流石にそろそろ何とかしなくちゃとは思っていたんだけど、やっぱり貴方も個室欲しいわよね？」

「え、えーと、うーん……」

今まで当たり前であった環境が急に改善されると聞いても、まず普通は誰でも喜ぶというよりは驚く。

それが特に、本人にとって別に不満のない処遇であったとしたら尚更だ。

その上、響子には別段思う所があった。

「でも私、あの、自分の家、持ってるんですよ……」

そう、もう何日帰ってないかは兎も角、妖怪の山の奥地にある山彦の集落に、”響子の家”がきちんとあるのだ。

実は個室は無いが家持ちである響子。こうして住み込みで働く前はの家と寺を往復していたものだ。

なので、他の人にとって”個室”にあたるものが、多少離れた所

とは言え自分には既にある、と響子は考えていた。

「ああ、そうだったわね。でもやっぱり、こっちにいる事も大分多いように思えるし、あった方が良くないかしら」

そう言われてみると、確かにそうも思える。

なんにせよ、先述の通り”旧自宅”へは何日帰っていないかも分からない。

今のところ特に帰る予定もないため、もしかしたら個室があった方が便利かもしれない。

いやむしろ、今まで何かと応接室を暫定自室として使わせてもらってきたが、本来は応接室である。

今まで特に困った事態は起きた事は無いが、いざという時に使えるようにするためには自分がいつまでも占領し続けるのも聊か問題な気もする。

そう考えると『今のままでいいです』と言ってしまふのは白蓮達にとっても良い選択ではないように響子には思えた。

もし空室があるのなら、そこに転がりこんでしまった方が、きっと双方に都合の良い結果を招くはずである。

「もしもらえらしたらどんな所なんですか？」

響子が聞くと、白蓮は困ったように腕を組んで答えた。

「それなのよ。今ね、増築するかどこかの部屋を片付けるか迷っているの」

事態は明らかに響子の予想を大幅に越えていた。

先ほどは”空室があるなら転がりこむ”と思ったが、どうもそれどころの話ではなさそうだ。

未だ新入りの身なのにそこまでしてもらうのは、流石に恐縮である。

「だから貴方に始めに聞いたのはそういうことなの。新しく建てた部屋が欲しいか、それともどこかを片づけて開けた部屋が欲しいかって、ね。私はせっかくだから増築した方が良いんじゃないかと思うのだけれど」

すると、ここまで全部の説明を白蓮に任せてきた星が、

「しかし使える部屋を整理して使った方が、効率面で考えて良いように思えるのです。勿論、最終的にその部屋を使うのは響子なのでできるだけ貴方の希望には沿いたいと思っているのですが」

と言った具合に、ようやくここで2人の意見が割れた。

「それについてさっきまで星と2人で話をしていたね。結局『本人の話を聞いてみないことには解決しない』ってことで貴方呼んだのよ」

増築派の白蓮と整理派の星。恐らく響子が最初に感じた妙に張りつめた空気は、この2人の対立によるものであったのだろう。

響子の本音と言えば『別にそこまでしてくれなくてもいいのに』であるが、選択肢がそれしかないというのなら仕方ない。

それならせめてスケールの小さい方を。それが響子の弾き出した答えであった。

「じゃあ、あの、そんな大掛かりなことをしてもらうのも恐縮なので、今ある部屋の方でいいです」

その答えを聞いて、

「あら、そう？　まあ、貴方が良いと言つのならそれでも良いんだけど」

すっかり増築する気でいた白蓮は少々残念そうだった。

「でも、片づけて何とかなる部屋なんてあったかしら」

「兎も角、まずは寺中を検証してみましよう」

こうして結局、響子の意図に反するようにマイルーム計画はスケールアップしていくのであった。

寺の図面の写しを3人で眺めながら、相談すること一時間。相談と言っても実質的権力が大きい白蓮と星がメインの会話をするだけで、響子はあまり嘴を挟めなかったが。

「よし、おおよそ選択肢は決まりましたね」

星はそう言いながら、朱墨で図面の写しに丸をつけはじめた。勿論、響子の部屋としての選択肢になる部屋である。

「まずお堂すぐ横の宝物庫。宝物庫と言えば聞こえは良いですが、実際はただの物置ですので片づけければ何とかなるでしょう。」

次の選択肢が西端に位置する物置。こちらは完全に物置ですし、大したものは入っていません。使えるのなら使いたいです。

最終手段としては、応接室の改築ですね。そこまで頻繁に使うこともないので、繋ぎには良いかもしれません」

これが紆余曲折の末に残った選択肢達である。

もしこの場に一輪や水蜜がいたら『そんな面倒なことをするならぬえの部屋を与えれば良い話だ』と言っただろうが、今回はそんな非平和的意見は出ることもなく会議は終わった。

「では、早速見てみることにしましょうか」

「そうですね。さあ、響子、行きましょう」

「はい」

こうして図面を片手に、白蓮と星と響子は早速空き室巡りへと出かけたのであった。

1つ目、宝物庫。

「これは……」

「ちょっと低すぎます」

「……ですね」

所謂2次元の図面では分からなかった問題、天井の高さがここで3人の前に立ちはだかった。

元から物置として作られたここは、物置以外として使われることを想定しなかった結果、高さ1mの部屋となっていたのだ。

いくら小柄な響子でも高さ1mの部屋はきつい。

「すみませんが、ここはパスでお願いします」
「でしょうね。じゃあ次に行きましょうか」

2つ目、西端の物置。

「こ、これは……」
「いくらなんでも、幅が」
「……ですよね」

今度は明らかな図面ミス。どう見ても6畳くらいあるように描かれていた部屋が、扉を開ければ幅およそ60cmの縦長ルーム。畳の短い辺にすら満たないほど幅が狭いこの部屋は、いくら小柄な響子でもちよつと狭い。おまけに風通しも最悪ときたものだ。

物置に住もうと言う考えが間違っていたのかもしれない。

「すみませんが、ここもパスでお願いします」
「そうですね。しかし、困りました」

こうして1時間の議論の末に選抜された部屋は次々と破れ去っていった。

こうなると増築案の方が現実味を増してくる。

「やっぱり新しく建てた方が良いんじゃないかしら」
「うーん、そうかもしれません……」

一応最終手段の応接室は残っているが、やっぱり暫定措置である。ゆくゆくは増築という選択肢に収束していくのだろうか、と響子は事の成り行きを見守っていた。

その時、

「いや、待てよ」

星が突如立ち止まった。

「まともに使われておらず、そして響子が住むのに十分な部屋、もしかしたらあるかもしれません」

「あら、でもそれはさっき検証したじゃない」

「先ほどは考えるのを忘れていました。何せ”皆の個室”を真っ先に度外視しましたからね」

そう言つて星は早足で歩きだした。白蓮と響子もその後についていく。

そうして着いたのは、星の部屋の真向かいに配置されたナズーリンの部屋。

「ここ、ナズーリンの部屋よね」

「はい、そうです。ナズーリンは私の部下として、何かあった時にはすぐに対処できるようできるだけ近い場所が良いということで、ここを自室としたそうです」

それは星がナズーリンから直に聞いた話であつた。

そんな話をしながら、星はナズーリンの部屋の襖に手をかけた。

「しかし、実際ナズーリンは結構私の部屋にいる頻度が多いんです。寝る時ですら、何故か私の部屋の押し入れを利用する有様です。

彼女の私物も大体は私の部屋に置かれています。まあ、私としては不便に思ったことはないので別に良いんですが。

それは兎も角、彼女がこの自室に入っていくところも、この自室

から出てきたところも、私は未だかつて見たことはありません。

よってこの部屋は、居住スペースとして有効活用されていないということに他なりません。つまり、今この部屋はガラ空きのはず――

言うより早く、星は襖を開けた。

その途端、中から金細工や銀細工、壺や皿と言った財宝が雪崩の如く、襖の間から崩れ落ちてきたではないか。

その数の多い事多い事。『ガラ空きのはず』という言葉もむなしく、星は不意打ちに討たれる形でその雪崩れに巻き込まれて消えていった。

あまりに突然のことであつたので、響子も白蓮も反応がワンテンポ遅れてしまったが、

「星！？」

「星様！」

呼んだところで財宝が転がる音がするばかり。

部屋の中を覗けば、天井すれすれまでうず高く積まれた財宝の山。星の予測は半分当たっていた。確かにここは、居住スペースとは呼べない部屋となっていた。

そして

「ご主人様！」

と、財宝の持ち主であるナズーリンも雪崩れの轟音を聞きつけて、星の部屋から”飛びだしてきた。

それと同時に、財宝の山から右腕が突きだし、次に左腕が、そしてようやく星が這い出てきた。

「……ナズーリン、何ですか、この部屋は」

「いや、あの、ご主人様、これは……」

「貴方、私によくこう言いますよね、『身なりの乱れは心の乱れ、常に身だしなみに注意するように』と。」

確かにその心構えは間違っていないません、間違っていないませんがそれを言う貴方がこれでは紺屋の白袴というもの」

「違うんです、それはですね——」

「言い逃れは許しません。まあ、最近たるんできたと思っていたので良い機会です。たまには2人で少し話をしましょうか」

そう言うとき星は響子達の方に向き直り

「というわけで、聖、響子、すみませんが少しばかり時間をください。ナズーリンと話をします」

と言った。

一応笑ってはいしたが、なんとなく重い笑みであった。

星が怒った（怒ったと言って良いのかは確かではないが）のを見たのは響子は初めてであったが、これならいつそ怒ってくれた方が良いかもしれないと思った。

頬笑みに苦笑に照れ笑いと色々な笑みを使い分ける星だが、まさか怒った時まで重々しい頬笑みでいなくても、と。

「星、お手柔らかにね」

「分かってます、では失礼。さあ、ナズーリン、来なさい。続きがあります」

そうして星はナズーリンを連れて自室に戻っていった。

「響子、これはちょっと長くなるわよ」

「えっ？」

「星のお説教はね、半日で終われば短い方なの。元から説法を生業としているだけに話の引き出しがやたら多いのよ」

「ええっ！？」

白蓮にそう教えられ、響子は襖の奥で行われているであろう説教を想像していた。

一輪からの拳骨一発で終わってもらえる村紗は幸せ者なのである。

星の離脱から早くも4時間。

午前中から行われたはずの響子のマイルーム計画は一時停止を見せていた。

そもそも、もう午後である。

（星様、まだ話をしてるのかな）

そう思った響子はこっそり星の部屋の前まで来てみた。

ナズーリンが集めたガラクタが放置されているが、恐らくこの後掃除されるだろう。

少なくとも全部ナズーリンの私物である以上、響子が勝手に掃除することはできない。

それよりも様子見である。響子はこっそり星の部屋の襖を開けてみた。

中では相変わらず”説法”が続いていた。

星は響子に対して背中を向ける位置にいたのでよく分からなかったが、ナズーリンの方はよく見えた。

相当きつそうだった。何せもう4時間である。

「そもそもナズーリン、貴方だって子鼠を先導する身でしょう。群衆の前に立つという意味では貴方にだってリーダーシップが求められるのです――」

ところが、そこで立て板に水と言った具合に続いていた星の説法が突然止まった。

そして

「――響子、もう少し時間良いですか？」

ばれた。

そんなに大きく襖を開けたわけでもないし、物音だって立てないよう気をつけていた。

その上星は響子に対して背をむけているのである。それでずっと喋っていたのである。それではれた。

「は、はい！ すみません！」

響子は襖を閉めると一目散に逃げ出した。

少しだけ、小傘やぬえがなぜあんな態度に出たのか、響子は今なら分かるような気がした。

”良い人というのと怖い人というのは両立しないと思っていたけど、実際はする”、響子はまた1つ大切な事を学んだ。

結局、夕飯の時間になっても話が終わる気配は無かった。

そして響子がお風呂に入って、そしてあがってみると、

「……やっと来たか」

なんと、ナズーリンが待っていた。

「あ、お話終わったんだ」

「ああ、終わったよ。相変わらず話の引き出しの多さには驚かされるが、それにしても2時間話したら小休憩とかしてくれないとこっちの身が持たないよ」

そう言ったナズーリンは、どことなくやつれているようにも見えた。

「それはそうと、あれからあの部屋を掃除したんだ。物欲って奴は不思議でね、それまでどうしても手放したくなかった物でも、いざ片づけるとどうでも良くなるものなんだね。」

で、本題はここからなんだが、ついでにあの部屋も君に譲るよ」

「え？ いいの？」

「ま、私だって使ってたしね。それに今までは黙認状態だったが、ようやくご主人様の部屋に長居する許可が下りたんだ。これでやりやすくなるよ」

「本当？ ありがとう」

響子がそう言うと、ナズーリンは決まり悪そうに、

「何にせよ、今回の一件はご主人様の計らいだ。その言葉は私にじやなくてご主人様に届けてあげるんだな」

と言が残して去っていった。

(……相変わらず素直じゃないわね)

響子はそう思ったが、部屋ももらったことだし口にはしないことにした。

こうして得た自室。

「おー、いざ自分の部屋をもらってみると、なんだかお寺全体が広く見えるわー」

新生活を迎えて、寝間着姿でウキウキ響子。

必要な物をそろえるのは明日やるということらしい。

「じゃあ、ここに筆筒とか来るのかなあ」

本当にナズーリンは家具の1つも置かなかったようで、部屋はガランとしていた。

「あ、もしかしてもしかすると、ここに布団とかがあったり――」

そう言って響子が押し入れを開けると、

「……やあ」

あろうことが、ナズーリンが中でせつせとロッドを磨いていた。

「……なんているの？」

「物欲って奴は不思議だね。それまでどうしても手放したくなかった物でも、いざ片づけるとどうでも良くなるものなんだが、それまでどうでも良かったものでも、いざ手放してみると遅れて愛着が湧いてくるものらしい。」

君だってこの部屋以外に、山に住居を持っているんだろう？　だつたら私も、ご主人様の部屋に長居する権利の他に、元の部屋に居候する権利くらいあっても良いはずだ。

君と深くかわる気はないし、布団は下の段に入っているから、それで寝るといいさ。じゃあおやすみ」

ナズーリンは響子のことを一瞥だにすることなく、せつせとロッドを磨き続けていた。

十六話目：響子ちゃんの素敵なお部屋（後書き）

早苗「どうしてこんなことしたのかな？　かつ井あげるから正直に言ってごらん？」

小傘「わらびもちが、買ったかったんです」

はい、どうも。自分の部屋なんて持った事がなかった、作者の冤です。

今回は命蓮寺内部について色々と進展した話にしたつもりです。まず我らが響子がお部屋をゲットできたという進展。

続いて星や小傘やナズーリンなどの人間関係についてメスをいれられたという進展。

個人的には有意義な回にできたはず。はい。

神霊廟方面への進展は無かったのですが、まあ近いうちに書きたいです。

たぶん。

最近忙しいので更新があいてしまいましたが、無理しない範囲で次の話を書きたいです。

まあ、気長に待っていただければ幸いです。

十七話目：響子ちゃんと押入れのナズ君（前書き）

前回のあらすじ

紆余曲折の末に自分の部屋をゲットした響子ちゃん。

色々あって鉄砲玉として守矢神社に送り込まれた小傘ちゃん。

一度は部屋を譲ったものの、やっぱり勿体なくて押し入れに住み着いたナズ君。

それぞれの夜が始まる。（全部十六話目参照）

十七話目：響子ちゃんと押入れのナズ君

「ああ、やっぱり温かいご飯はうまかとです」

夜の守矢神社で、小傘はカツ丼を堪能していた。

その向かいには東風谷早苗。カツ丼を与えた張本人である。

「傘もカツ丼食べるんですね」

「そりゃ、ま、あたぼうよ。お腹すいてりゃなんだって美味しいって言うじゃん」

「ふーん」

そもそも、このカツ丼自体がわけありの品である。

本日守矢神社ではいつものように神奈子と諏訪子と早苗の3人で夕食を食べる予定であった。

ところが、夕方頃になって妖怪の気まぐれにより唐突に宴会が勃発。

どうせなら神様も来てくれという急なお呼ばれが舞い込んできた。ただ酒が飲めるなら、ということ出かけようとした神奈子と諏訪子であったが、もう夕飯の支度をしてしまった早苗は不服であった。

『あんたら、私が作った飯より酒の方が大事か！』と、口にはせず態度で主張したが、帰ってきたのは『ああそうだよ、文句あつか』という、言葉ではなく行動で示された返事であった。

つまるところ、神奈子も諏訪子も出かけてしまったのである。

普通の夫婦なら『もう知らない！ もう実家に帰らせていただきます！』と言いたくなるくらい早苗は怒っていたが、残念なからここが実家であることは言うまでもない。

ますます面白くない早苗は1人で3人分の夕飯、即ちカツ丼をた

いらげようとしたが、いくら成長期の喰い盛りとは言え2人分が限界である。

どうしようと思考に暮れていた最中、やってきた賽銭泥棒、小傘。もう何でもいいや、ということで早苗はその”残りご飯処理係”を小傘に押しつけた、ただそれだけの話にすぎなかった。

別にぬえに鉄砲玉扱いされたことへの同情心などと言った物は欠片もないし、そもそもそんな裏事情を知るよしもない。

「今度はフグ鍋でも食べに来ます？ 死ぬかどうか見てみたいので」
「お腹壊すんならいいや」

小傘にとっても、別に神奈子や諏訪子の動向なんて知るよしもない。

今までの経歴を簡単に辿れば『賽銭盗みに神社に来たら、捕まっただけカツ丼出てきた』くらい単純にしかとらえていない。こうしてわけありの食卓は穏やかに進もうとしていた。
ところが、そこへ

「なんか帰りが遅いと思ったら」

と飛びこんできたのは鉄砲玉の送り主、ぬえ。

その登場だけで、小傘の動きがピタツと止まる。

「げっ、ぬえちゃん!？」

「なに人間なんかに飼いならされてんのよ」

キツとぬえにきつく睨みつけられ、小傘は震えあがった。

だが皮肉にも小傘の素体は傘、すなわち妖怪化する前から人間に飼いならされる運命だったのである。

（だが誰にも飼ってもらえず野生化した結果がこの有様とも言え

るわけだが)

しかしその時、ぬえの視線は即座に小傘から、その手に持っているカツ丼へと移った。

カツ丼、豚肉、動物性たんぱく質、菜食主義者にして命蓮寺の炊事係である一輪に頼っていてはまず口にできない貴重食材、肉、肉、肉！

最後に食べたのは地底の呑み屋、地上に出てからというもの1度も口にした事はないお肉。

迷う余地もなく小傘からカツ丼をひったくり、考えるより早く肉を口の中にかきこんだ。

「ああつ、まだ私2口しか食べてないのに！」

「やかましい、こっちは腹減ってんのよ！」

こうして、ほんの数秒でぬえはカツ丼を完食した。
だが、その数秒で得たものは大きかった。主に満足感。

「エイリアンもカツ丼食べるんですね」

「いや、エイリアンじゃないし」

「まあ食べていってくれるんなら傘だろうがエイリアンだろうが何でも良かったんですけどね」

その喰いつぷりに、早苗すらも一時は啞然としてしまったが、当のぬえは周囲の目など気にしていない様子であった。

「あー、美味かった。……よし、小傘」

「何？」

「減点要素が何か色々あったけど、今回は私が御馳走にありつけたことに免じて特別に許してやる」

「やった！ 許された！」

思わず万歳して大喜びの小傘。

ぬえからの無茶ぶりに対して及第点を得たこと自体が久々なので、それはもうめでたいことなのである。

「あら、よかったですねー」

雰囲気に合わせて、早苗もお祝いの言葉を投げかけた、が、直後に

「まあ私は許すとは一言も言っていないんですけどね、この賽銭泥棒」

そう言い加えてほほ笑んだ。

大喜びしていた小傘の顔から一瞬にしてサツと血の気が引いた。

そして凍りつく場の空気。気まずい沈黙。

「そ、そう。じゃ、後は泥棒と巫女の2人で何とか和解してよ。私は帰るから」

最初に動いたのはぬえだった。

厄介事に巻き込まれるくらいなら、と真っ先に離脱を試みたが

「ぬえさん、ぬえさん、貴方もですよ。どうせ貴方も一枚噛んでるんでしょう?」

「そうだよぬえちゃん、温かいご飯を横取りしておきながら私を置いて逃げるなんて卑怯だよ!」

そうは問屋が卸すはずもなかった。

「……仕方がない、私に喧嘩を売るってことはそれなりの覚悟があるんでしょうね」

さきほどのそそくさと逃げようとしていた態度とは一転、ぬえは早苗を軽く睨んだ。

「ええ、まあ」

しかし場馴れした早苗がこれくらいでひるむはずもない。

「じゃあ聞くけど、今日は何枚持つてるのかしら？ スペルカード」

「ふたつほど」

「ふん、たった2枚で戦おうなんて、私も安く見られたものね」

嘲笑を浮かべながら、ぬえはポケットから自身のスペルカードを取り出した。

「言うておくけど、肉喰った後の私は強いわよ」

枚数にして10枚、それを一気に広げて出したのだから圧倒感がある。

「おお、流石ぬえちゃん。今日もたくさん持つてるねえ」

思わず小傘は感嘆の声をあげたが、肝心な早苗はと言うと、取りみだす様子もなく

「あらあら、でも数の勝負なら負けませんよ？」

と、袖からスペルカード24枚を取り出して見せたのであった。その24という破格の数に

「ちょ、あんだ2枚しか持ってないってさっき言ったじゃないの！」

ぬえは反射的に抗議の声をあげたが、

「え？ スペルカードってダース単位で数えるものじゃないんですか？」

早苗の返答はぬえの予想から思いつきりずれたものであった。
今度はぬえの顔からサツと血の気が引いた。

一方その頃、命蓮寺の”響子の部屋（新）”では、と言うと。

「ナズーリンは寝ないの？」

「君と違って私は夜行性なんだよ」

布団を引き終わった響子が、もぐりながらナズーリンに尋ねた。

そのナズーリンはと言うと、やっぱり押し入れの中でロッドを磨いていた。

響子がすっかりナズーリンの方を向いているというのに、ナズーリンはロッドを磨く手を見つめて一向に響子と視線を合わせようとしない。

「ねえ、ナズーリン、そこ狭くない？」

「狭い方が落ち着くんだよ」

「ふーん、変なの」

「変な君には言われたくない」

相変わらずナズーリンの言葉は一言一句棘があるが、響子ももう慣れてきた。

”そんなものなんだ” と思ってしまえば割と簡単に受け流せるものだと、響子もだんだん分かってきたのだ。

『いつも無愛想と分かってしまえば何ら怖くない』、ちょうど『普段の姿から優しいと思っていたら、怒るととても怖かった』の逆である。

ナズーリンが前者であることは前からうつすら分かっていたが、星が後者だったとは今日知ったばかりの衝撃の事実。

それは兎も角、響子には、ナズーリンの喋り方について口調とは別に不服に思う所があった。

今もそうだが、話がまったく続かないのである。

何かを聞いてもナズーリンは端的でぞんざいな言葉ですぐに答えてしまう。

それでいて、彼女自身は響子に何も聞いてこないのだ。話が続くはずがない。

日頃から無愛想で会話を交わす機会すらあまりないナズーリンだが、こうしていざ話してみるとかえって無愛想さが際立ってしまう。

「ねえねえ、ナズーリンはいつからそんな話し方なの？」

「言葉を習得した時からだよ」

「じゃあ、その時からずっと、そんなに素っ気ない話し方なの？」

「悪いかい？」

「いや、悪いわけじゃないけどさ……」

ナズーリンは実に素っ気ない態度で実に素っ気ない返事をする、研磨布から手を離れた。

そして何をするのかと思いきや、飴（それも棒付きぐるぐるキャンディである）をくわえ、また研磨の作業に戻っていった。
勿論この数アクションの間、1度も響子の方を見ていない。

「それ、美味しい？」

「まあね」

ナズーリンが喋るのに合わせて、飴の棒が上下に動く。
ましてくわえている本人がほとんど動かないので、どうしてもそちらの方に目が行ってしまう。

「今それ食べて、明日の朝ごはん食べられるの？」

「愚問だね。明日の朝食まで待てないから今食べてるんじゃないか」

「そんなにお腹減るの？」

「当たり前質問をしないでくれ」

そうして、再び訪れる静寂。

結局そうだ、この2人だと響子が何か聞かない限り音は何も流れない。

言わば壁とキャッチボールしているようなものだ。自分がボールを投げれば帰ってくるが、投げなければ何も起こらない。

そんなナズーリンの態度に、とうとう響子もどうにかしたいという思いが積もってきた。

「……ナズーリンも何か私に聞いてよ」

「何も聞くことなんてないさ、君にはたいして興味もないし」

だが帰ってきたのは、この上なく直球で無愛想な返事。

壁に投げて帰ってきたボールが顔面に当たったような精神的ダメージ。

「ねえナズーリン、貴方はどうしてそんなに、ちょっと言葉は悪いけど、ひねくれてるの？」

「私は普通だよ。君がひねくれているから相対的にそう見えるだけだ」

「いや、それは絶対ない」

そんなことがあつてたまるか、と響子は思った。

百歩譲って自分がひねくれているとしても、客観的に見てナズーリンはひねくれている。

ここだけは響子も譲るつもりはなかった。

「だってナズーリンはどう見ても無愛想だよ。絶対がさつで無愛想に見える」

「悪かったね、素っ気ない上にがさつで無愛想な奴で」

「……そこで開き直られるとこっちが困るんだけど」

「君の我儘に付き合う気はないよ」

しかし、どうあがいても口はナズーリンの方が一枚も二枚も上手であつた。

響子は何を言おうとも、必ずナズーリンは即答してくる。それも返事に困るくらい無味乾燥な答えだ。

「ナズーリンは誰に対してもこんなに素っ気ないの？」

「見てれば分かるだろう？ ご主人様にそんな対応するわけにはいかないさ」

「いや、そりゃ見てれば分かるけどさ。むしろ星様相手の時だけコロツと態度変えるのやめようよ」

「君とご主人様を同格に扱え、と？ そんな馬鹿な要求が通ると思っっているのかい？」

「そこまで言わないけどさ、いくらなんでも裏表が激しすぎるわよ。そんなだと、この先苦労するよ?」

「この先って?」

「そりゃ、あれよ。人生は長いって言うじゃない」

響子がそう言った瞬間、ナズーリンの手がピタツと止まった。

そして、やっと本日初めてナズーリンが顔を上げ、響子の方を見た。

「君に説教される気はないよ。それとも、君にとって私は何歳くらいに見えているんだ?」

それは、やっぱり本日初めてであるが、ナズーリンが自分から響子に聞いてきた問いであった。

どこで何のスイッチが入ったのか分からなかったが、響子とはとりあえず率直に、日々思っていた事でもある、

「え? だってナズーリンって私よりは年下でしょ、絶対」

と言ってしまった。

今まで口にごそしなかったが、ずっと響子はそう思ってきた。

見かけが子供っぽいのは響子自身もそうだから仕方がないが、ナズーリンの場合、中身もどこか大人げない。

言っていることだけは立派に見えるが、それがかえって子供が背伸びしているようにも見えてしまうのである。

ナズーリンもナズーリンで自分のことについてあまり語りたがらない。そもそも会話したがない。

諸々の要素に加えてナズーリンから放たれる卑近オーラが、響子にそういった見方を植えつけてしまったのである。

ナズーリンはしばらく響子の方をジッと見ていたが、それから

「想像に任せるよ。君もそろそろ寝る時間だろう、邪魔は消えろするよ」

と言つて、ロッドと研磨布を抱えて部屋から出て行ってしまった。

「……ひょっとして凶星だった？」

後に残された響子はそう呟いたが、この間違いを指摘する人は誰もいない。

幼き山彦、幽谷 響子、61歳。まだまだ若い。

「どうしました？ まだ1・5も残ってますよ。もちろんダース単位で、の話ですが」

「ええい、いちいちダース単位にするな、面倒だ！ 算数苦手なんだよ！ 九九覚えてる最中なんだから！」

守矢神社前の参道。

左の二ソックスと右肩部分の服が吹っ飛んで、自身も体力がすり減って、色んな観点から見てもかなり満身創痍なぬえ。

スペルカードは10枚中9枚使った。残り1枚だが、早苗は彼女が言っていた通り1・5ダース（勿論18枚）もある。

小傘はというと、地面に上半身が刺さったまま動かない。拳句の果てには

「もう駄目だあ、私はここで死んじゃうんだあ」

などと弱音を吐き始めた。

「おい、小傘！ あんたもう少し頑張りなさいよ！ スペルカードもう1枚くらい持つてるんでしょ！」

「スペルカードはあるけどガッツがありません……」

「また抱え落ちか！ くそっ」

地団太を踏んでも事態が好転するはずもない。

それはぬえもよく分かっていた。分かってはいたが、この状況のせいでどうしても苛立ちを抑えられずにいた。

「あらあら、仲間割れはいけませんよ」

早苗にからかわれ、

「死ぬ前に1度でいいから、大通りのショーウィンドウに飾られたかった……」

小傘はわけの分からないことばかり眩き、ぬえのむしゃくしゃとした感情は高まるばかり。

「あーもう、吹っ切れた！ かくなる上は――」

そう言つと暗雲を辺りにばら撒いた。当たり判定の無い、所謂目くらましである。

だが、相手が悪い。

「今更そんなもの効きませんよ！」

そこは風祝の早苗、いともたやすく風を吹かして暗雲を吹き飛ばした。

しかし、もうそこにぬえはいなかった。

どこに行ったかと思いきや、その一瞬のすきに乘じたぬえは、地面に刺さった小傘を引き抜き抱えて、そのまま一直線に山を降りはじめた。

とどのつまり、敗走である。

「ぬえさーん、まだ18枚も残ってますよー」

早苗が呼び掛けると、

「うつそ、1・5ダースって16枚じゃなかったの!？」

「18枚ですよー」

「ツケといて、じゃなかった、覚えてろ、こん畜生！」

負け犬の遠吠えを残し、ぬえは闇夜に消えていった。

さて、舞台を戻して命蓮寺。今度は星の部屋。

「ご主人様」

ナズーリンは偉く不機嫌そうに、写経に勤しむ星の向かいに座った。

「なんですか、ナズーリン。よほど嫌な事があつたと見えますが」
「ご主人様、私はそんなに貫禄がありませんか？」
「……はい？ いや、まず何があつたのか、そこから教えてくれませんか？」

唐突な問いに、星とは言えど流石に経緯を推察できるはずもなく、聞き返した。

「いやそれが、響子の奴がですね」
「ああ、姿が見えないと思つたらそちらの部屋にいたのですね」
「そこはどうでもいいんです。それで、響子が色々面倒なことを聞いているから、適当に返事をしていたんですよ」
「ナズーリン、貴方は少し人当たりがきつすぎます。話すならしっかり相手をしなさい。そもそも貴方の振る舞いは時として——」
「ご主人様、説法は後で聞きます。ですからまず私の話を聞いていただきたい」

ここで止めないと昼間の二の舞である。

星も、今回はナズーリンの言うことに理があると見て、話すのを止めた。

「で、ですよ。そのうちだんだん態度がでかくなって行くから、聞いてやっただんです。私が何歳に見えるのか、と」
「それで大分下に見られた、とそういうわけですね」
「下も下、よりによってあいつより年下に見られたんですよ！ あんなひよっ子の年下に！」

正直、響子の前では隠していたが、ナズーリンにとって『年下でしょ？』は結構なショックだった。

うわべは冷静に取り繕ったが、誰かに話さないと収まらないこの気持ちを、結局は最も話せる相手である星にぶつけに來たのである。

「大体あんな百も生きてない小娘に、なんで年下扱いされなくちゃいけないんですか。

確かに体格は小さいかもしれませんがね、こう見えても響子と比べて私は年上、それも20倍は生きてるんですよ！ 聖より年上なんですよ！

なのにさ、小傘の時もそうですけど、なんで私ばかり下に下に見られるんですかね。ご主人様は威光の塊のように見られるのに」「まずその、刺々しい話し方から何とかすれば良いと思いますけどね。

しかし、貴方は私を”威光の塊”と例えましたが、私は貴方のように誰からもすぐ親しげに話しかけてもらえる方がよほど良いと思えるのです。

どうせ妖怪に歳などあまり関係はありますまい。今この幻想郷が、年上が偉いと言った古い風習がまかり通る世でもありますまい。

ならば貴方のようにすぐ溶け込める、そういった親しみやすさの方がよほど重宝すると思いますよ」

そう星に諭されても、ナズーリンはすぐ気持ちの整理がつかなかった。

今までの寺の住人は（通りすがりの小傘を除き）大体は千年クラス妖怪だったから、年齢をあまり気にすることはなかった。

しかし今度飛びこんできた響子は百にも満たない幼年クラス。流石に歳の差は無視できないほど深い。

なのに、こうしていつの間にか年下扱いされベタベタ接されることに、どうしてもナズーリンは抵抗があった。

「ご主人様は下に見られた事がないからそんなことが言えるんですよ」

それを聞くと、星は苦笑しながら

「ナズーリン、貴方はそう言いますけどね」

そう言いながら筆を置いた。

「避けられるというのも、結構堪えますよ」

話は昼間に遡るが、星が部屋探しをするため響子を呼びに行った時。

その時、響子の傍には小傘がいた。そして自分が響子の名を呼んだ、その瞬間。そこからの小傘の動きは速かった。

目をそらしつつ、そーっと後ずさりをしながら、明らかに自分と距離を取ろうとする小傘の動きを見て、星は思った。

『ああ、自分、避けられてるんだな』と。

あれは来た。あれは効いた。あれは堪えた。

別段小傘に対してきつく当たったことはない、それどころかまともに話したことすらない。なのにこの仕打ち（！）である。

ナズーリンは威厳が大事だと事あるごとに主張するが、あまりありすぎるのも考えものなのだ。

「だから、難しいところですが、貴方はその現状を維持しても良いと思います。言うまでもなく、その人当たりのきつさをもう少し穏やかにするに越したことはないはずなんですけどね」

「そんなものですかね」

「……立場が逆ならちようど良かったのですけどね、私とナズーリ

ンが」

「私にご主人様ほどの器量はありませんよ」

「ほら、またそうやって私を持ちあげる」

「事実ですから」

ナズーリンは顔を伏せると、響子の部屋にいた時と同じように口ツド磨きに戻った。

それを見て星も再び写経の方に戻っていった。

ナズーリンが話をしながらないのは、この場のような沈黙空間が好きだから、というのも1割くらいはあるかもしれない。

さて、その響子かというと。

ナズーリンの悩みなど知るはずもなく

「それにしても、この部屋、何に使おう」

などという事を考えていた。

大した私物を持っているわけでもない響子にとって、現状を説明するのに『宝の持ち腐れ』ほど似合う言葉はない。

「ふあああ、明日考えればいいかな……」

いい加減眠くなってきた。

瞼が自然と閉じ、ゆっくりと意識がフェードアウトしていくの最

中、ふと響子はあることを思いついた。

「そうだ、芳香を呼んであげよう」

寺の裏にある墓場の住人、キョンシーの芳香。

思い出して見れば、たぶん自分が寺の住人であることは言っていなかったはずだ。

こんな立派な寺の、その一室に案内してあげればきっと芳香も驚くに違いない。

（よし、明日はお墓を掃除に行こう、そして芳香を連れてこの部屋に戻ってくる事にしようつと）

そんな明日の計画を立てながら、響子は眠りについた。

十七話目：響子ちゃんと押入れのナズ君（後書き）

でもその芳香は、もう……

はい、どうも。作者の、後輩によく舐められた兎です。

今となつては懐かしい過去ですがね。はい。（どうでもいいや

今回は十六話目の後日談的意味合いを兼ねて、響子とナズーリンの歳の差について結構触れました。

少しずつボクの中で皆さん何歳になつてるのかぼんやり明らかになりつつありますね。

ずっと前に船長さんについても触れた気がするし。

個人的な考えですが、やっぱり妖怪は百年物からが本番だと思います。

付喪神ですら「九十九神」との別称があるように、百にも満たないうちは

ペーペー扱いされても仕方ないんじゃないかと。

まあ、これは作中で星様に「古い考え」とバツサリ切り捨ててもらいましたけどね。

『お婆ちゃんじゃなくてお姉さんよ』というシーンはよく見かけるので、あえてその逆である『こう見えても君よりは年上なんだよ』がやりたかった、というのもあります。

要約すると「背伸びしたがるナズーリンは可愛い」でしょうか。

ぬえ&小傘は当初全く続きを書く予定はなかったのですが、いい続きが思いついたので急遽書きました。

なんだかんだ言つて最後は小傘を連れていつてくれる辺りがぬえちゃんだと思えます（ただし算数には弱い。

それらも含めて、今回は

「響子 ナズ、ナズ 星、小傘 めえ」

の間柄を結構書けた気がするので、今回も充実したかな、うんうん。

さて、待っててくれた人にとってはお待ちかね、

次はいよいよ神霊廟ストーリーに触れていきたいと思います。

ストーリー的にも重要な回になるかもしれませんが（少なくともこの話よりは）。

そういう意味で、次の話はいつそう気合を入れて書きたいと思います。

たぶん。

十八話目：芳香ちゃんは誰の手に（前書き）

前回のあらすじ

自分の部屋をもらえた響子（十六話目参照）。
あまりの嬉しさに、友だちである芳香（十五話目参照）をお寺に招待しようとするが（十七話目参照）。

十八話目：芳香ちゃんは誰の手に

さて、真夜中。

昼行性の響子が寝静まった頃、すなわち夜行性の妖怪が本格的に動き出す時間帯。

寺とは少し離れた、とある大霊廟の内部。

そのうちの青娥の部屋にて、時に部屋の主である青娥が鏡を見ながら髪を結っていた時のこと。

「青娥娘々！」

名を呼ばれた青娥はであったが、どうせこの霊廟にいるのは自分以外に1人しかいないので、振り向かなくても誰かは分かる。

なので青娥は振り向くこともなく、鏡を通して背後を見ると、部下である芳香が立っていた。

その手に歯ブラシを持って。

「幽霊を食べたら歯に詰まって気になるのだ！ 取ってくれ！」

そう言つて、芳香は歯ブラシを青娥の方に突き出した。

普通なら『自分で磨け』と言いたくなる光景だが、芳香の場合は話が少々違ってくる。

自由に動かぬ関節に支配された芳香にとって、手に握った歯ブラシを口元に持つてくる事は無理難題なのだ。

そこは青娥が一番よく分かっている。

とは言えこの時、青娥は機嫌があまりよろしくなかった。

「芳香、そろそろそれくらい1人でできるようになりなさい」

青娥がつっけんどんにそう言つと、

「りょーかい」

と、芳香は気の抜けたような返事をし、腕を曲げようとし始めた。しかしそこはキョンシー、頑固な関節は一向に曲がる気配を見せない。

そしてその末に、ボキツと鈍い音と同時に、芳香の右肘は本来関節が曲がらない真下へだらりと垂れたのであった。

芳香はしばらくの間、重力にまかせてぶらぶら揺れる自分の右腕を眺めていたが、その後ようやく何が起きたのかを理解したよう

「うおおお、折れたー！」

と驚きの声をあげた。

それは、自分の腕が折れたという事実の割にどこか他人事のようであった。

実際、芳香は痛みを感じない。青娥がするようにカスタムしたのだから当たり前だ。

なので自分の腕が折れても他人の腕が折れても、その事象の重さは大して変わらないのである。

むしろ『部下に歯を磨くよう命令したら腕を折ってしまった』という事実、青娥の方が呆れる始末であった。

「分かった分かった、磨いてあげるからこっちに来なさい」

とうとう青娥も櫛を置いて、芳香を呼び寄せた。

芳香は嬉しそうに青娥の所に寄ると、口を開けた。折れた右腕など意にも介していないようであった。

放っておいても芳香は虫歯になることはない。風邪をひくことも

ない。

あらゆる人体を蝕む細菌より芳香の体組織が持つ毒素の方が強い
ため、そうした外部の侵入者は悉く死滅してしまう。

つまりこうして歯を磨いてやっているのも、芳香本人が気にする
かどうかは別とすれば、本来は全く必要ないのだ。

なので放っておいても、食事さえしつかり摂取させれば、芳香が
健康被害を被ることはない。青娥がそうカスタムしたから当然であ
る。

唯一の誤算はその毒素が脳機能に与えたダメージが想定していた
以上に大きかったことであつたが、この点は『与えられた命令に関
すること以外について思考しない下僕』という青娥が立てた指針と
一致していたため、事実上無視されることとなつた。

つまるところ、芳香は青娥にとって理想の下僕だったのである。

ただし、それも”つい先日までは”という注釈付きの代物となつ
てしまつたが。

（あれから、目立つた異常は起きてないようね）

芳香の身の回りの世話（着替え、歯磨き、入浴、お肌の手入れ、
肢体切断や開腹手術を伴うメンテナンス、その他もろもろ）をして
やるのが青娥の日課でもあつた。

（日課と言いながら実際は週1だったりするのは、青娥自身が義
務感など微塵も感じてなく、ただの暇つぶしと化している現れでも
ある）

何はともあれ、そうした世話を通じて芳香の思考パターンをほぼ
完全に把握していた。

思考パターンと言っても頭が弱い芳香の思考は単純きわまる物で
あつたので、理解するのに時間はたいして必要ではなかつた。

芳香にとって人物の識別力テゴリは『自分』、『主』、『主の仲
間』、『敵または餌』の4つに分けられる。

前者2つは芳香自身と青娥で固定として、それ以外はまず『敵ま
たは餌』に分類される。

その中で青娥が”食べてはいけない”と命令した物のみが『主の
仲間』に分類される、そういったシステムを取っているのだ。

簡約すれば、芳香にとつての仲間は青娥にとつても仲間であるは
ずなのである。

先日起きたエラーはこれを破る酷い物であった。青娥の命令なし
に『主の仲間』に分類される者が現れたのだ。

青娥もその人物に会ったことはなく、ただ芳香から”かそだにき
よーこ”という名前を伝えられたのみである。

最初はこれを軽視していた青娥であったが、徐々に事を重く見る
ようになっていった。

これはともすれば『主』に自分以外の誰かが現れ、乗っ取りが発
生するかもしれない可能性を秘めたエラーである。

よってそうした認識誤差は徹底的に除去しないと、後に一大事が
起きてからではもう遅い。

故に青娥はあの時に芳香の記憶を除去したのは正解だと思ってい
たものの、それだけでは気が済まずにいた。

気が済まずにいたものの、原因が何か分からない以上何をすれば
良いのか根本的な指針を立てることができないのが現状であった。

つい先ほどまで苛立っていたのもそのためである。

(ここでこれ以上考えていても、時間の無駄かもしれないわ)

歯磨きを芳香の口の中に先端を突っ込んで、適当に掻きまわしな
がら、青娥は考えた。

多少雑ではあるが、芳香は文句を言わないので、別に気にするこ
とはない。

「芳香」

「はひ？」

「今日は墓場に出向かず、ここに残って腕を治していなさい」

「はーひ」

「私以外の誰かが来たら、きちんと八つ裂きにするのよ？」

「はーひ」

とは言つたものの恐らく侵入者など来ないと青娥は読んでいた。彼女の狙いは別にある。

念のため芳香を墓場から遠ざけた上で、その”かそだにきょこ”とやらがどんな人物か見定めようと考えたのだ。

『チビで弱くて逃げ足ばかり速い』という芳香の評価から、恐らくはその辺の妖精または下級妖怪と言つたところだろう。

しかしながら芳香の頭が異常をきたした原因がそこにも限らない。

我が目で見なければ確信は持てない、青娥はそうした現物主義者でもあつた。

「はい、おしまい」

青娥はそう言つて芳香に齒ブラシを握らせると、再び自身の髪を梳かし始めた。

先ほどまでは単なる時間つぶしの意味合いの強いお洒落であつたが、今のは違う。

外に出るためのお洒落、そうした身だしなみには手を抜かないのが彼女の流儀である。

そして、その青くて長い髪を頭上に結いあげると、

「それじゃあ芳香、後はよろしくね」

そう言つて化粧用鏡の前から立ち上がり、部屋を出ようとした。

「青娥娘々、どこに行くのだ？」

背後から芳香にそう尋ねられ、青娥は

「私がどこに行こうと関係ないはずよ。芳香、貴方は私から下された命令を遵守していれば良いの」

「そーかあ、そーだったな。じゃあ、そうする」

「そうそう。流石は我が下僕、物分かりの良い子ね」

と言い残し、今度こそ霊廟を出ていった。

地下に広がる霊廟と地上の間には屈強な地面があるが、見方を変えればそれは”土の壁”である。

壁抜けの術を習得している青娥にとって、大地をすりぬけて地上に出ることなど造作もない事であった。

翌朝。

結局、青娥は”かそだにきょーこ”を探しているうちに夜明けを迎えてしまった。

墓場に常駐している妖怪と見ていたが、どうやらそうではなさそうだ。

もしかしたら各地徘徊型の妖怪がたまたま芳香とタイミング良く（悪く、かもしれない）出会っただけなのかもしれない。

（万が一そうなら厄介ね）

久々に見る朝日を眺めながら、青娥は途方に暮れていた。よくよく考えてみれば、下級妖怪など幻想郷に溢れかえっている。つまり今自分がやろうとしているのは、広大な砂漠に落とした砂金1粒を探すような非効率的所業なのではないかと、そう疑い始めた。

そもそも、仮に砂漠に落とした砂金を見つけれたとして、それは見つける価値のある物なのだろうか。

まだ確証は無いが、そいつは恐らく『芳香にバグを起こさせた』という1点を除いては何の特筆事項もない弱小妖怪だろう。

見つけた末に話を聞きだし（場合によっては解剖し）、『ああやっぱり問題は芳香側にあったのか』と落胆する光景が今から目に浮かんで仕方がない。

少なくとも徘徊型妖怪であれば、今後しばらく芳香と遭遇する確率は低いはずである。

そう考えると、この問題は少なくとも今即急に解決すべき物ではないように思え、青娥の士気も駄々下がり的一方であった。

（もう、帰ろうかしら）

帰ってもかまわない、どうせ芳香には外出する理由は何も話していない。

そういう誤魔化しを不思議がらず『そーかあ』『りょーかい』で済ませてくれる点だけ見れば、実に良い部下である。

兎も角、記憶の除去といった措置をとった以上、これ以上何かをするのもさほど効果を上げないように青娥には思えた。

「よし、今日のところはこれくらいにして帰りましょうか」

1人ごとを眩きながら、周囲に誰もいない事を確認した青娥。靈廟に帰る方法は、行くとときと同じく”大地という広大な壁”をすり抜ける仙術を用いようとしていた。

だが、いざ術を行おうとしていたその時、

「芳香ー？ 芳香ー、寝てるのー？」

墓場に元気な声が響いた。

まだ声の主との距離はありそうだが、青娥は反射的に術を止めた。何より、声の主が芳香の名前を知っているという事から、推察できる事は1つであった。

「まさか向こうから引きとめてくれるとは思ってもいなかったわ」

墓石の間を縫うように、青娥は声の主へ迫った。

その声の主は勿論、響子であった。当然、青娥側の事情など知るはずもない。

響子は今、『自分の部屋を貰えた』という喜びの真つ盛りであり、友だちである芳香をそこへ招待しようと考えていただけであった。しかし響子が青娥の事情を知らぬように、青娥もまたそういった響子の事情を知るはずもなかった。

（恐らく、あいつが”かそだにきょーこ”ね。確かに、見た感じパツとしないけど……）

ただ芳香の名前を呼び続ける響子を、墓石の影から青娥は眺めていた。

恐らく、これ以上眺めていても有用な情報は得られないだろう。どういった経緯で芳香のことを知ったのか興味はあるが、それを聞きだすには自分が姿を現す必要がある。

（ま、とりあえず最初くらいはうわべだけでも友好的に取り繕っておいた方がよさそうね）

いきなりとつ捕まえて霊廟に持ち帰り、全てを白状させることも不可能ではない。むしろ手早く事が済み、同時に始末もできて一石二鳥のようにすら思える。

しかし荒っぽい手段は時に思わぬ弊害を招く。相手の事を知りつくすまでは慎重に動いた方が得策である。

青娥は冷静に状況を見極めた末に、青娥はまず和やかな”営業スマイル”を浮かべると、片手で結った髪をほどき、すぐ傍の墓に供えてあつた菊の花を別な方の手で引つ掴み

「あら、おはよう、妖怪のお嬢さん」

墓石の影から響子の前に姿を現した。

「あ、おはようございます。お墓参りですか？」

「ええ、昔の友だちのね。寂しがりな子だったから、たまには来てあげないとね」

勿論全部、即興で作った出まかせである。

とは言え、墓に花を持ってきた（正確にはこの上なく罰当たりな現地調達）青娥を、響子が”墓参りに来た人”と見るのも無理は無い話だろう。

ここまでは全て青娥の読み通りである。駆け引き上手な彼女が簡単に自分の素性を明かすはずがない。

素直な性格である上に嘘をつかれる覚えもない響子が、初対面である青娥の言う事をどうして疑うだろうか。

「ところで貴方、さつきから誰かを探しているようだけど、お友達と待ち合せ？」

青娥がそう尋ねると、響子はちよつと困った顔つきで答えた。

「はい。芳香っていう友だちがこのお墓に住んでいるんですけど、どこ行っちゃったんだか分からなくて」

「あらあら、大変ね」

皮肉にも、その芳香の居場所は青娥がよく知っている。勿論教えるつもりはない。

今回青娥はあくまでも”教えてもらう”立場であり、有用な情報を何1つ言わずに済ます予定なのだ。

「それにしても、お墓に住んでいる妖怪なんてちよつと変わっているわね。その子、亡霊か何かなの？」

「いいえ、死体のお化けです」

「死体のお化け？　へえ、ゾンビかキョンシーか、その辺りかしら」
「たぶん」

「私、死体が動くところなんて見た事ないわ。是非1度会ってみたいわね」

青娥はわざと驚いて見せた。言うまでもなく今のも大嘘、動く死体とは毎日のように顔を合わせている。

それどころか、その日の気分で開腹手術を行っているくらいの仲だ。

「……でも、貴方は死体の妖怪じゃないんでしょう？　見た所、妖獣の類みたいだけど」
「山彦です」

「ふーん、山彦ってそんな姿しているんだ。初めて見たわ。山彦ってことは山に住んでいるのよね、友だちに会うためにわざわざ山から下りてきたということかしら？ 友だち思いなのね」

初めて見たのは事実であった。

だが、山彦の別称が”幽谷響”と呼ばれることを考えると、”かそだにきょーこ”という名前は確かに山彦らしい。

表向きは”響子が友だち思いである”ことに感心しながら、青娥は目の前の小娘が幽谷 響子であることに確信を強めた。

一方、響子は『友だち思い』と褒められた事に対する嬉しさで満面の照れ笑いを浮かべながら、

「いいえ、前までは山に住んでいましたが、今はその命蓮寺でお世話になっています」

そう答えた。

この瞬間、青娥は落雷を受けたかのような衝撃を受けた。

心臓の鼓動が跳ねあがり、何とか表情は崩さないよう努力したが、湧きあがる冷や汗を留めることはできなかった。

この事実はいくら青娥であろうとも隠しきれぬ動揺を与えるに充分であった。

（この小娘、ただの野良妖怪どころか、寄りによって寺の……！）

もしも響子がただの野良妖怪であったなら、ここまで動揺することとは無かっただろう。

もしも響子がただの野良妖怪であったなら、深刻な事態とはならなかっただろう。

もしも響子がただの野良妖怪であったなら、どんなに救われたことだろう。

しかし、現実はどうした青娥の願いを空しくも一蹴した。

響子が嘘をついていないことは、これまでのやりとりで青娥も既に分かっていた。

事実、紛れもなく響子は命蓮寺の一員であった。新参であれ、もはや他のメンバーとは切っても切れぬ絆を築いていた。

だが問題はそこではない。

『寺の一員』である響子を、芳香が仲間と誤解した事』こそ最も悩ましき問題である。

（芳香も芳香よ、何を血迷って、よりによってこんな奴と……！）

ここまで青娥が殺気立つのもわけがある。

実は彼女の拠点である大霊廟は、命蓮寺のちょうど真下にある。

いや、正しく言えば大霊廟のちょうど真上に命蓮寺が建てられたのだ。

全ては、大霊廟に眠る聖人の復活を妨げるために。

ではこの霊廟の中に住む青娥はというと、言うまでもなくこの聖人の復活を何より望んでいた。

芳香に墓場を警備させたのも、自身がずっと霊廟の中に住みこんでいるのも、全ては眠れる聖人を守るためだ。

そしてこの聖人の復活を願う青娥にとってみれば、命蓮寺ほど邪魔な存在はなかった。

もし寺の住民がそろって弱者であれば、まず建設初日に焼き払っていただろう。

だが現実には甘くなく、その首領たる白蓮は”妖怪の英雄”と謳われる程の実力者。

加えてその部下に位置する幹部達も、曲者揃いと来たものだ。

うかつに手を出せば、こちらが完膚無きまでに叩きつぶされるかもしれない。

結局青娥は、この現実を甘受することしかできず、せめて寺側の

侵入を防ぐために芳香を墓場に配置した。

だがその芳香が、あるうことか寺側の妖怪を仲間と誤認したのだ。靈廟を守るのに欠かせない戦力を持つのは青娥自身と芳香しかないというのに、その芳香が一時的とは言え事実上無抵抗で陥落したのだ。

もしまた芳香がバグを起こすことがあれば、もしその混乱を寺側に突かれたら、間違いなく大靈廟は陥落する。

千四百年もの間守り続けた眠れる聖人は、二度と目を覚ます事のない黄泉の眠りについてしまう。

そんなことが、この千四百年の努力が水泡に帰されるなどという惨劇が、許されて良いはずがない。

（こいつが、こいつさえいなければ、事はもつと巧く運んでいたというのに……！）

表情こそ微笑んではいたが、青娥は実に腸の煮えくりかえる思いであつた。

「あの、大丈夫ですか？ 顔色があまり良くないですよ？」

そんな青娥の内なる激怒に気づくこともなく、響子は冷や汗を浮かべる青娥のことを気遣った。

「あ、ええ、大丈夫よ。ちょっと夏風邪をひいていてね。今朝も風邪薬を飲んできたからじきに良くなるわ」

「もしよければ、そこのお寺で休んでいきますか？」

言うまでもなく、その言葉を言った響子には悪意など欠片もなかった。

ただ単に、青娥の体調が悪そうに見えたからそう言っただけの、

言わば善意に基づいた提案であつた。

しかしこれが青娥の怒りを鎮めるどころか、火に油を注ぐ結果となつたのは想像に難くないだろう。

（冗談じゃない……ッ、いや待て、いつそのことここで始末するか）

始末、即ち抹殺である。

二度と幽谷 響子という妖怪がこの世を闊歩することは無くなるであろう、強硬手段である。

見た所、今この墓地には自分と響子以外誰もいなそうである。凶行に及ぶなら今がチャンスだ。

それでも目撃者の存在を念入りに危惧するならば、とりあえず響子を霊廟に拉致した上で抹殺すれば良い。

どの道、そうした外部要因さえ考慮しなければ、響子を抹殺すること自体は酷く簡単であろうと青娥は読んでいた。

どう見ても非力な妖怪である上に、この墓場が山から離れている以上、同族の仲間が助けに来ることもない。

唯一の難点は寺側に助けを呼ばれることだが、呼ばれる前にとどめを刺せばどうということとはなかるう。

いずれにしても、抹殺は簡単だ。

（……いや、駄目よ。あまりに簡単すぎるわ）

だが犯行が簡単すぎるという事実は時に枷となる。

たとえば金庫の中の財宝が盗まれたとして、容疑者の中に金庫破りの前科者がいれば、まずその者が疑われる。

誰かが殺害されたとして、容疑者の中に1人だけアリバイのない者がいれば、まずその者が疑われる。

得てして、犯行時に最初に疑われるのは”その犯罪を最も容易に成し遂げられたであろう者”なのだ。

その点からいれば、今この墓場で最も響子を手にかけることが容易なのは、恐らく大霊廟の住人である。

いくら痕跡なく響子を消し去っても、彼女が帰らないことに寺側は疑いをかけるはずだ。

そしてその疑いは、恐らく真つ先に大霊廟に向けられる。

これまで睨みあいでも止まっていた戦いの火ぶたが切られれば、戦力不足の霊廟側が負けるのは必至。

当然、聖人の復活という野望はついえるだろう。

それでは何のために響子を消したのか分からない。

無意味どころか逆効果につながりかねないとあれば、『今は我慢』こそ最善の選択肢』という、寺の建設時と同じ結末に帰着せざるを得ないのだ。

「いえ、大丈夫。帰ったら休むことにするから問題ないわ」

「そうですか、なら良いんですが」

「残念ね。山彦のお嬢さんともっとお話したかったけれど、もう行くとするわ。また会ったら、今度はゆっくりお話ししようね」

「はい、いつでも来てくださいね」

「それじゃあね、山彦のお嬢さん。とても楽しい時間をありがとう、次に会える日が楽しみだわ」

そう言つと、青娥は響子に背をむけ、その場を立ち去つた。

（3度目の会える日は来ないでしょうけどね）

と、内心で独り言を呟きながら。

ところが、2人以外だれもいないと思われた墓場であつたが、実際は響子と青娥が会話をしていた場所から墓石2つほど離れた草葉の陰に”彼女”はいた。

青娥は、響子とのやり取りに集中していたためか、とうとう最後まで、最初に彼女が響子に対してそういたように、墓石の影から一連のやり取りを見ていた人物がいた事には気づけなかった。

「……なるほどね」

”彼女”は一連の動向を見届けると、そう言いながら墓場を去っていった。

大霊廟に帰った青娥は、ようやく一息ついた。

平静を保ち続けるという重労働のせいで、疲労感が背中からのしかかってくるような感覚に囚われていた。

それでも念のため、今度は芳香を墓場から霊廟内部の警護に当てるように言うのは今やっておくことにした。

最悪の事態を想定し、もう芳香と響子が顔を合わせる可能性をゼロにしたかったのだ。

「今帰ったわよ、芳香」

そう芳香を呼ぶと、芳香はすぐにやってきた。

折れた右腕は直ったようで、威勢良くピンと両腕を伸ばしていたが、その右手にはなんと、また歯ブラシが握られていた。

「青娥娘々、腕を治すのに霊を食べたら、また歯に詰まって取れん

のだ。取ってくれ」

その無垢な笑顔に、青娥は酷い頭痛を覚えて、思わず頭を抱えた。

「ああ、私も貴方みたいに、何も考えずに楽しく生きられたらどんなに素晴らしいことか」

「お？ よく分からんが、私は生きてないぞ、死んでるぞ？ それとも青娥娘々も仲間となるかー？」

「……ごめんなさい、今のは聞かなかったことにしてくれるかしら」
「りょーかい」

青娥は芳香の能天気な態度を見てため息をつく、芳香の手から歯ブラシを取り、出かける前と同じように歯磨きを始めたのであった。

十八話目：芳香ちゃんは誰の手に（後書き）

誰だよおまええ

はい、どうも。作者の兎です。

なんとかどうにか週1ペース投稿を確立しつつあります。

ようやく神霊廟ストーリーに突入しましたが、今回はにやんにやん度全開でお送りしました。

なんか冷戦オーラをかなり強めた配色となりましたね。

この前は最後にちよっぴり出て話の全てを持っていた邪仙様が、今回はメインを張りました。

邪仙様怖いです。彼女がいるだけで地の文が膨れ上がります。邪仙様怖いです。

それにしても、響子がいるシーンで響子以外の誰かにフォーカスを当てながら話を書いたのはたぶん初めてだと思います。

改めて気づきましたが、素直な子って良いですね、作者に優しいですよ、本当に。

ところで。

十五話、十六話、十七話、十八話と一輪さんと船長さんを書いてません。

そろそろ中毒症状が出始めました。次こそ出てもらいます。

絶対。

十九話目：一輪さんの接客業務（前書き）

前回のあらすじ

ついに自分のお部屋をもらった響子（十六話目）。

友だちである芳香を呼びに墓場に出かけてしまったそうです（十八話目）。

一方その頃の命蓮寺では、というと。

十九話目：一輪さんの接客業務

響子がお墓に出かけてしまった一方、同時刻の命蓮寺ではという
と。

「ねえ、一輪。うちの庭ってこんなに広がったっけ」

庭の掃き掃除を初めてまだ10分、早くも疲れ気味の様子な水蜜
は同じく掃除中の一輪に愚痴をぶつけていた。

今日は響子がお墓に出かけてしまったので、久々に2人で庭掃除と
いったところである。

しかし一輪とて伊達に千年以上水蜜というわけではなく、

「何を今更」

と、振り向く事もなくあっさり流した。

「ねえねえ、ここは一輪に任せて私廊下の水拭きの方やってきてい
い？ あまり砂埃って好きじゃないのよね」

「口を動かす暇があるなら手を動かしなさい」

「えー」

「しのこの抜かすと、夕飯の味噌汁抜きにするわよ」

「なんという職権乱用」

「ご飯を人質にするというのは、炊事番である一輪にとって常套手
段である。」

水蜜は兎も角、食欲旺盛なナスーリンにはこれがよく効く。”働
かざる者食うべからず”とは巧い言葉を考えた人もいたものだ。

「でもさ、砂埃なんていくら掃いても風が吹けばどうせ元に戻るんだからさ、このくらいでいいんじゃないかな」

「あんたねえ、少しは響子の真面目さを見習いなさい」

「いやね、私だってどちらかと言うと真面目な方なのよ。でも、何事にも相性って物があって――」

水蜜がそう言いかけた、ちょうどその時。

ドツと突風が吹き荒れたかと思うと、

「邪魔するぜーッ」

と、威勢の良い声を引き連れて1人の訪問者が上空から命蓮寺の庭、ちょうど一輪と水蜜の間に割り込むように着地した。

大きめの黒帽子に黒白の服といった自己主張の強い格好、箒に乗って遊覧飛行と言えば幻想郷で知らぬ者は少ないだろう。

弹幕業界における屈指の有名人、霧雨 魔理沙。命蓮寺住民も過去に弾幕を交わした相手なので、顔を知らぬ仲ではない。

むしろ”知り合い”という言葉で片付けて良いのかどうかも怪しい事情があるくらいだ。

「あー、久々に厄介な奴がやってきたわね」

「……風が吹くまでもなかったか」

その登場に一輪は”面倒な客が来たぞ”とげんなりし、水蜜は今自分が掃除したところに砂埃が舞い込んだのを見てげんなりした。

「なんだよ、2人とも私の顔を見た途端に腐りかけの梅干しみたいな顔しやがって。女の子の顔見てげんなりとか失礼だからやめろよな」

「普段からの行いが悪いからげんなりされるのよ」

「そついつのを偏見って言うんだぜ？」
「いや偏見じゃないし」

正直なところ、人を小馬鹿にしたような魔理沙のその態度が、一輪は苦手だった。

水蜜はその辺りについてさほど気にしていない様子だが、それとは反対に一輪がそこまで苦手意識を寄せるにはそれなりの理由があった。

ぬえやナズーリンも魔理沙と同じくらい癖の強い性分の持ち主だが、2人とも知略と炊事番としての立場を駆使すればある程度の制御はできる。

だが外部の人間である魔理沙にその手段が簡単に通じるはずもなく、その癖に尊大な態度で無茶な要求を突き付けてくるので、一輪が苦手に思うのも無理はない話であった。

しかし、魔理沙の本当に厄介な点はそこではない。

「まあ、そんなわけで久しぶりに上がらせてもらうぜ」

いつものように他人の都合を気にするような素振りも見せず、魔理沙はまるで庭先から寺に向かって歩き出そうとしたが、

「ちょっと待った」

そんな彼女を水蜜が呼びとめた。

「……なにか？」

「せっかく箒持っているんだから、貴方も掃除していきなさいよ。貴方のせいでまた砂埃が立っただし」

「お断りだぜ。おまえがやればいいじゃんか、どうせ暇も職も持て余してるんだろっし」

無駄な時間を過ごさせられて魔理沙は苛立ち始めたが、水蜜もそれで引き下がるような貧弱度胸の持ち主ではない。

「まあ、暇を持て余してるのは事実だと認めよう。しかし、聖輦船の船長という名誉ある職を任された私を無職扱いとは愚問にも程があるわ」

「嘘つけ。その船が飛ばなくなった今、”船長”っていう肩書も実質無意味なだけだろ？ そんな”名ばかり船長”は庭掃除がお似合いだぜ」

「ところがどっこい、今は確かに命蓮寺として構えていようと、その本質は聖輦船！ 飛ばうと思えばいつでも飛べる以上、私はただ実質的船長なのよ」

話題が聖輦船に移り、水蜜のテンションが上がりはじめた。
白蓮救出後、魔界から帰った直後に”聖輦船”は改築されて”命蓮寺”となった。

どちらが本質的な姿なのかは定かではないが、いずれにせよ、また寺から船に戻ることは可能なように改築したのは事実。

まだ1度も実現していないとは言え、いずれは幻想郷遊覧船や魔界定期船などとして再び聖輦船を飛ばす日が来る事を、水蜜は密かに楽しみにしていた。

ところが、そんな水蜜に

「だからさ、”飛ばうと思えば飛べる”とか”しようと思えばできる”とか、そういうエア能力は実質ないも同然なんだよ。飛べる飛べると言っただって実際には飛ばないんだから、それって『飛べない』と言いきっても良いと思うぜ」

非情にも魔理沙は冷や水を浴びせた（船幽霊に対して”冷や水を

浴びせた”というところ、どうも言葉の意味が変わってきてそうだが。

「そう、ふーん。あくまで否定するって言うのね。まあ、いずれフライトの日が来れば真っ先に乗せてあげるわよ。ただし――」

そう言いながら、水蜜は背負っていた錨を魔理沙に向かって突きつけた。

「貴方がその前に三途の小舟に乗らなければ、の話だけだね」

分かりやすい宣戦布告。

聖輦船をこよなく愛する水蜜が、それを小馬鹿にされて怒らぬはずがなし。

「ああそうかい」

そして、そんな宣戦布告にはノリ良く応じてやるのが魔理沙の性分。

上着のポケットからミニ八卦炉を取り出し、それを水蜜に向かって突きつけながら、

「だが私に言わせれば、むしろおまえの方がさっさと三途の川を渡るべきなんじゃないか？」

と威勢よく啖呵を切った。

一触即発の場面に、今回は見物側に回ることとなった一輪は固唾を飲んで場の様子を見ていた。

そして――

「あら、聞き覚えのある声だと思ったら魔理沙じゃない」

という声に3人がその声の方を向くと、騒ぎを聞きつけたのか、縁側まで白蓮が出てきたところであった。

まさかの白蓮登場を受けて場の空気は一変、いつ弾幕勝負が始まってもおかしくない緊迫した雰囲気から、始めるに始められぬ微妙な空気になってしまった。

「お、出たな大将。そうだ、忘れるところだった。今日はおまえに話があつて来たんだ、こんなところで油売ってる場合じゃなかったぜ」

魔理沙はそう言いながら、出したミニ八卦炉をまたポケットに引っ込めてしまった。

「私に話？ 何かしら、とりあえずこんな所で話すのもなんだし、あがつてちょうだい。すぐお茶とか持つていくわ」

「言われなくても、断られても、抵抗されても、あがるつもりでいたけどな」

白蓮から直々に許可を出された魔理沙は、まるで自宅に戻って来た時のように寺に入っていた。

その後ろ姿を見て、一輪はますます強く心労を覚えた。

魔理沙の最も厄介な点は、その人を小馬鹿にする態度でもなく、無茶な要求をつきつけてくることなく、弾幕勝負に滅法強いことでもない。

そんな絵に描いたような小悪党でありながら、この命蓮寺の首領、白蓮の”お気に入り”である点である。

「ねえ、一輪。私はこの感情をどこにぶつければ良いと思う？」

錨を構えた姿勢のまま、どう動いて良いかも分からず、水蜜はその場で固まってしまっていたが

「そんなの私の方が聞きたいわよ」

行き場の無いわだかまりを抱いている点では、それは一輪も同じであつた。

命蓮寺に來た茶菓子はまだ日持ちしない。

炊事番である一輪が寝静まった深夜を狙つてぬえが忍び込んでつまみ食いをしたり、『古くなつた菓子を客に出すわけにもいかないだろ』とわけの分らない言い訳を唱えながらナズーリンが堂々と食べてしまつたりするからだ。

そんな菓子類に厳しい環境である割に、來客用に羊羹が残つていたのは奇跡と言つても良さそうであつた。

結局、主人を厨房に立たせるのも氣が咎めると言つ事で、代打で一輪がお茶を淹れる傍ら、その羊羹を切っていた。

いくら氣にいらぬ相手であるうとも、白蓮が向こうを客として扱っている以上、私事を挟まず淡々と仕事をこなしていく。

（それにしても、姐さんも、何と言つか変わったところがあるわね）

古くからの付き合いである一輪から見ると、どうも白蓮は小悪党に甘い傾向にあるように思えた。

魔理沙もそうだが、白蓮復活の際にあたり（事情を知らなかったとは言え）復活を拒み邪魔を働いたぬえのことも『もう過ぎたことだし気にしていないわ』とあっさり許してしまったばかりか、その後も身内として面倒を見続けている辺りを見ても、やっぱり甘い。そもそも元人間、それも高僧という素晴らしき身でありながら、本来は人間に悪さを働く存在である妖怪を保護しようという考えを抱いた時点で飛びっきりの変人である。

そういった”変人”でなければ、一輪をはじめとした妖怪である今の仲間とは縁を築くこともなかっただろうと思えば、一概に好ましくない事とも言えないが。

（ま、それが姐さんの良いところでもあるか）

2人分の冷茶を淹れ、羊羹2皿と一緒に盆に乗せ、それらを持って一輪は応接室へと向かった。

実際にこの部屋を客間として使うのは、割と久しぶりである。

「お茶淹れてきました」

応接室に入ると、白蓮と魔理沙が和やかに話をしている最中であつたが、2人とも一輪が入って来たのに気づいて、

「あら、ありがとう」

と白蓮がお茶を受け取り、

「お、ちょうど良かった。来る途中で喉乾いてたんだよな」

と魔理沙もお茶を受け取った。

一口に魔法使いと言えど、態度だけでもこの差である。

命蓮寺以外にも同じような態度で出入りしているのかと思うと、他人事ながら気苦労が絶えない。

拳句の果てには、茶菓子の羊羹を見るや否や魔理沙が

「あー、羊羹かー。羊羹は昨日、霊夢の所で食べてきたばっかなんだよな。できれば気分的に栗きんとんが食べたかったぜ」

と呟いたのには、流石に一輪も力チンと来た。

「あんたねえ……」

いつそぶん殴つたらどんなに痛快だろうかとも思つたが、そこまで行かずともせめて何か言つてやらねば気が済まない。

この礼儀知らずの小娘に2時間くらいかけてマナーとは何か説教してやりたいと一輪が思つたその矢先、

「そうなの？　じゃあ次から栗きんとんを買つておくことにするわね」

あっさり白蓮が話の腰をへし折つた。

「いや、姐さんもそこまで気を使わなくていいんですよ！？　そんなのこいつが自分で買つて食べれば良いだけなんですから！」

とりあえず一輪は、まず魔理沙云々の前に、茶菓子の羊羹より甘すぎる白蓮にそう忠言した。

本当に、魔理沙に対する白蓮の好待遇ぶりは、『実は弱みでも握られているんじゃないだろうか』と心配になるくらいである。

もっとも、白蓮が脅迫や圧力に屈するはずがない事を考慮すれば、やっぱりこの好待遇は善意に基づいた物であるということになるだ

ろっ。

もしかしたら『自分の封印を解くにあたり協力してくれた』ことや、『魔法使いとしては後輩である』ことに親しみを抱いているのかもしれない。

「じゃあ次来た時に美味しい栗きんとんが食べられることに期待するとして、そろそろ本題に移りたいんだが」

結局は羊羹を美味しそうに頬張りながら、魔理沙はとうとう話を切り出した。

「そう言えば私に話があると言っていたわね、何かしら」

「さっき表にいた死に損ないにも言っただけどよ、確かおまえを復活させた帰り道、今度魔界に船で連れてってくれるって言ったじゃないか」

「ああ、そうね。確かに言っただわ」

「その割には、いつまで待ってもフライト決行日の話が私のところに来ないじゃないか。魔理沙さん結構期待してたんだけどなあ」

一見おどけて言っているようだが、魔理沙は本心では真剣であった。

魔理沙は昔から“魔界は魔法使いのメッカ”と思っている節があり、白蓮から声がかかる日を心待ちにしていたのである。

ところが、いくら待てども船は飛ばない。とうとう魔理沙も業を煮やして、こうして直談判に来たわけだ。

「あらあら、そうだったのね。うーん、嘘ついたつもりじゃなかったんだけど、困ったわねえ」

白蓮は腕を組み、思案しはじめてしまった。

するとそこへ、

「そうです、聖！ 船を飛ばしましょう、今すぐ！」

話を盗み聞きしていたのであろう、水蜜が応接室に飛びこんできた。

先ほどは魔理沙の挑発を受けて弾幕戦にもつれこもったが、船を飛ばしたいという点では水蜜も魔理沙と考えが一致していたのだ。

「日頃から手入れも訓練も怠ってはいませんかね、聖さえその気であればすぐにでも飛ばますよ」

「ほら、忠臣の名ばかり船長もこう言ってるじゃないか。さっさと飛ばそうぜ」

水蜜が豪語し、魔理沙も便乗したが、それらのせいでかえって白蓮はいつそう困ってしまったようであった。

「えーと、ごめんなさいね。2人には悪いのだけど、ちょっとしばらく都合が悪くて飛ばせそうにないわ」

「都合が悪い？ はて、何かありましたっけ？」

水蜜は首をかしげた。

流石に彼女も白蓮のスケジュールを1から10まで把握しているわけではないが、近々ビッグイベントがあるとも聞いていない。

そんなわけで、水蜜はその頭をフル稼働させ、考えられる”聖の都合”とやらを探した。

「ひょっとして、歯科医の予約をしているとか？」

「いや、そういうのではないわ」

「じゃあ、内科とか外科とか、そのあたりですか？」

「どこが悪いとかそういうのじゃないから安心して」

「悪いわけではない、と言うと……、まさか、さんふじ——」

次の瞬間、言葉を遮って飛んできた一輪の鉄拳制裁。

ゴツと鈍い音と同時に水蜜の姿は応接室から消え、代わりに床に水蜜のシルエツトそっくりの形に穴が開いた。

背負った錨の形までくつきり見えるあたり、無駄に再現度が高い。

「……失礼、手が滑りました」

ほぼ反射的にぶん殴ってしまった一輪であつたが、白蓮の前だつたということ进行いだし、一応取り繕つた。

どう見ても”手が滑つた”で起こりうる事象ではないが、白蓮もどう反応して良いか困つてしまい、何も言わなかった。

今日ずっと困りっぱなしである。

「いつ来ても愉快的な所だな、ここも」

魔理沙は床に開いた再現度の高い穴を眺めながら、また羊羹を口にした。

「でも、ま、兎に角。おまえが虫歯になろうと、胃潰瘍になろうと、ぎっくり腰になろうと、さんふじ何ちゃらになろうと、関係ないんだよ。今日が無理だつて言うんなら帰るが、せめてその前に言質くらは取っておきたいもんだぜ。」

で、今日が都合が悪いと言うのなら、いつなら開いているんだ？
できれば人間スケールの数字を言ってもらいたいところだが」

気の長い妖怪達は平気で10年後や50年後の約束をするから、相対的に古い先短い人間にはつきあっている話も多い。

ましてここは恩人を千年かけて救出した、とてつもなく気の長い連中の巣窟である。

笑顔で『じゃあ三百年後にでも』と言われても困るのだ。それこそ幽霊の類になって乗るしかない。

「そうねえ」

白蓮は腕を組んでしばらく考えこんでしまった。

「都合が悪いというか、飛ばしにくい事情があるのよね。まだ先が見えないけど、出来る限り早く手を打つことにするから、フライトはその後ね」

「なんだよ、飛ばしにくい事情って」

「……どうしても話さないと駄目？」

「聞かないうちはこの畳の上から動かないぜ」

魔理沙は構えるようにして座り直すと、自分が座っている畳をバンと叩いた。

すると、白蓮もすっかりまいってしまったようで、腕を組んだまま途方に暮れてしまっていた。

一輪もその事情とやらが何なのか聞いてはいなかったものの、そんな困り果てた主の姿を見るのはあまりに忍びなく、魔理沙の態度の大きさも相まって、とうとう我慢の限界が来た。

「行くわよ、雲山！」

言うが早いか、まず一輪は雲山を魔理沙の周りに取り巻かせ、彼女の視界を奪った。

「なっ」

魔理沙はすぐに気づいたが、何せどっしりと構えるように座ってしまっていたため、速やかに立ち上がることができなかった。

そのわずかな隙をつき、一輪は死角をついて魔理沙を抑えつけた。

「何するんだよ、いきなり！」

「黙らっしゃい、もう容赦しないわよ！ 村紗、縄かその代わりになりそうな物持ってきて！」

一輪が叫ぶと、例の”再現度の高い穴”から水蜜がひょっこり顔を出した。

「鎖で良ければ持つてるけど」

「上等！」

鎖は船と錨をつなぐ大切なパーツ。常に錨を持ち運ぶ水蜜が常備していないわけがない。

しかも地底の鬼も愛用する程度の強度を誇る頑丈な鎖である。

そんな鎖を携えて、水蜜は穴から這いあがると雲山煙幕の中に飛びこんだ。

「あの……、一輪？ 村紗？」

雲山煙幕の中で何が起きているのか分からない白蓮は、その様子を遠巻きに見つめながら2人の名を呼んだが、

「大丈夫です姐さん、すぐ終わらせます。村紗、そっち抑えてて」
「よしてきた」

「おい、おまえ達！　2人がかりとは卑怯だぜ！　離せつてば！」

中で巻き起こる戦いが終わる気配はなし。
そんな戦いが数分間続き、ようやく

「ま、こんなところね」

と一輪が雲山を回収すると、そこにはうつ伏せに寝かされたまま
畳に鎖で縛りつけた魔理沙の姿があった。

「いきなりどういっつもりだよ！」

ちよつと眼がしらに涙を浮かべながら、魔理沙は一輪と水蜜を睨
みつけた。

「あんた、さつき『聞かないうちはこの畳の上から動かないぜ』つ
て言ったじゃない？　動くつもりがないなら畳ごと帰ってもらいま
すよ」

「なんだよそれ！？　ただの屁理屈じゃないか！」

「むやみに姐さんを困らせたんだからつまみ出されてもおかしくな
いところを、せめて筋を通してやっただから感謝して欲しいくら
いだわ」

一輪が返事をすると同時に、水蜜は魔理沙と畳を縛りつける鎖の
端を握ると、

「それじゃ、聖輦船に比べれば粗末な船だけど、ちよつくら久々に
船長業務してくるわ」

と言いながら、畳を引きずるように玄関に向かって歩き出した。

「ちょ、おい、下せよ！　おい、白蓮！　おまえの部下こんなことしてるけどいいのか、これ！」

魔理沙は最後の手段として白蓮に助けを求めたが、

「あら、もう帰るの？　次来る時は、言ってくれば栗きんとん買っしておくわね」

帰ってきたのはどこかずれた返事だけであつた。

「いや、栗きんとんなんか今はどうだっていいんだよ！　分かった、帰る！　帰るから！　今日はおとなしく退散するから！　だから普通に帰らせてくれよ！？　頼むから！」

「はいはい、お客さーん。もうすぐ出港しますからお静かにお願いしまーす」

魔理沙の叫びもむなしく、結局水蜜に連れられて魔理沙は玄関から出て、またしても庭先まで来た。

そして、

「じゃ、出発地命蓮寺、行き先不明、乗客1名様で貸し切り、不定期便たたみ号、これより出港しまーす！」

そう声高々に叫んだかと思うと、ちょうどハンマー投げの要領で置船をぐるぐる回した末に、空高く放り投げた。

いつも錨という巨大な鉄の塊を担いでいる水蜜にとって、人間1人をぶん投げるなど造作もないことであつた。

「ちくしょう、おぼえてろよお！」

そんな悲鳴にも似た絶叫を残し、魔理沙は青空のむこうに消えていった。

まったく方角も見ずに投げたので、どこに行こうとしているのかは定かではない。

「……ふう、すっかりしてて乗船券チェック忘れたわ」

そして昼過ぎ。

「よし、床板はこんなところかしらね」

「そうね、あとは畳を買ってくればおしまいかしら」

一輪と水蜜は、先ほど壊してしまった”再現度の高い穴”を埋める作業中であつた。

畳は新しく買ってこないとうにもならないが、下の床板は修復が終わつたので、とりあえずひと段落。

水蜜はのこぎりや金づちなど、使つた工具を箱に戻しはじめたが、ふと手を止めた。

「ねえ、一輪」

「何？」

「なんかあいつのために飛ばせてやると考えるとちょっと悔しい気がするけどさ、それにしても聖が言つてた『飛ばしにくい事情』っ

て何か分かる？」

「あ、確かにそれは私も気になったわ。でも、どうも姐さんも言いにくい事情があるみたいだし、無理に聞かない方がいいかもしれないわね。姐さんの性格からして、おそらく個人的な事情レベルではないくらいの理由がありそうな気がするけれど」

「まあ、深い理由がありそうよね。たぶん私には想像もできないような事情なんだろうけどさ、でもいつかもう1度この船を飛ばしたいわ」

そう語り合う2人。

2人とも、この寺の真下にある巨大建築物『大霊廟』の存在は、未だ知らなかった。

そして当然、この寺そのものがその大霊廟の主の復活を妨げる”鍵”であることも。

十九話目：一輪さんの接客業務（後書き）

「珍事件、畳に乗った魔理沙が博麗神社の屋根を破壊」という記事が花果子念報に載ったのは翌日のことであつた。

はい、どうも。作者の兎です。

今回は久々に新登場人物が出てきました。

今時の尊大系魔法少女、魔理沙さんです。

この作品で（前々回に出た早苗が終始守矢神社にいたことを考慮すれば）身内以外で命蓮寺に来たのは彼女が初めてですね。

役者が増えて、話がスムーズに動くか、逆に混戦となるか、それはこれからです。

少なくとも身内以外に誰かが来るというだけでも収穫収穫。

そして何より、久々に一輪さんと船長さんを書きました。

やっぱりこの2人は書いていて楽しいです。本当に。

少しずつ明らかになる神霊廟ストーリーのバックグラウンド。

実は寺側ですらその全てを全員が把握しているわけでもない、そんな感じで書かせてもらいました。

一枚岩もいいけれど、少しずつずれのある構造の方がボク好みなので（なんだそりゃ

久しぶりに、このスペースに何書くか困りました。

とりあえず次回も頑張ります。

たぶん。

二十話目：ナズ君絶体絶命！？

「ぎゃーてーぎゃーてー、はらぎゃーてー」

その日もいつも通り、響子は参道を掃除していた。

結局芳香は見つからなかったが、裏事情など知るはずもない。

またいつか行けば会えるだろうと、その程度にしか受け取っていなかった。

（それにしても――）

ふと手を止め、響子は日の光がまぶしく輝く青空を見た。

（芳香のことは大好きなんだけど、死体と友だちって何だか他の人には言いにくい気もするなあ）

芳香のことは、白蓮には少しだけ話した気もするが、それ以外には”単なるお墓で会った友だち”としか話していない。

寺に招待して皆を驚かせてやろうという気持ち半分、話しにくいという気持ち半分で、響子はそれ以上は語ろうとしなかった。

第一、あの時はあまり話をする事ができなかったなので、響子自身、芳香のことはそれほど詳しく分かっていない。

故に芳香のことを誰かに説明しろと言われたら『死体です』としか言えなさそうな気がしてならない。

もっとも、身内に船幽霊を抱えた寺の住民なら、今更死体が歩いたところで何ら動じないかもしれないが。

「……どうしようかな」

そう呟きながら掃除に戻ろうとした、ちょうどその時。

「どいたどいたあッ、轢き殺されても知らないよッ」

威勢の良い掛け声に響子が振り向くと、立ち上る土煙りのむこう、参道をものすごい勢いで駆けてくる者の姿が見えた。

遠目に見ても、どうも頭頂部に人とは異なる形の耳がうつすら見えるところから、どうも妖獣の可能性が高い。

それもただ走ってくるのではなく、台車のようなものを押しながらこちらへ向かっている。

……と、ここまで冷静に分析していた響子であったが、よくよく見ればその妖獣は”こちらに高速で走って”来ているのである。

本人の言う通り、避けなければ無残な轢死体となる可能性も否定できない。

「ちょ、ちよつと待った！」

大声で呼びかけてはみたものの、むこうは止まる気配なし。

慌てて響子は、集めた塵もそのままに、無我夢中で参道の脇に避難した。

その途端、豪速妖獣with台車、もつと近くから見てみれば赤い髪をなびかせた猫型妖獣、は走る足を止めて踵で立ち、全体重を後ろにかけ始めた。

同時にその靴の、地面と接する踵部分、そして押している台車の車輪からも、目がくらむような眩い火花。加えて鋭いブレーキ音。

目にも耳にも優しくない光景の中、響子は全力で耳を塞ぎながら、ただ彼女の華麗なるブレーキシーンを目に焼き付けていた。

やがて火花が煙に変わり、白煙を上げながら、彼女はちょうど響子のすぐ隣に止まり、

「毎度おなじみ、地獄猫又本舗でございやす！ 何か最近おかわりありませんか？」

何事もなかったかのようにそう言っただけだったのであった。

その、お世辞にも爽やかとは言えない登場シーンに、響子はしばし開いた口がふさがらなかったが、

「……あ、あの、すみませんが、どちら様ですか？」

やっとのことで、基本的なその質問をすることができた。

「おお？ もしや地獄猫又本舗をご存じでない？ その様子だにご存じでない。そう。まいったな、こりゃ」

”地獄猫又本舗”を名乗った彼女は、困ったように頭をぽりぽりかいた。

「ま、長話は好きじゃないから手短かに説明するか。早い話が死体回収業ね。で、あたいはお燐、地獄猫又本舗の店長兼店員兼平兼下っ端、つまりはソロ活動よ。

本当はもつと長い名があるんだけど、あんまり長い名前を言われて覚えにくいのも嫌でしょ？ だからお燐でいいよ、てなわけですよしくね、おチビちゃん」

流れるような早口で燐はそう語りながら響子に対して手を差し伸べた。

握手を要求しているのだ、と察した響子は、”おチビちゃん”という呼び名が少し気にいらなかったものの、恐る恐るその手を握った。

「こ、こちらこそよろしく願います。あと、私には響子つています」

「おお、響子か。なかなか洒落た名だね。気にいった、今後も仲良くやろうや、おチビちゃん」

” 気にいった ” という割には直すつもりはゼロらしい。

それは兎も角、響子は自分の名前の事の他に、その ” 死体回収業 ” という彼女の職業（？）が気になっていた。

「あのー、それでご用は？」

「おつといけない、忘れるところだった。つまり、ほら、死体集めは黒猫の甲斐性って言うてね。おチビちゃんの周りに余ってる死体ない？ もれなく引き取るよ」

死体と言われて思いだすのは当然芳香のことである。

回収されては困るが、なんとなく死体にはくわしそうなので、死体の生態（！？）を聞いてみるにはちょうど良い相手かもしれない。

「お隣さん、死体には詳しい方ですか？」

「おいおいおチビちゃん、きつい冗談だね。そいつぁ鬼さんに『お酒飲めますか？』って聞いているようなもんだ」

相当な自信があるらしい。

そこで響子は期待あふれる笑みを浮かべながら、隣に尋ねた。

「じゃあ聞きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「お、相談かい？ よし来た、同じ妖獣のよしみだ、人生の悩みから葬式の相談までなんでも答えてあげようじゃないか」

「やった！ あのですね、死体妖怪と仲良くなるコツとがありますか？」

「死ねば？」

「!？」

その燐の爽やかな即答に、響子の表情は凍りついた。

「……はい？ いや、えっと、あの……」

「あのね、おチビちゃん、死体と仲良くなる最高の近道は自分が死体になることだよ。死後のことは心配いらないさ、あたいに任せておけば全力でプロデュースしてあげるよ」

「私が死なない方向でお願いします！」

「死なない方向ねえ、うーん……」

燐は腕を組み、しばし眉を寄せ首をひねりながら小難しい顔で思案に暮れていた。

だが猫の考え事なんて5秒続けば長い方であり、燐もまた答えを出すのに4秒しか要しなかった。

「うん、頑張れ」

「えっ？」

「おチビちゃん。確かに、努力すればなんでもできるとは言わないよ？ でもさ、努力で何とかなる事っていうのは努力するのが最善主って昔から決まってるのさ」

「おお、なんか説得力ある答えありがとうござ——」

「ま、自慢じゃないけど」

響子の答えを半ば無視するように遮って、燐は話を続けた。熱く。

「あたいだって昔は落ちぶれた一匹黒猫だったもんさ。でもさ、”仕官の口を見つけ、いつかは立派な豪邸の立派な炬燵で丸くなる”って目標の下、努力だけは怠ることはなかったよ。来る日も来る日

も死体を探し、死霊を喰らい、足が霜焼けになっても休む間もなく、不吉な化け猫と呼ばれ住処を追われてもめげることなく。今の華々しいあたいがいるのは、きつとそういう惨めで涙ぐましい日々の積み重ねだね、うんうん。ま、自慢じゃないけど」

どう聞いても自慢である。

それにしても、ここまで饒舌な人を響子は今まで見たことがなかった。

根は良い人に違いなさそうだが、『返事する機会を与えない喋り方』というのは”返事を重んじる”山彦と相性が悪そうである。

「で、さてと。そろそろビジネスの話に戻っちゃうけどさ。おチビちゃん、余ってる死体ない？ どうせ素人に死体はうまく扱えるはずがないんだ、置き場に困ってるでしょ？ もう大丈夫、そんな悩みとはもうさよならだ。このあたいが全部引き取るよ」

「た、たぶん、ないと思います」

その勢いにたじろぎながら響子が答えると、燐はさらに語気を強めた。

「本当？ 嘘ついちゃいけないよ？ 嘘ついたら閻魔様に舌を抜かれるし、その舌だつて地獄の焼き肉屋で安く提供されちゃうんだからね。おチビちゃんだつて、焼き肉屋に行つて『嘔吐きの舌』つて名目で自分の舌が出されたら嫌でしょう？」

「ないと思います」

「またまた御冗談を。ここはお寺でしょ？ お寺つてことはお葬式の間だ。裏には墓地もある。言わば死体パライス、少しくらい余ってるのあるでしょ？ そうだ、本業は死体集めだけど亡霊や怨霊も扱ってるよ。怨霊は冬なら床暖房にちょうど良いけど、夏は暑苦しいだけで邪魔な存在でしょ？ それならあたいがもらっていくよ」

「ないと思います！」

思わず大声が出てしまったのには理由がある。

死体も怨霊もない寺だが、亡霊の類はいる。しかも困ったことに余っているわけではない。

何を隠そう、船幽霊、水蜜の事だ。幸い今は一輪と一緒に買い物に出かけているため不在だが、持ち帰られるわけにはいかない。

死後、自分の舌が居酒屋で提供されるのに抵抗があるかないかと聞かれれば、おおいにあるが。

（舌は山彦にとって喉と同じくらい大切な商売道具、例え死後とは言えそう簡単に取りられるわけにはいかないのだ）

「あーん、もう。あるでしょ？ おチビちゃんが忘れてるだけで絶対あるでしょ？ 腐りかけでもいいからさ、1つくらいちょうだいよ。可愛い子猫ちゃんに愛の手を」

「そ、そんなこと言われても……」

”愛の手”どころか”相の手”を入れるだけで精一杯である。

響子はすっかり困ってしまった。第一、この寺で死体を見たことなど（芳香を除いて）1度もない。

それなのに『死体をよこせ』と迫られても、どう対応して良いか分からない。無い物は無いのだ。

そうしているうちに、そんな風に困惑してしまった響子の様子から、流石の燐もようやく事情を察したようだ。

「——よし、分かった。ちょいと残念だが、おチビちゃんが知らないって言うんなら仕方ない」

燐がそうため息をついたのを聞いて、ようやく響子は安堵した。少し失礼な話はあるが、このまま無理な要求を突き付け続けら

れるくらいなら帰ってもらった方が双方に優しいはずだ。

なので、このまま燐が諦めてくれると思ったのだ。

「じゃあさ、このお寺の一番偉い人連れてきてよ。その人と交渉することにしたわ」

現実是非情だった。

「聖様、聖様」

さてさて、肩から荷が下りたとは言え困ってしまったことには変わりの無い響子。

半ば助けを求めるような心情で白蓮の部屋に直行した。

「あらあら、どうしたの？ そんな困った顔して」

「実は表に死体回収業者って人が来ていて――」

そこから響子は事情を簡潔に話した。

燐という名の死体回収業者が来て、死体を要求している事。

とりあえずうちには死体がないことを伝えても帰ってくれない事。拳句の果てに”一番偉い人を呼んで来い”とさらなる交渉をねだっている事。主にこの3点。

「……ふんふん、なるほど。でも困ったわ、流石に死体はないのよ

ね。そもそもうちってお葬式を執り行ったこともないし」

「そうですね。そう言えば、うちってお葬式は専門外なんですか？」

「そんなこともないわよ。でもね、お葬式は誰かが亡くなった時にすることでしょ？ 妖怪はみんな不老長寿なもの、人間ほど頻繁にあるはずないじゃない。それに、めでたい行事でもないし、ないならない方がいいわ」

「確かに」

白蓮の話に、響子は納得したように大きく頷いた。

余談だが、葬式を”悲しい行事”と捉えるのは生者にとっては大體共通の概念と言ってもいいだろうが、死者側からすればそうでもない。むしろ”新参歓迎会”と称して大喜びする事が多いくらいである。

もし命蓮寺でお葬式を執り行おうものなら、参列者の目前で、寺側のスタッフであるはずの水蜜（故人）が、この上なく清々しい笑みで

『死後の世界へようこそ。人生短しとは言っけれど死後は長くて気楽だからね、まあまあ、まずは川を渡る前にいっぱい呑みに行こうじゃない』

と、葬式の主役たる死霊を連れて居酒屋に行ってしまう光景は、あまり想像に難くない。

ここらで閑話休題。

「兎に角、私が呼ばれているのでしょうか？ ちょっと話をつけてくるわ、流石に裏のお墓を掘り起こされるのは困っちゃうし」

白蓮は立ちあがり、部屋を出ていった。

燐を待たせている応接室に向かったのだろう。

響子も白蓮の後を追うように部屋を出て、その様子を見に行こう

とした。

だが、部屋を出たところで

「話がある」

「えっ、わっ」

不意にグイツと左腕を掴まれ、隣の部屋に引き込まれた。

よく見てみると、自分の腕をつかんでいたのは、いつもに増して
仏頂面のナズーリンであった。

「な、ナズーリン？ どうしたの、いったい」

「聞いたよ、図々しい悪徳業者が来ているんだってね」

「え？ そうだけど、まさか立ち聞きしてたの？」

「立ち聞き？ そう思われるのは心外だな、君も聖も声が大きいから、隣の部屋で耳を澄ますだけで聞こえるんだよ」

「それって立ち聞きと何が違うの」

相変わらず悪びれる様子の無いナズーリンだが、その辺りについては響子ももう慣れた。

「まあ、そんな概念的問題はどうでもいいんだよ。それより、聖に
そういった交渉業務をやらせるのはいかなものかと思うんだよ、
私は」

「え？ どうして？」

「考えてもごらん。人がよすぎる聖のことだ、向こうがお涙頂戴な
話を語ったらどんな要求だって同情しながら飲む事くらいすぐ分かる
じゃないか」

ナズーリンは腕を組み、『そんなことも分からないのか』と言いたげな趣きで酷く呆れていた。

そう言われてみると、たしかにそういった結末は容易に想像でき
てしまうので、尚更響子は困ってしまった。

「だ、だって、お隣さんは『寺で一番偉い人を連れてきてくれ』つ
て」

「ああ、君はどこまで馬鹿なんだ。一見の客がこちらの上下関係を
把握しているはずないじゃないか。そういう時は適当に一輪あたり
を連れていけばいいんだよ」

「でも、一輪さんと船長さん、でかけちゃってるし……」

そう響子が言うと、流石にナズーリンも言葉を詰まらせた。

「……仕方ない。こんなつまらん用事のためにご主人様の力をお借
りするのも失礼な話だろう。聖が変な要求を飲まないうちに、私が
追いついてきてやるよ」

ナズーリンはため息をつきながら響子を置いて部屋を出ていつて
しまった。

ただ1人残された響子であったが、

（いや、むしろナズーリンが話に混ざった方がややこしくなるんじ
ゃないかしら）

と思い、その後についていった。
ナズーリンもそれに気づいたが、

「なんだ、君も来るのか？」

「うん、まあ」

「ふーん。私は別にどっちでも良いが、邪魔だけはしないでくれよ」

響子が来ることにそれほど興味を示していなかった。いつものことだが。

こうして、応接室手前までやってきた2人。中から白蓮と燐の話す声が聞こえる。

そこでナズーリンは、響子の行く先に腕を伸ばし、無言で静止させた。

「……どうかしたの？」

「しっ、静かにしてくれ。中の話が聞こえん」

ナズーリン立ち聞き再び。

そこで、本当はあまり良くないことだと知りながらも、響子も耳を澄ました。

「……いやあ、特に最近は巧く行きませんよ。嵐が吹き荒れる夏の夜も、雪が降り積もる冬の夜も、休まず働けど行く先行く先徒労に終わる事ばかり。死体がないとうちはやっていけないっていうのに、あたいはただ、主からの期待に応えたい一心で働いているのに、誰も協力してくれないんですから」

「そうなの？ どういったわけかと思っていたけど、貴方も苦勞しているのね」

中から、熱く語る燐と、それに同情する白蓮の話が聞こえてきた。

「ほら見る。あんな安っぱい与太話で既に陥落寸前じゃないか」

ナズーリンは呆れながらため息をついた。

「でも、そこが聖様の良いところだと思っよ、私は」
「どうだかね」

響子が必死にフォローを入れても、ナズーリンは依然として不機嫌そうであった。

思い起こせば、響子も初めてこの寺に来た時、大体こんな感じで白蓮に自分の悩みを打ち明けた覚えがある。

はつきり言って今の自分がこうして寺で働いているのも、あの時白蓮に優しく受け入れてもらえたからだ、今なら思えるのだ。

だが、どうもナズーリンにとってはそんな白蓮の態度が気にいらならしい。

響子にはナズーリンが何を考えているのか常日頃から分からないが、今の彼女については特にさっぱり分からなかった。

「兎も角、このままだと話がとんでもない方向に流れていきそうだし、まずはその死体屋というのが何者なのか拝見させてもらおうじゃないか」

そう言って、ナズーリンは応接室の中に踏み入り――

「あら、ナズーリンじゃない。どうかしたの？」

「おお、妖怪鼠！ いいねえ、こんな立派で食べ応えのありそうな鼠は久々だよ」

白蓮のことは兎も角、隣の顔を見るや否や、即座に顔が青ざめた。あれだけ”追い出す”と言っていた割には、あつというまにやる気消沈。ただ、その蒼白な顔でその場に立ちつくすだけの存在と化してしまった。

「ナズーリン？」

白蓮に語りかけられ、ようやく我に返ったかのようにナズーリン

は話し出した。だが足は震えている。

「……い、いや、失礼。ちょ、ちょっと様子を見に來ただけなんだが、ま、まあ、今唐突に急用を思い出してね、す、すぐ戻るとするよ。いや、誤解しないでほしいが、ね、ね、ね、猫なんか怖くもなんともないからね、うん、こわくないさ、ちつともこわくない、それじゃあ失礼するよ」

もはや”平常”という言葉とは程遠い態度で、ナズーリンは響子を押しのけるように部屋から出ると、目にもとまらぬ速度で奥に消えていった。

「ちょ、ナズーリン！？ 待つてよ、どこ行くの！？」

慌てて響子もその後を追った。

そんな様子を目の当たりにした白蓮と燐。

「ナズーリン、まだ猫が苦手なのね。ああ、お燐、ゴメンなさいね、ナズーリンは種族的にどうしても猫が苦手なのよ。気を落とさないで」

「気を落とす？ とんでもない！ 今時の鼠は皆ませてきてましてね、あたいら猫を見ても怖がる素振りも見せないもんだから、つまらないのなんのつて。それに比べてどうです、なかなか良い鼠がいるじゃないですか、ここは！ いいねえ、可愛いねえ、是非とも友だちになりたいくらいですよ！」

そう答えた燐の目は、偉く輝いていた。

「なんで猫だつて言つてくれなかつたんだよ！ 馬鹿か君は！ 不親切にも程がある！」

全速力で逃げ出したナズーリン、響子の部屋に駆けこむや否や押し入れの中に立てこもってしまった。

「ナズーリン、出ておいでよ。私が付いていてあげるから」
「君なんか信用できるか！」

押し入れの襖越しに響子が呼び掛けても返事は冷たい。

「ねえ、ナズーリン、きっと大丈夫だよ。お隣さんも話が分かる人だと思ふよ、たぶん」

「その”きつと”とか”たぶん”とかはなんだ！ 信用できないのが見え見えじゃないか！」

「……そんなに猫が怖い？」

「当たり前前事を聞くな！ あんな野蛮で獰猛で気まぐれで愛敬の欠片もない飢えた下等生物と、君は本当に手を取り合えると思つてゐるのか！？」

何もそこまで言わなくても、と響子が思つたちやうどその時。

「野蛮？ 獰猛？ 愛敬の欠片もない？ 飢えた下等生物？ ほう、好き放題言つてくれるねえ」

と、聞き覚えのあるあの声がしたかと思うと

「じゃじゃーん。地獄猫又本舗、お隣ちゃん参上です」

なんと、どう嗅ぎつけたのかは知らないが、陽気な声と一緒に隣が飛び込んできた。

「うわあああッ、なんで来てるんだ！　なんてついて来てるんだよ！　ふざけるなッ、帰れ！　帰ってくれ、頼むから！」

押し入れの中で絶叫をあげるナズーリン。

姿は見えないが、もうどんなポーズでいるのかなどすらも容易に想像がつく。

恐らく、押し入れの隅で頭を抱えて体育座りしているに違いない。

「いやいや、あたいを誘ったのはあんたの方じゃないか、鼠ちゃん」
「誰が誘うものか！　戯言並べる暇があったら今すぐこの部屋を出て行け！　出て行かないと後で酷いぞ！」

「いつのかなー、そんなこと言っちゃっていつのかなー、押し入れ開けちゃうぞー」

「分かった分かった、謝る！　謝るからもう勘弁してくれよ！　私は何をしたって言うんだ！」

調子に乗ってはしゃぐ隣に、もう死にそうな声であれこれ叫ぶナズーリン。

これには、傍から見ていた響子も思わずナズーリンに同情してしまった。ここまで追い詰められては、あまりに可哀想過ぎる。

「あの一、お隣さん？　その辺で止めて向こうに戻りませんか？」

「ああ、おチビちゃん先戻っていいよ。あたいますぐ行くから」

この時、響子は思った。『燐とナズーリンを2人きりにしてはいけない』と。

とは言え、燐というこの猛者は一筋縄ではいかない相手である。正直なところ、良い策が浮かばない。

最善手は白蓮が星を呼ぶことなのだろうが、白蓮はまだ応接室にいるだろうし、星の部屋（つまり廊下を挟んだ向こう側）を見ても誰もいないことから、星の所在は不明。

そして一輪や水蜜は外出中。残りはぬえだが、彼女を呼ぶのは恐らく悪手。この事態を面白がって燐側に加勢するのが自然と予想される。

早くしないとナズーリンがショック死してしまう可能性も見えてきたところで、どのようにして説き伏せようかと頭をひねっていると

「あらら、どこに行ったのかと思ったらここにいたのね」

響子にとっては嬉しい事に、望んでいた頼もしい味方、白蓮がやって来た。

「おおっと、大将さん、ご無沙汰してます」

燐はちらりと白蓮の方をむいたが、すぐさまナズーリンの立て籠る押し入れに視線を戻した。

「あのね、お燐。貴方の友情を築こうとする態度は素晴らしいと思うのだけれど、今はとりあえず向こうに戻らない？ このまま両者の溝を埋めないまま仲良くなろうと言うのも難しいと思うの。だから、まずは文通とかその辺りから——」

「いやいや大将さん、今日のあたいは攻めますよ。思う存分攻めるが吉と見ましたよ」

白蓮は燐の『友だちになりたい』発言を真に受けているのだ。それは完全に偽りとは言わないが、実際に燐の行っている事とは到底近いとも言えないだろう。

何せ、今にも押し入れに飛びつきそうな燐を響子が必死に抑えている状況である。

「うーん、困ったわねえ」

白蓮は首をかしげ

「困っているのはこっちだよ！ もう聖でも響子でもいいから誰か何とかしてくれ！」

ナズーリンが金切り声をあげる。

そうしている間にも、響子の努力も実らず燐と押し入れの距離はじりじり縮まっていくな。

あまり腕力を必要としない山彦である響子と日々死体を求めて駆け巡る燐では、物理的な力量差は明白な物だった。

そして、

「もらったあ！」

「やうっ」

押し入れまであと一歩というところで、燐は最後のワンステップを大きく踏み出した。

もうその勢いは響子にどうにかできるレベルではない。

燐が押し入れの襖の金具に手をかけ、ナズーリン絶体絶命となったその時、

「にやうっ！？」

ぐいつと燐は後ろに引つ張られた。

見れば響子に白蓮が加勢していたのだ。

「まあまあまあ、まずは戻りましょう？　そしてゆっくり作戦を立てなおしましょう？　ね？」

「あーん、そんなそんなそんなあ。ここまで来て戻るなんざ嫌ですよ」

「まあまあまあ
「にやあーん」

燐がじたばたしても、情勢は白蓮に利があった。

いくら燐が妖獣、パワーに自信があったとしても、魔法を用いて容易かつ半無限的に身体強化を行える白蓮が相手では分が悪い。

今度は燐と押し入れとの距離がじわじわ広がっていく。
すると、そこへ

「あの、先ほどから何やら騒がしいようですが、いったい何かあったのですか？」

ようやく星が来た。

恐らく彼女の到来を誰よりも待ち望んでいたのはナズーリンであろう。

「ご主人様！　そ、その横暴な猫を、すぐ追っ払ってください！
ほんとに、さっきから、生きた心地がしないんです！」

必死に主張するナズーリンであったが、一方で燐はというと、何か思っ節があったのか、星をしばしジッと見ていた。

そして少し経ってから

「……もしや虎の妖獣さん？」

と、尋ねたのであった。

「ええ、はい。そうですが」

「おー！ 虎！」

一気にテンション急上昇させ、燐は星の方に駆けだすと彼女の右手を両手で握った。

その転身ぶりの速い事と言ったら。これには響子は勿論、流石の白蓮も唖然としてしまった

まして今やってきたばかりな上に急に握手を求められて、星が一番困惑気味。

「虎と言えばネコ科の大将！ 猫業界の頂点を豹と二分する帝王！

こんなところでお会いできるだなんて『驚き桃の木あの世行き』

とはまさにこのこと！ いやー、猫冥利につきますよ、本当に」

「は、はあ。よく分かりませんが、ありがとうございます」

どう考えても驚いたのは星の方であるが、それはこの際置いておくとして。

「……で、何やらナズーリンが相当困っているようですが、あれは貴方の仕業ですか？」

「ナズーリン？ はて。ああ、あの鼠ちゃんか！ いや、実はですね、あの押し入れの中に弄り甲斐のありそうな妖怪鼠がいてですね、ちよつとガードは堅めですが虎の旦那ならこのくらい——」

「その妖怪鼠は私の部下です。あまり苛めないでもらえませんか？」

「——え？」

星の返事に、燐は思わず言葉を詰ませた。

ここまでその饒舌ぶりをこれでもかと言つくらい發揮してきた燐が、ここで初めて台詞に困つたのだ。

それほどに意外、言わば想定外の範疇外、まさに青天の霹靂とでも言つべきか、そんな感じだったのだらう。

『虎が鼠を部下として抱え持っている』という事実が。

『ネコ科の頂点』が、”ネコにとつての玩具”を、部下として大切がつている』という事実が。

「部下？ あの鼠ちゃんが？ 虎の旦那の？ いやいや、冗談言っちゃいけませ——」

必死に事実を否定したがる燐の、その手を、今度は星が両手で握り返す番だった。

「ですから、ナズーリンは私の大切な部下なんです。あまり苛めないでもらえませんかねえ」

握手という手段を、燐はおそらく友好の証、コミュニケーションの一種として用いただらう。

その時の星は未だ事情を呑みこめていなかったため、とりあえずは同じく同じ意味で握手を返した。

だが今の星がした握手は、それとは意味合いが異なる。

例えば虎が鹿を捕らえる時、まずいきなり噛みつくことはしないだらう。まずは前足で相手を抑えつけ、転倒させ、そして噛みつくのだ。

ここでの握手はまさにその第一ステップ、”前足で相手を抑えつけ”に最も近い。

無論自然界で言えばここで被食側の敗北は確定したもの同然だが、

今は交渉、まだ数ステップある。

トドのつまり、今の星の対応を誰にでも分かるよう直訳すると『四の五の言うと喰うぞ』の一言で事足りる。（実際に喰うかどうかは別として）

獣界の掟、自然の摂理は厳しいのだ。

さて、とうとう困る側に立たされた燐。

ランチをとるつもりがランチになる寸前となってしまうた。

死体獲りが死体になっては笑い話にもなりやしない。

「へへー、おそれいりやした」

町奉行の裁きを受けた町人の如く、深々と頭を下げる最善手をやむなく採用したのであった。

それを聞いて、ナズーリンは

（ああ、やっぱり最初からご主人様に任せておけばよかった）

と此処に逃げ込んだことを悔やみ、響子は

（そうか、立派な妖怪になるとこういう問題も簡単にはぱつと解決できるのか）

と自身の苦勞を振り返りながらしみじみ感心したが、当の星はと言うと、

（ああ、こんな手荒で獣臭さが抜けない方法に頼ってしまうだなんて、私もまだまだ未熟ですね。聖のように聡明かつ理知的な対応を心がけようと決めていたはずなのに）

と早くも自身の行いを反省中、そして目標に掲げられている白蓮

はと言えば

(……応接室に残してきたお茶、冷めてないかしら。やっぱり入れ直した方がいいわよね)

もう次段階に思考が移っていた。

その頃、命蓮寺の表では、というと。

「ねえ、一輪。なんかうちの前に、やたら見覚えのある猫車が止めてあるんだけどさ、私の見間違えか記憶違いだよね？ きつとそうだよな？」

「村紗、現実を見なさい。見間違えでも記憶違いでもない」

「……なぜここがバレた」

「別に隠れ住んでいるわけでもないでしょう。まあ、ある意味面倒な相手が来たという事に対しては同感だけだね」

たった今買い物から帰ってきた一輪と水蜜はまだ知る由もなかった、既に面倒な事が手に余るレベルで起きていると言う事を。

二十話目：ナズ君絶体絶命！？（後書き）

なんだこのアニマル濃度は！

はい、どうも。猫大好き、作者の兎です。

週1ペース確立とか言っておきながら、いきなり3回書きなおしで遅れました。

なんかアニマルな話になりましたね。

「鼠と猫と虎」という種族面が大いに効いてくる話にしたかったのですが、蓋をあければサファリパーク。

それと、前々から何度か言わせてもらってますが、ボクには寅丸と聖のカリスマベクトルは90度違うという絶対正義があり、今回はそれによって書かせてもらいました。

言わば妖獣と妖怪の差でしょうかね。

実を言うと、命蓮寺をテーマに掲げた時から”妖怪”と”妖獣”の違いは大切にしようと思っていました。

きつと種族的に見て、仲間意識は妖獣の方が強いのでしょうか。たぶんそんな気がします。

だから星様にはもう少し獣臭さを残して欲しい。あにまるとらまる。ナズ君もしかり。

”獣臭い”という野蛮で粗暴な気がありますが、”ワイルド”と言いかえれば……、いや流石にこれは意味が違うか。

あと悩むのは、響子は”妖怪”なのか”妖獣”なのかということころ。

そして何と言っても今回は燐さん登場です。

前回に続き、どんどん増える新登場人物。早くもお寺で大暴れ。

かなり喋らせました。ブラックジョークも結構入れました。何だか喋るイメージがあるんですね。かなり。

『猫はお気楽者』という固定概念がボクの中にあるのかもしれない。

まあ喋らないキャラよりはよほど動かしやすいですが。

少し短絡的かつ感情的な感じが出ていたらなあ、と。つまり若さです。若さ。

さーて、一輪さんと船長さんが帰ってきました。

見覚えがあるようです、さあここからどうなるのでしょうか。

それは次回のお楽しみと言う事で（次回予告風味たぶん。

あにまるー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9135u/>

今日も今日とて「はらそーぎゃーてー」

2011年11月24日12時50分発行